

な
那 珂 7 4

—那珂遺跡群第148・150～154次調査の報告—

2016

福岡市教育委員会

な か
那 珂 7 4

—那珂遺跡群第148・150~154次調査の報告—



遺跡略号 NAK-148・150~154
調査番号 1335 1406
1409 1410
1420 1421

2016

福岡市教育委員会



第 153 次調査 SD-001 (東から)



第 151 次調查 1 区出土玉製品

序

はるか二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀の今日もアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、福岡市博多区那珂1丁目で専用住宅および共同住宅建設に伴って実施した那珂遺跡群第148・150～154次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、弥生時代から古墳時代にかけての掘立柱建物や竪穴住居、井戸、土坑などの集落遺構と中世の井戸や溝が発見されました。なかでも弥生時代の掘立柱建物や井戸などは、那珂丘陵におけるこの時代の集落城の拡がりと消長を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、事業主様をはじめとする多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

.....れいげん.....

1. 本書は、福岡市教育委員会が専用住宅等の建築に先立って、福岡市博多区那珂一丁目で緊急発掘調査した那珂遺跡第148・150～154次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 遺構は、掘建柱建物をSB、堅穴住居をSC、井戸をSE、土坑をSK、溝遺構をSD、ピットはSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を通番して01からナンバーを付した。
4. 本書に掲載した遺構の実測と製図は第148次調査を小林義彦が、150～154次調査は大塚紀宜が行った。また、遺物の実測と製図はIとII-1を小林と谷直子が、II-2～6は大塚紀宜と山崎賀代子が作成した。
5. 本書に掲載した遺構と遺物の写真はIとII-1を小林が、II-2～6を大塚紀宜が撮影した。
6. 本書の執筆はIとII-1を小林、II-2～6を大塚紀宜が行い、編集は、両者が協力して行った。
7. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

I.はじめに	
1. 那珂遺跡群の発掘調査	1
2. 立地と歴史的環境	3
II. 調査の記録	
1. 第148次調査	
1) 調査に至る経緯	6
2) 調査組織	6
3) 発掘調査の記録	6
4) 小結	12
2. 第150次調査	
1) 調査に至る経緯	13
2) 調査組織	13
3) 発掘調査の記録	14
4) 小結	18
3. 第151次調査	
1) 調査に至る経緯	19
2) 調査組織	19
3) 1区の調査	19
1 調査概要	19
2 出土遺構・遺物	20
4) 2区の調査	23
1 出土遺構・遺物	23
5) 小結	26
4. 第152次調査	
1) 調査に至る経緯	27
2) 調査組織	27
3) 1区の調査	27
1 調査概要	27
2 出土遺構・遺物	28
4) 2区の調査	28
1 出土遺構・遺物	28
5) 小結	34
5. 第153次調査	
1) 調査に至る経緯	35
2) 調査組織	35
3) 調査概要	37
4) 検出遺構・遺物	37
5) 小結	42
6. 第154次調査	
1) 調査に至る経緯	43
2) 調査組織	43
3) 発掘調査の記録	44
1 調査概要	44
2 1区の調査	46
3 2区の調査	68
4 3区の調査	75
5 4区の調査	79
4) 小結	89

挿図目次

Fig. 1.	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2.	那珂遺跡群位置図 (1/10,000)	4
(第148次調査)		
Fig. 3.	第148次調査区位置図 (1/800)	5
Fig. 4.	第148次調査区周辺図 (1/400)	7
Fig. 5.	遺構配置図 (1/80)	8
Fig. 6.	SB-001 遺構実測図 (1/60)	9
Fig. 7.	SB-001 出土遺物実測図 (1/4)	9
Fig. 8.	SE-040 遺構実測図 (1/60)	10
Fig. 9.	SE-043・044 遺構実測図 (1/60)	10
Fig. 10.	SE-040・041・043 出土遺物実測図 (1/4)	11
Fig. 11.	SK-004 遺構実測図 (1/30)	11
Fig. 12.	SD-042 遺構断面実測図 (1/60)	11
Fig. 13.	SD-002・042 出土遺物実測図 (1/4)	12
(第150次調査)		
Fig. 14.	第150～152次調査区位置図 (1/1,000)	13
Fig. 15.	第150～152次調査区配置図 (1/250)	14
Fig. 16.	第150次調査区全体図 (1/80)	15
Fig. 17.	SD-004 遺構実測図 (1/50)	16
Fig. 18.	SD-004 出土遺物実測図 (1/3)	16
Fig. 19.	SB-006・SB-007 遺構実測図 (1/40)	17
(第151次調査)		
Fig. 20.	第151次1区調査区全体図 (1/80)	19
Fig. 21.	SD-003 遺構実測図 (1/40)	20
Fig. 22.	SD-003 遺物実測図 1 (1/3)	20
Fig. 23.	SD-003 遺物実測図 2 (1/1)	21
Fig. 24.	SD-003 遺物実測図 3 (1/1・1/2・1/3)	22
Fig. 25.	SK-011 遺構実測図 (1/40)	22
Fig. 26.	第151次2区調査区全体図 (1/80)	23
Fig. 27.	SC-051・SC-052・SC-053 遺構実測図 (1/50)	24
Fig. 28.	SC-053 出土遺物実測図 (1/3)	25
Fig. 29.	SK-054 遺構実測図 (1/40)	26
Fig. 30.	SK-054 遺物実測図 (1/3)	26
(第152次調査)		
Fig. 31.	第152次1区調査区全体図 (1/80)	27
Fig. 32.	SC-012・013 遺構実測図 (1/60)	28
Fig. 33.	第152次2区調査区全体図 (1/80)	29
Fig. 34.	SC-071・072 遺構実測図 (1/50)	30
Fig. 35.	SC-074～077 遺構実測図 (1/50)	31
Fig. 36.	竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	32
Fig. 37.	SB-079・SB-080 遺構実測図 (1/60)	33
Fig. 38.	SK-075 遺構実測図 (1/40)	34
Fig. 39.	SK-075 出土遺物実測図 (1/3)	34
(第153次調査)		
Fig. 40.	第153・154次調査区位置図 (1/1,000)	35
Fig. 41.	第153・154次調査区配置図 (1/300)	36
Fig. 42.	第153次調査区全体図 (1/80)	37
Fig. 43.	SD-001 遺構実測図 (1/50)	38
Fig. 44.	SD-001 出土遺物実測図 1 (1/3)	39
Fig. 45.	SD-001 出土遺物実測図 2 (1/3)	40
Fig. 46.	SD-001 (下段) 出土遺物実測図 (1/2)	41
Fig. 47.	SD-001 出土石製品 (1/2)	41

Fig. 48.	SD-001 出土遺物実測図 3 (中世遺物) (1/3)	41
Fig. 49.	SE-005 遺構実測図 (1/40)	42
Fig. 50.	SC-003 遺構実測図 (1/50)	42
(第154次調査)		
Fig. 51.	第154次1区調査区全体図 (1/80)	43
Fig. 52.	SD-001 遺構実測図 (1/60)	44
Fig. 53.	SD-001 出土遺物実測図 1 (1/3)	45
Fig. 54.	SD-001 出土遺物実測図 2 (1/4)	46
Fig. 55.	SD-001 出土遺物実測図 3 (1/6)	47
Fig. 56.	SD-001 出土遺物実測図 4 (1/6)	48
Fig. 57.	SD-001 出土遺物実測図 5 (1/4)	50
Fig. 58.	SD-001 出土遺物実測図 6 (1/4)	51
Fig. 59.	SD-001 出土遺物実測図 7 (1/3)	52
Fig. 60.	SD-001 出土遺物実測図 8 (1/3)	54
Fig. 61.	SD-001 出土遺物実測図 9 (1/3)	55
Fig. 62.	SD-001 出土遺物実測図 10 (1/3)	56
Fig. 63.	SD-001 出土遺物実測図 11 (1/3)	58
Fig. 64.	SD-001 出土遺物実測図 12 (1/3)	59
Fig. 65.	SD-001 出土遺物実測図 13 (1/3)	61
Fig. 66.	SD-001 出土遺物実測図 14 (1/3)	62
Fig. 67.	SD-001 出土遺物実測図 15 (1/3)	63
Fig. 68.	SD-001 出土遺物実測図 16 (1/3)	64
Fig. 69.	SD-001 出土遺物実測図 17 (1/3)	65
Fig. 70.	SD-001 出土遺物実測図 18 (1/3・1/1)	66
Fig. 71.	SD-003 遺構実測図 (1/50)	66
Fig. 72.	SE-002 遺構実測図 (1/40)	67
Fig. 73.	1区出土遺物実測図 (1/3)	67
Fig. 74.	SE-002・SD-004 出土石製品実測図 (1/3)	67
Fig. 75.	第154次2区調査区全体図 (1/80)	68
Fig. 76.	SC-024 遺構実測図 (1/50)	69
Fig. 77.	SC-026・028 遺構実測図 (1/50)	70
Fig. 78.	SC-027 遺構実測図 (1/50)	71
Fig. 79.	2区出土遺物実測図 (1/3)	72
Fig. 80.	2区出土石製品実測図 (1/3・1/1)	73
Fig. 81.	第154次3区調査区全体図 (1/80)	73
Fig. 82.	SB-039 遺構実測図 (1/60)	74
Fig. 83.	SE-032 遺構実測図 (1/40)	75
Fig. 84.	SE-032 出土遺物実測図 1 (1/3)	76
Fig. 85.	SE-032 出土遺物実測図 2 (1/3)	77
Fig. 86.	SE-032 出土遺物実測図 3 (1/3)	78
Fig. 87.	第154次4区調査区全体図 (1/80)	80
Fig. 88.	SC-041 遺構実測図 (1/50)	81
Fig. 89.	SC-041 出土遺物実測図 1 (1/3)	82
Fig. 90.	SC-041 出土遺物実測図 2 (1/3)	83
Fig. 91.	4区出土石製品・玉製品 (1/1・1/2・1/3)	83
Fig. 92.	SC-042 遺構実測図 (1/50)	84
Fig. 93.	SC-042 カマド実測図 (1/20)	85
Fig. 94.	SC-042 出土遺物実測図 (1/3)	85
Fig. 95.	SC-043～045 遺構実測図 (1/50)	86
Fig. 96.	SC-046・053 遺構実測図 (1/50)	88
Fig. 97.	4区出土遺物実測図 1 (1/3)	89
Fig. 98.	SD-052 遺物実測図 (1/3)	90

図版目次

- 卷頭 1 第153次調査SD-001(東から)
- 卷頭 2 第151次調査1区出土玉製品
(第148次調査)
- PL. 1 1) 調査区全景(北から)
2) 調査区全景(西から)
- PL. 2 1) SB-001・SK-004(北西から)
2) SE-040(南から)
3) SE-040・SD-002(南西から)
- PL. 3 1) SE-041断面(東から)
2) SE-043(北から)
3) SE-044(北から)
- PL. 4 1) SE-043・SD-042断面(南から)
2) 出土遺物(縮尺不同)
(第150次調査)
- PL. 5 1) 調査区全景(西から)
2) 調査区東半部(東から)
- PL. 6 1) 調査区東側壁面
2) SD-004(東から)
3) SB-006(南から)
(第151次調査)
- PL. 7 1) 1区全景(南から)
2) SD-003(南西から)
3) SD-003 遺物出土状況(東から)
- PL. 8 1) SK-011土層断面(南から)
2) 2区全景(東から)
3) SC-051(東から)
- PL. 9 1) 2区東半部分(北から)
2) 2区中央部分(北から)
3) 2区西半部分(北から)
- PL. 10 1) SC-052(東から)
2) SC-053(南から)
3) SK-054(北から)
(第152次調査)
- PL. 11 1) 1区全景(南から)
2) 2区全景(東から)
- PL. 12 1) SC-012(南から)
2) SC-013(南東から)
3) SC-071(西から)
- PL. 13 1) SC-072(南から)
2) SC-072(北西から)
3) SK-075(北東から)
- PL. 14 1) SC-074(南西から)
2) SC-074(東から)
3) SB-079(東から)
- (第153次調査)
- PL. 15 1) 調査区全景(西から)
2) 調査区北半部(北から)
3) SD-001(西から)
- PL. 16 1) SD-001 西壁土層(東から)
2) SC-003(北から)
3) SE-005(西から)
(第154次調査)
- PL. 17 1) 1区全景(東から)
2) SD-001(南東から)
3) SD-001(北西から)
- PL. 18 1) SD-001土層断面(北西から)
2) SE-002(西から)
3) SD-003(北西から)
- PL. 19 1) 2区全景(南西から)
2) 2区全景(北西から)
3) SC-024(西から)
- PL. 20 1) SC-026(西から)
2) SC-027(東から)
3) SC-028(北から)
- PL. 21 1) SC-028土層断面(南から)
2) 3区全景(西から)
3) 3区作業風景(南から)
- PL. 22 1) SB-039(北から)
2) SE-032(西から)
3) 4区調査区北壁土層断面(南から)
- PL. 23 1) 4区全景(東から)
2) 4区全景(北西から)
3) SC-041(北東から)
- PL. 24 1) SC-042(南から)
2) SC-042カマド(東から)
3) SC-042カマド断面(北から)
- PL. 25 1) SC-043(南から)
2) SC-044(東から)
3) SC-045(北西から)
- PL. 26 1) SC-053(南西から)
2) SK-047(東から)
3) SD-052 遺物出土状況(南東から)
- PL. 27 1区 SD-001 出土遺物 1
- PL. 28 1区 SD-001 出土遺物 2
- PL. 29 1区 SD-001 出土遺物 3
- PL. 30 1区 SD-001 出土遺物 4・3区 SE-032 出土
遺物

I. はじめに

1. 那珂遺跡群の発掘調査

那珂遺跡群は、春日市の須玖岡本から井尻を経て那珂、比恵へと延びる標高が10m余の洪積台地の北部に位置し、北には比恵遺跡群が、南には五十川から井尻B遺跡が連なっている。那珂遺跡群は、南北長が2,000m、東西長が800mで総面積は1,400,000m²(140ha)の広大な範囲に亘って拡がっており、開析作用によって形成された開析谷が幾筋も弯入して小丘を形成している。この那珂遺跡群では、昭和46(1971)年の第1次調査^③以来、今日までに150地点で発掘調査が実施されており、その結果から本来的には標高が11~12m余の中位段丘で、その尾根上には那珂八幡古墳や東光寺剣塚古墳などの前方後円墳の外に前方後方墳や円墳群が立地し、その周辺には弥生時代の甕棺墓や土壙墓などの墳墓域と竪穴住居や貯蔵穴群などの集落域をはじめ、古代の寺院か官衙的な建築物を想定させる軒平瓦や軒丸瓦を葺いた建物や中世の城館的な構造群が広く複合的に展開している。

福岡市経済観光文化財調査課では、この貴重な遺跡の性格に鑑み、建築物や道路などの建設によって止むを得ずして破壊される遺跡に対しては、申請者の協力を得て緊急避難的に発掘調査を実施して記録保存に努め、多くの市民や地域住民の地域史の理解と活用に供するよう努めている。

(註) 那珂八幡古墳調査団 1978『福岡市那珂八幡古墳』『九州考古学53』

調査番号：1335	遺跡略号：NAK-148	分布地図番号；024-0085
調査地籍：福岡市博多区那珂一丁目725番・724番の一部		
敷地面積：227m ²	調査対象面積：9.5m ²	調査実施面積：75.6m ²
調査期間：2013年12月2日～12月20日		
調査番号：1406	遺跡略号：NAK-150	分布地図番号；024-0085
調査地籍：福岡市博多区那珂一丁目90番1号・3号		
敷地面積：406.32m ²	調査対象面積：51m ²	調査実施面積：55.5m ²
調査期間：2014年5月7日～5月19日		
調査番号：1409	遺跡略号：NAK-151	分布地図番号；024-0085
調査地籍：福岡市博多区那珂一丁目90番4号		
敷地面積：261.24m ²	調査対象面積：144.8m ²	調査実施面積：111.7m ²
調査期間：2014年5月19日～8月21日		
調査番号：1410	遺跡略号：NAK-152	分布地図番号；024-0085
調査地籍：福岡市博多区那珂一丁目90番5号		
敷地面積：314.17m ²	調査対象面積：146.3m ²	調査実施面積：113.2m ²
調査期間：2014年8月21日～9月11日		
調査番号：1420	遺跡略号：NAK-153	分布地図番号；024-0085
調査地籍：福岡市博多区那珂一丁目102番・103番		
敷地面積：170.22m ²	調査対象面積：60m ²	調査実施面積：91m ²
調査期間：2014年9月10日～9月23日		
調査番号：1421	遺跡略号：NAK-154	分布地図番号；024-0085
調査地籍：福岡市博多区那珂一丁目102番・103番		
敷地面積：1410.33m ²	調査対象面積：429.5m ²	調査実施面積：409m ²
調査期間：2014年9月24日～12月12日		

- 凡 例
- 1) 那珂遺跡群
 - 2) 比恵遺跡群
 - 3) 五十川遺跡
 - 4) 井尻遺跡群
 - 5) 横手遺跡
 - 6) 東那珂遺跡
 - 7) 那珂君代遺跡
 - 8) 板付遺跡群
 - 9) 諸間山遺跡
 - 10) 茅原遺跡
 - 11) 雀居遺跡
 - 12) 井尻C大橋遺跡
 - 13) 須久遺跡群
 - 14) 三宅C遺跡
 - 15) 大橋遺跡
 - 16) 三宅B遺跡
 - 17) 大橋B遺跡
 - 18) 野間日遺跡
 - 19) 野間A遺跡

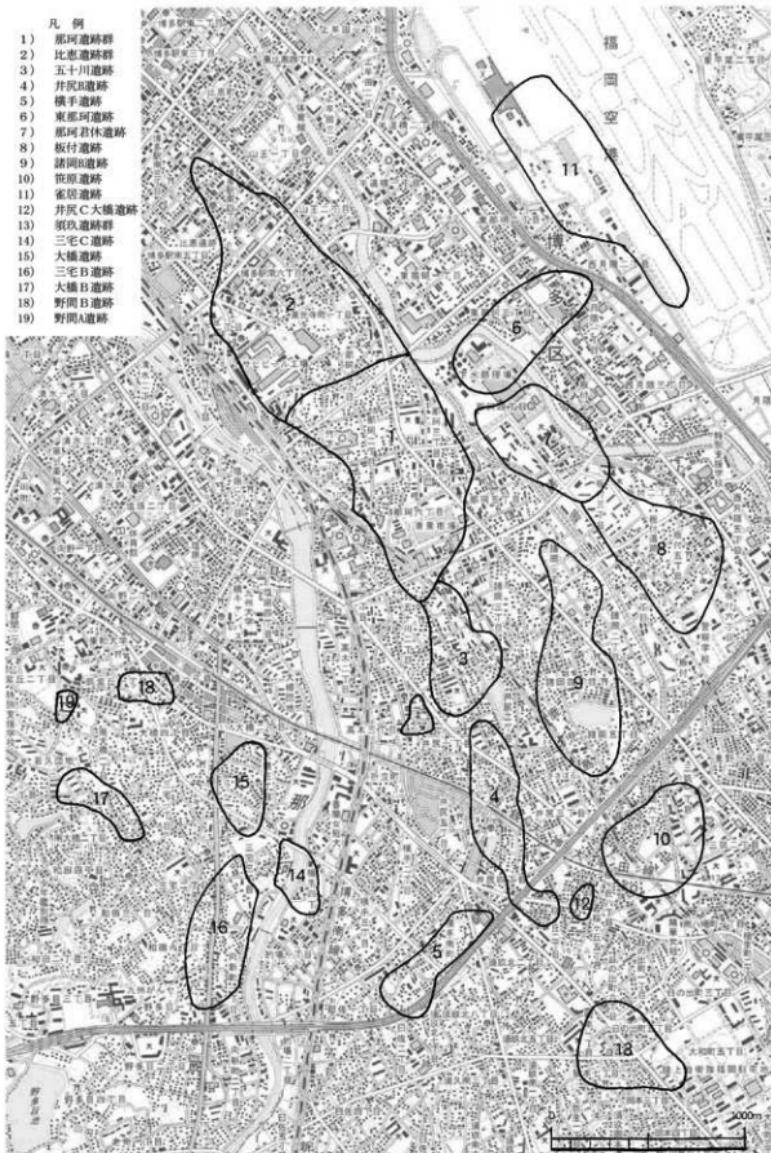


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

2. 立地と歴史的環境

那珂遺跡群のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘に向かって開口する博多湾に面した沖積平野である。この福岡平野には那珂川と御笠川が北流して博多湾に注ぎ込み、その両川の間には觀音山や牛頭から派生して断続的に長くのびる洪積台地が形成されている。春日丘陵と総称されるこの洪積台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層には阿蘇山の火碎流によって形成された八女粘土層と島柄ローム層が堆積している。この春日丘陵は、奴国王の王墓地とされる須玖岡本から井戸、五十川を経て那珂、比恵へと続いて博多湾の海岸砂丘に北面しており、それらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連綿と複合的に展開している。殊に、弥生時代から古代にかけては濃密な分布状況を示している。

那珂遺跡群は、この春日丘陵の北部に位置し、比恵遺跡群と連続して同じ丘陵上に立地しており、その東には御笠川が、また西には那珂川が北流しており、丘陵の裾部には両河によって造り出された開析谷が幾筋も弯入している。那珂遺跡群は、この南北に長く連なる比恵・那珂遺跡群の南半部に位置し、比恵遺跡群とは、浅い鞍部を境として北半部を比恵遺跡群、南半部を那珂遺跡群と便宜的に呼称している。

この那珂丘陵の中央部の尾根線上の最高所には、福岡平野で最古期の前方後円墳である那珂八幡古墳があり、その北西には東光寺剣塚古墳が、また南西部には前方後方墳や円墳群が拡がっている。この尾根線を境として丘陵は、東西の大河にむかって緩やかに緩傾斜し、その間には可耕地としての低湿地帯が拡がり、裾野には両河の開析による細長い開析谷が幾筋も弯入している。

この那珂・比恵遺跡群では、1938（昭和13）年の区画整理時に発見された環濠集落（1次調査区）の調査以来、これまでに300カ所に及ぶ地点で発掘調査が実施され、台地上において連綿と営まれた各時代の集落や墳墓地の様相が次第に明らかになりつつある。ここで那珂遺跡群を概観すると、丘陵の南東縁（38・41次調査区）で、ナイフ形石器や彫器、剥片などの旧石器時代の遺物が出土しているが、散逸的な分布を示すにすぎない。

次の縄文時代も早期から晩期前半までは、石鏃や石匙、土器片などが断片的に出土しているが、遺構に伴った明確なものはなく、その在り様は前時代と大差はない。この傾向は、比恵遺跡群においても同様である。

これが弥生時代になると一変し、台地の縁辺部で堅穴住居や貯蔵穴群などの遺構が拡がり、開析谷に面した緩斜面には土器や石器、木器を伴う包含層が形成される。集落域は尾根上へと次第に拡大していく。台地の南西縁（37次調査区）に夜臼期から前期前半の二重環濠集落が営まれる。また、中央部の尾根上（67次調査区）でも貯蔵穴群を伴った環濠集落が営まれ、北西縁のアサヒビール工場内や東縁部にも貯蔵穴群が拡っている。前期後半から中期になると集落域は、縁辺部から尾根上へと次第に拡大していく。比恵遺跡群も同様で集落域の拡大傾向が見られる。

中期後半から後期には、那珂・比恵遺跡群とも台地上には、堅穴住居や井戸を伴う集落域が全域に亘って拡がり、その中には銅劍や銅矛など銅製品の鋳型や中子、坩堝など青銅器の生産を示唆する遺物も出土しており、青銅製品の生産に携わる工人集団の工房群が台地の尾根上に存在したことが窺われる。また、集落域の周辺には墳丘墓をはじめとする壙棺墓群も造営され、遺跡の性格も拡大・多様化する。比恵遺跡群の中央部に位置する6次調査区では、細形銅劍を副葬する壙棺墓を埋置した墳丘墓も出現し、遺物も銅製鋤先や鍛造鉄斧などの金属器や各種木製農工具、建築材、漆製品など多種多様なものが出土している。

古墳時代になると、台地の中央部に福岡平野で最古の前方後円墳である全長が85mの那珂八幡古

墳が造営され、主体部の木棺内に三角縁神獣鏡や玉類が副葬されていた。これに続いて6世紀後半には、那珂八幡古墳周辺の台地上に東光寺劍塚古墳と剣塚北古墳の2基の前方後円墳のほか前方後方墳が造営される。このうち、東光寺劍塚古墳は、全長が140mで三重の周溝をもつ筑前地域で最大級の前方後円墳である。この時期の集落は、那珂から比恵の台地上に広く展開する。また、企画性の高い3本柱の柵列に囲まれた大型建物群も台地上の各所に出現する。殊に、紀記に記された「那津官家」とされる大型建物群が、比恵遺跡北西部（8次・72次・109次調査区）にある。中央部（7・13調査区）にも南に巨大な門を配した3柱の柵列群や大型建物群が並びており、全体として「那津官家」を形成していたと考えられ、平野内の拠点的な集落として一翼を担っていたことが想起される。

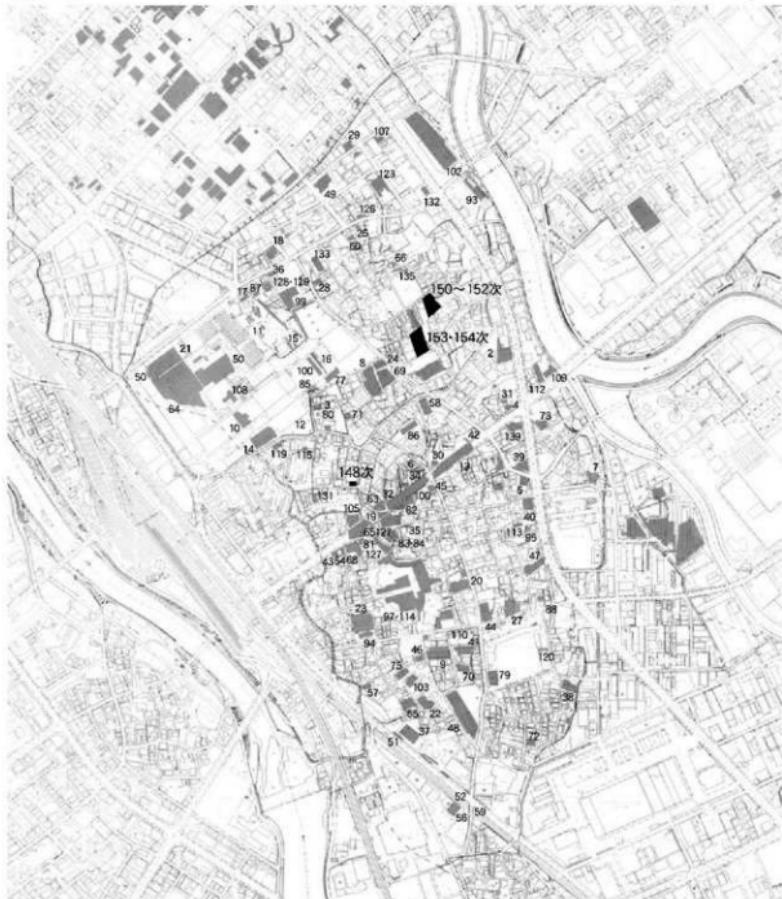


Fig. 2 那珂遺跡群位置図 (1/10,000)

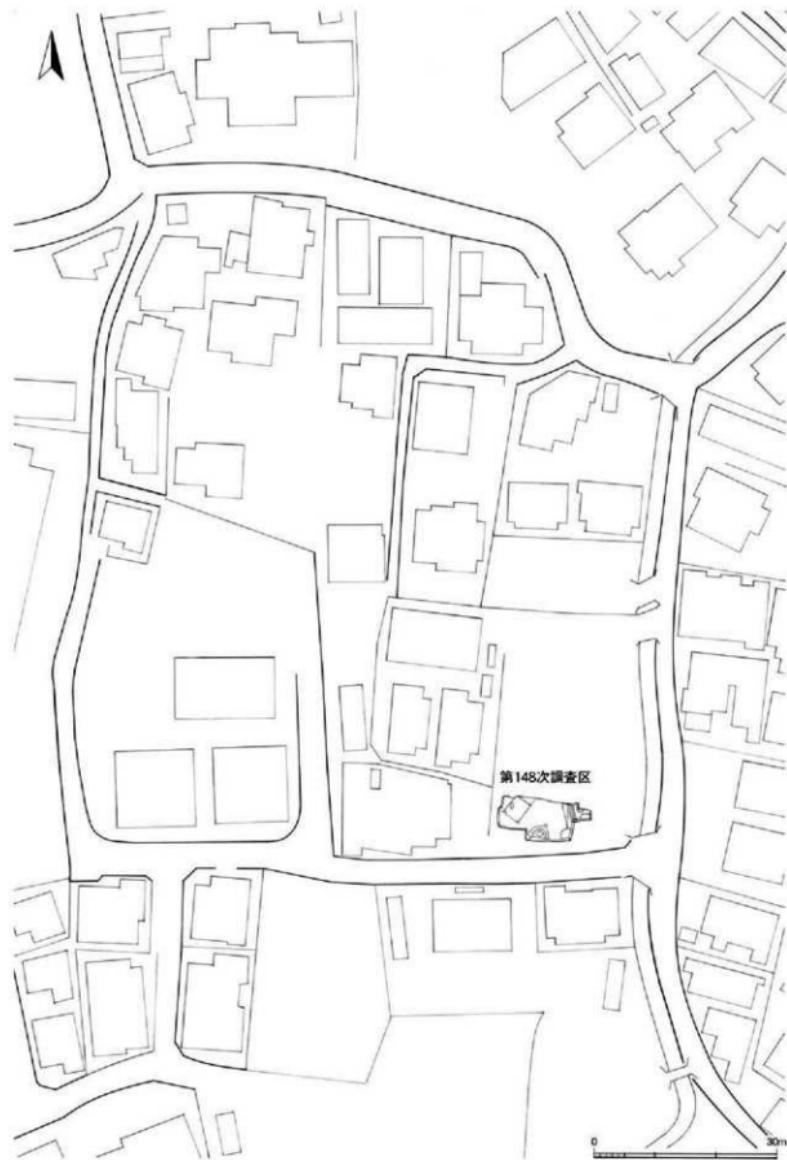


Fig. 3 第148次調査区位置図 (1/800)

II. 調査の記録

1. 第 148 次調査

1) 調査に至る経緯

第 148 次調査区のある那珂一丁目周辺は、この那珂丘陵の真っ只中にあり、近隣の調査例から遺構の存在が十分に予測された。この那珂一丁目 725 番、724 番の一部の地に専用住宅の建設が計画され、平成 25（2013）年 7 月 25 日に、埋蔵文化財の有無についての照会が、文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係に提出された。申請地は、埋蔵文化財の包蔵地として周知された那珂遺跡群の西縁に位置し、西縁を北流する緑川は那珂川の氾濫原の東縁を示すものである。

また、南接する 125 次調査区では巴形銅器の鋳型が出土していることから確認調査を実施して遺構の存否を確認したところ西側では表土下 30 cm で、東側では緩やかに傾斜しながら 60 cm で鳥栖ローム層に掘り込まれた柱穴と中世と考えられる幅が 4～5 m の大溝を検出した。この結果を基に遺構の保全について申請者と協議したが、建築物の安定化のために地中基礎を深く打設することから緊急に発掘調査をして記録保存を図ることになった。発掘調査は、平成 25（2013）年 12 月 2 日からはじめ、12 月 20 日に無事終了したが、当初の 2 輪を想定していた排土処理が敷地上の制約から 4 輪の調査となり、煩雑なものとなった。加えてこの師走は、寒暖の差が著しく最終日には夜半の強風で休憩所のテントが倒壊し、その撤収作業にも多くの時間と労力を要した。このような悪条件の中で、予定よりも早く発掘調査を終えることが出来たのは作業に従事した方々や関係者諸氏の協力によるところが大きい。記して謝意を表したい。なお、発掘調査は、専用住宅の建設に伴うものであることから国庫補助事業として実施した。

2) 調査組織（発掘調査：平成 25 年度 整理報告：平成 27 年度）

調査委託 個人

調査主体 福岡市教育委員会

調査統括 文化財部埋蔵文化財調査課

埋蔵文化財調査課長 常松幹雄（平成 27 年度）宮井善朗（平成 25 年度）

埋蔵文化財調査課調査第 1 係長 吉武 学（平成 27 年度）常松幹雄（平成 25 年度）

埋蔵文化財調査課調査第 2 係長 横本義嗣

調査庶務 埋蔵文化財審査課管理係 横田 忍

調査担当 埋蔵文化財調査課調査第 1 係 小林義彦

技能員 谷 直子

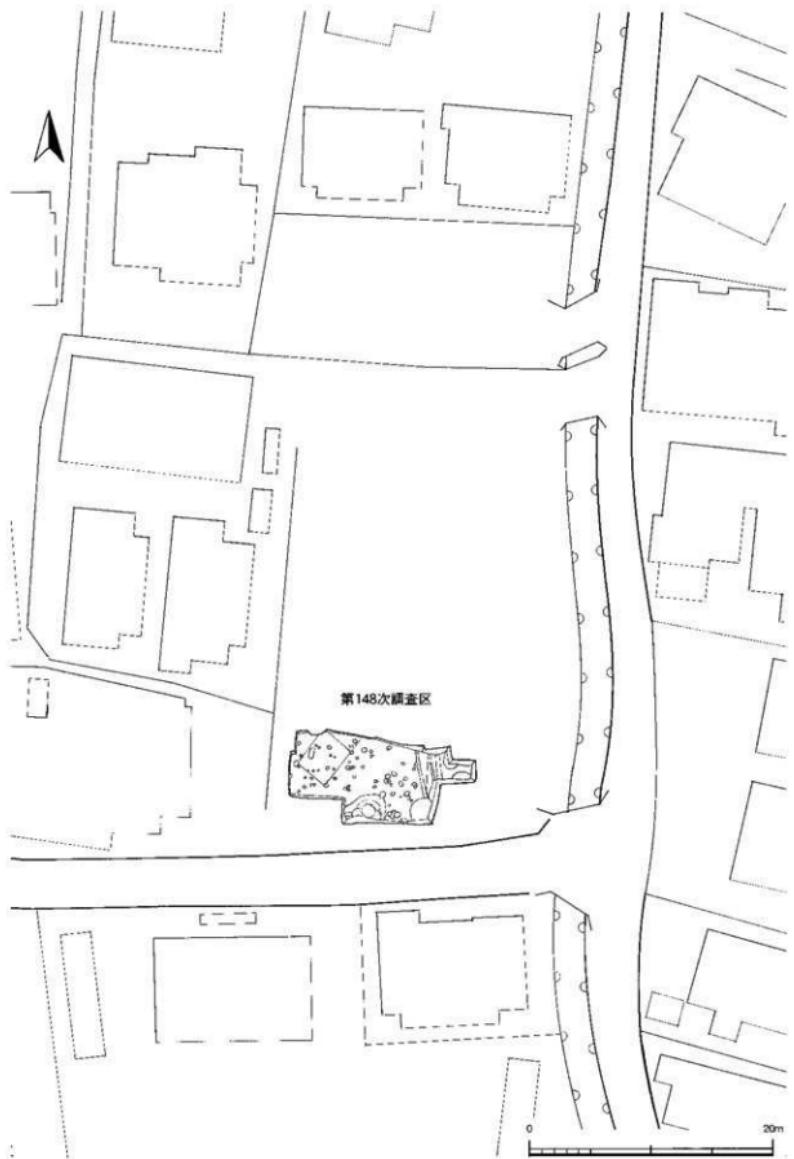
調査・整理作業 伊藤美伸 坂梨美紀 田中朋香 知花繁代 遠山 熱 土斐崎孝子 濱フミコ

日高芳子 増田ヒロ子 松下さゆり 森田祐子 渡部律子

発掘調査および資料整理にあたっては、常松幹雄氏（福岡市埋蔵文化財調査課）から貴重な指導と助言を頂いた。改めて謝意を表します。

3) 発掘調査の記録

第 148 次調査区のある那珂一丁目 725 番、724 番は、那珂丘陵の中央部の西寄りに位置し、西縁を北流する緑川は那珂川の氾濫原の東縁を示すものである。また、地形的には、西側が高く、東側を流れるクリーク状の流路にむかって緩傾斜して行く。ただし、この流路が開析谷の名残か中世の居館の掘削を開削したものかは判然としない。この流路を挟んだ東へ 150 m の距離には福岡平野で最古の前



方後円墳である那珂八幡古墳があり、すぐ南の125次調査区では巴型銅器の鋳型が出土している。層序的には、高い西側で20cm、低い東側で40cmの真砂土を含んだ盛土で、その下層に10~20cmの黒灰色土~暗茶褐色土下で基盤層の鳥栖ローム層に達し、このローム層に弥生時代の掘立柱建物や井戸、土坑などと中世の構と井戸を検出した。

発掘調査は、平成24(2013)年12月2日に調査機材の搬入とパワーショベルによる表土層の除去作業から開始し、12月20日に最後の埋め戻し作業を行ってすべてを終了した。

遺構の実測は、東西に細長い調査区の長辺に沿って任意の主軸ラインを基準にした10mの方眼を設定し、その中に更に2mの小方眼を組み込み、西から東へ5~13、北から南へc~gとした。南北ラインは、磁北から6°20'西偏している。

1 挖立柱建物 (SB)

SB-001

(Fig. 6・7 PL. 2・4)

1号建物は、調査区の西端に位置する1間×1間の南北棟の建物で、4号土坑と重複しているが柱穴との切り合いがなくその先後は判別し難い。梁間長は300cm、桁行長は350cmであるが、桁柱は北あるいは南に延びる可能性も考えられる。柱穴は、一边が45~55cm、深さが56~77cmのやや不整な方形プランを呈し、P2の坑底には直径が15cmの柱痕跡が残っていた。床面積は、 $10.5\text{ m}^2 + \alpha$ で柱穴の覆土中からは弥生土器片や須恵器焼片が出土しており、古墳時代の所産と推考される。

1は、口径が14.2cm、器高が4.2cmの土師器壺でP1より出土した。口縁部は、やや丸みを帯びた体部から小さく外反しながらストレートにのびる。胎土は緻密で微細~小砂粒をわずかに含み、焼成は良好。色調は淡橙色を呈する。

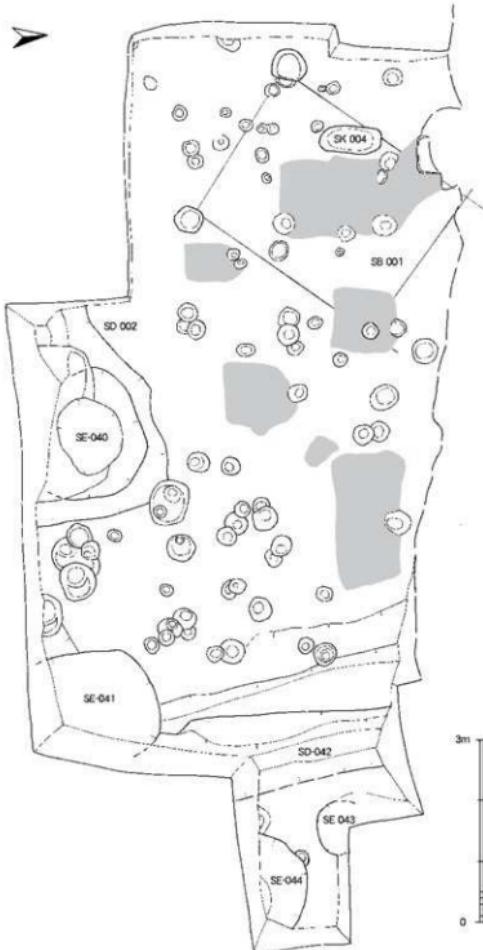


Fig. 5 遺構配置図 (1/80)

2 井戸 (SE)

SE-040

(Fig. 8・10 PL. 2・4)

40号井戸は、調査区中央部の南壁際に位置する素掘りの井戸で、2号溝の突出部内にスッポリと納まるように掘り込まれている。その先後については、溝下層の埋土上に黄灰色粘土ブロックを含む井戸の埋土層が厚く円形状に検出されたことから2号溝に新出するものである。また、東へ4mの距離には42号溝を切った41号井戸がある。検出面での平面形は未確認であるが、那珂遺跡群

における該期の井戸の形

状と現状を勘案すると直径が180~200cmの円形プランをなすものであろう。壁面は、井口から-30~40cmほど深さまで外方にむかってフラスコ状に拡がった後に井戸底にむかってストレートに窄まっていく。調査区の制約から完掘は出来ず標高6.06mまで掘り下げたが、そこから井戸底までは80~100cmの深さがあると考えられる。これらのこと勘案すると井戸底までの深さは275~300cmで、標高は5.25~5.0mであると推考される。基本的に湧水点は、鳥柄ローム層と八女粘土層の間にあり、この未掘間にその境があることが推測される。覆土は、暗黒茶褐色~黒褐色土で遺物は、中層から弥生土器や土師器片の外に青磁碗や白磁皿・土鍋・瓦片が出土壤した。

2は、口径が15.0cm、底径が8.5cm、器高が2.9cmの土師器壺である。口縁部は、底部から緩やかに外反しながらストレートに立ち上がる。胎土は精良で、細~小砂粒と雲母微細を含む。色調は橙色で、焼成は良好。

SE-041 (Fig. 5・10 PL. 3・4)

41号井戸は、調査区の南東端に位置する素掘りの井戸で、4m余り西には40号井戸があり、調査区の東部を南北流する42号溝よりも新しい。平面形は、直径が220~250cmほどのやや楕円形的なプランを呈するものであろう。断面形は、井口から深さが60cmまで壁外へ30cmほどフラスコ状に拡がり、そこから10~15cmほど井戸内へむかって緩傾斜する。この緩やかな屈曲緩線から15cmほど壁奥へむかってフラスコ状に拡がる2個のフラスコを重ねた2段掘状をなした後に井戸底へむかって急峻に窄まる形状を示す。構造物の基礎杭直上にあるために1/4を半裁して完掘は断念した。覆土は、40号井戸と大差がない暗黒茶褐色~黒褐色土で、遺物は須恵器や土師器片の外に青磁碗・白

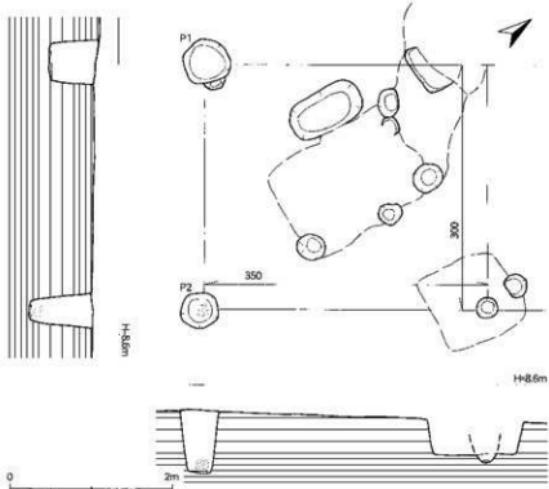


Fig. 6 SB-001 遺構実測図 (1/60)



Fig. 7 SB-001 出土遺物 実測図 (1/4)

磁皿・土師器捏鉢・平瓦片が出土した。

3は、口径が14.8cmの粉青沙碗である。体部の外面には、口縁下と底部上に灰青色の圈線を描きその間に簾状の縦線を配する。内面は、上下2段の圈線間に列点文状の細線を外面とは逆方向に描いている。胎土は緻密で焼成はやや軟質である。色調は白～灰白色で、胎土は橙色である。4は、頁岩質の砥石で表裏面と側縁には粗い研ぎ痕がある。

SE-043 (Fig. 9・10 PL. 3・4)

43号井戸は、調査区の北東縁に位置する素掘りの井戸で、すぐ南には44号井戸が、また西には42号溝がある。平面形は、南北長が150cm、東西長が120cmほどのやや椭円形的なプランを呈しよう。壁面は、井戸底にむかってストレートに窄まりながら井戸底に至る。井戸は、鳥栖ローム層より150cmまで精査した時点で湧水が著しく完掘を断面したが、深度的には35～50cmで井戸底に達する。基本的に湧水点は、鳥栖ローム層と八女粘土層の間にあり、この未掘間にその境があることが推測される。覆土は、暗黒褐色～黒色土で下層ほど粘性が強まる。遺物は、須恵器甕や坏片のほかに平瓦片と輸入陶器片がわずかに出土している。弥生土器片の出土はないが、構造的には弥生期のものと考えられ、須恵器等は半裁時の混入物かと思われる。

5は、口径が10cmの小型四耳壺である。口径は10cm。口縁部は短く「く」字状に外反する。肩部の貼付部下には1条の幅広の回線が巡り、その回線上に横位の耳が付く。胎土は緻密で、色調は暗赤灰色。6は、黄釉鉄絵陶器盤である。内面は灰青色の釉薬下に黄茶色の圈線を上下2段に配し、その間に巴状に点文を描いている。外面は無釉。胎土は良質で、焼成は堅緻である。

SE-044 (Fig. 9 PL. 3)

44号井戸は、調査区の最も東端に位置する素掘りの井戸で、すぐ北には43号井戸がある。平面形は、直径が200cmほどの円形プランを呈するものであろう。標高が5.85mの回レンズ状の井戸底は、深さが185cmで直径が80cmほどの円形をなし、八女粘土層には達していない。覆土は、暗黒褐色～黒色粘質土層で、半裁した坑底からは須恵器や土師器片のほかに陶磁器片がわずかに出土した。

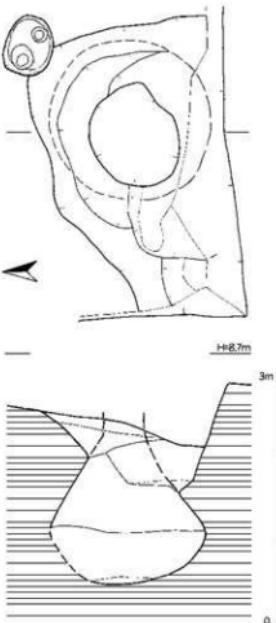


Fig. 8 SE-040 遺構実測図
(1/60)

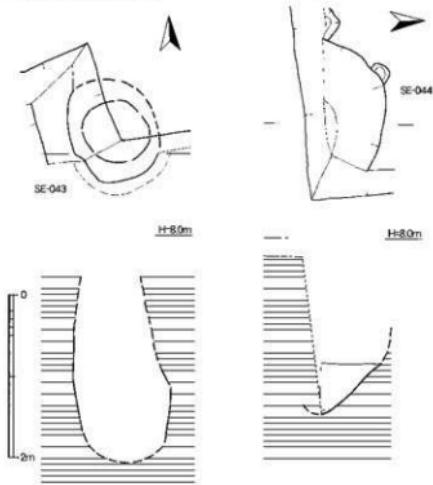


Fig. 9 SE-043・044 遺構実測図 (1/60)

3 土坑 (SK)

SK-004 (Fig. 11 PL. 2)

4号土坑は、調査区の西縁にあり、1号建物 (SB-001) の西桁柱列と重複しているが、その先後は判然としない。平面形は、長辺が 93 cm、短辺が 50 cm の隅丸長方形プランを呈し、主軸方位を N-12.5°-E にとる。緩やかに立ち上がる壁面の深さは 20~30 cm で、断面形は舟底状をなす。覆土は、暗黒茶褐色土の單一層で土師皿と平瓦片がわずかに出土した。

4 溝 (SD)

SD-002 (Fig. 5・13 PL. 2・4)

2号溝は、調査区中央部の南縁にある幅広の溝で、40号井戸と重複している。溝底よりやや上層に40号井戸の埋土である黄褐色粘土ブロックが堆積していることから40号井戸よりも古い。溝幅は、北端が 210~280 cm、東壁の南北長が 220 cm であるが、北壁は、110 cmほど南へ窄まつた後に緩やかな変換点を作つて西へ延びる傾向が窺えることから、東西流する幅広の溝が小さく北へ張り出したものとも考えられる。溝の南北断面は、検出面から一旦 10~15 cm ほど傾斜して弱い変換点を作つて 30 cm ほど緩傾斜した後に 70~74 cm ほど急峻に溝底へむかって下がつていく。溝底の東西断面は、浅い箱型状をなし、最深部の標高は 6.81 m、検出面からの深さは 120 cm ある。覆土は、暗褐色~濃茶褐色土で須恵器壺・壺・壺蓋のほかに平瓦・丸瓦・土師器捏鉢片などが出土した。

7号は、口径が 12.8 cm、器高が 2.8 cm の須恵器壺蓋である。体部は、平坦な天井部から垂直に立ち上がり口縁部は端部を丸く納めている。胎土には少量の小砂粒を含み、焼成は堅致。色調は灰色。

SD-042 (Fig. 12・13 PL. 4)

42号溝は、調査区の東端を南北流するやや幅広の溝で、南端は41号井戸に切られている。溝の上縁幅は 250 cm、溝底の幅は 40~55 cm、深さは 150~160 cm で溝底の標高は 6.45 m を測る。断面的には、西側が 15 cm の比高差で 50 cm ほど緩やかに下つた後に 15 cm の差で 1段目の段を作り、更に 10~20 cm の比高差で 35~70 cm ほど緩やかに下つて変換点を作つた後に 100 cm ほど急峻に窄まって溝底に至る。一方で東縁は、検出面からストレートに溝底に至る。

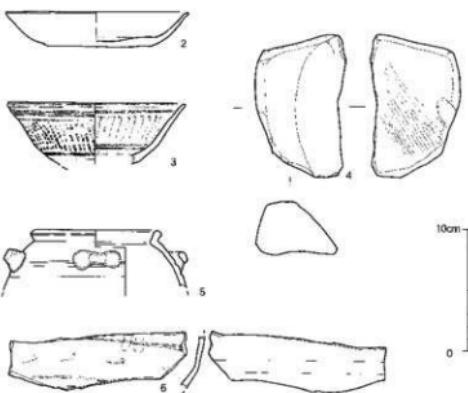


Fig. 10 SE-040・041・043 出土遺物実測図 (1/4)

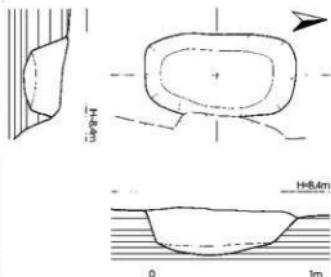


Fig. 11 SK-004 遺構実測図 (1/30)

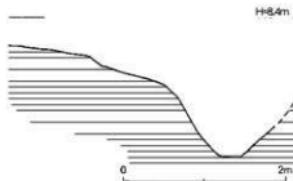


Fig. 12 SD-042 遺構断面実測図 (1/60)

現状では、東西の上縁の比高差は 135 cm あるが、東接する 43 号井戸から 42 号溝にむかって 50 cm の高低差があり、東側も西側と同様の構造をしていた可能性が十分に考えられる。その場合の溝幅は、400 cm ほどの大溝になることが想定される。遺物は、須恵器壺や土師器壺・壺のほかに捏鉢や平瓦・陶磁器片が出土した。

8 号は、口径が 12.6 cm、底径が 9 cm、器高が 2.4 cm の土師器壺である。体部はストレートに大きく外反し、底部は糸切りで板目圧痕が残る。胎土は緻密で雲母片を含み、焼成は良好。色調は鈍い橙色。

4) 小結

本調査区では、掘立柱建物 1 棟と井戸 4 基、土坑 1 基、溝 2 条のほかに柱穴を検出した。時期的には弥生時代～古代と中・近世と考えられ、時期的な偏りではなく、時空的な構造の拡がりは稀薄である。これは調査区の狭小さに起因すると考えられる。この中にあって最も特徴的なものは井戸である。4 基の井戸から出土した遺物は、須恵器や土師器片の外に四耳壺や黄釉鉄絵陶器盤などの輸入陶器片がわずかに出土しているのみで明らかな時期を示す遺物は少ないが、出土遺物から推すとおおむね中世と考えられる。構造的には、すべてが素掘りの井戸であるが、その断面形に大きな差違がある。このうち 40・41 号井戸の断面形は、開口部から緩やかに掘り込まれた掘方が鳥栖ローム層と八女粘土層の境あたりで大きくフラスコ状に拡がり、そこから元の掘方に戻って井戸底にむかってストレートに窄まる構造をなしている。この構造は、中世期の那珂丘陵で良く観られるもので、このフランコ状の大きな拡がりはローム層の境から湧き出す湧水点付近に拡がっている。これは長期間に亘る使用中や底深いによる壁面の崩落とも考えられる。これに対して、43・44 号井戸は、調査上の制約から半裁面での確認に留まつたが、開口部から井戸底へ向かって緩やかに窄まる構造で、これも比惠・那珂丘陵の弥生期に観られる通有の構造をなしているが遺物的には明確な時期を示すものは出土していない。遺物的には 40・41 号井戸と同じ中世を示すが、構造的には弥生期のそれを窺わせており、調査時の観察としては中世期の遺物は井戸の埋没に際して混入したものと考えたい。次に、掘立柱建物 (SB-003) は現状では 1 間 × 1 間の規模であるが、北ないし西に延びることが想定され、1 間 × 2 間あるいは 2 間 × 3 間の建物になると考えられる。出土遺物からは古墳時代と思われるが、古代まで降る可能性もある。更に、掘立柱建物の西に接して位置する土坑 (SK-004) からは、平瓦片が 1 点出土しており、那珂丘陵の南辺にあったとされる寺院跡との関わりや構造の拡がりが想起される。また、調査区の南西端で検出された幅広な溝の全容は明らかではないが、那珂遺跡群における該期の幅広な溝は居館に伴うものが多く、本調査区の溝もその可能性を否定することはできない。同時に調査区の東には深いクリークが南北に流れおり、この両者を勘案すると興味深い資料と云えよう。

このように第 148 次調査では、各期に亘る遺構を検出したが、調査区の狭小さ故にその種類や数および拡がりを把握することは出来なかった。しかしながらクリークを境として那珂丘陵の西縁にも丘陵上の遺構に付設あるいは独立する集落域が拡がっていることが確認された。殊に井戸の構造的な相違や丘陵の各所で検出されている中世の居館は、丘陵上に展開する同期の幾つかの居館を検討することによって居館を中心とする集落域の拡がりを観ることができよう。いずれにしても本調査の成果をもって短絡的な結論は云い得ず、周辺調査の成果を待って再検討する必要があろう。

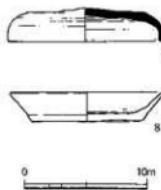


Fig. 13 SD-002・042
出土遺物実測図 (1/4)

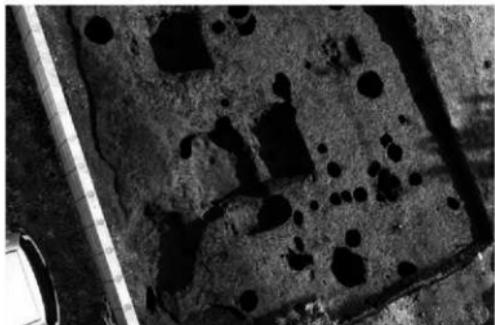


1) 調査区全景（北から）



2) 調査区全景（南から）

PL. 2



1) SB-001 • SK-004 (北西から)



2) SE-040 (南から)



3) SE-040 • SD-002 (南西から)



1) SE-041 断面（東から）

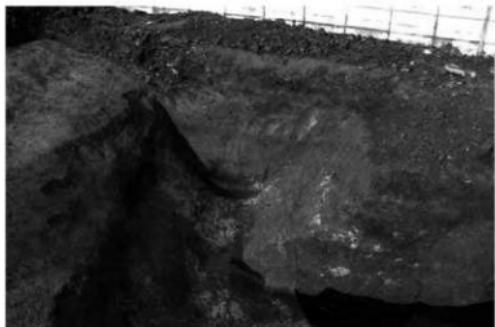


2) SE-043 (北から)

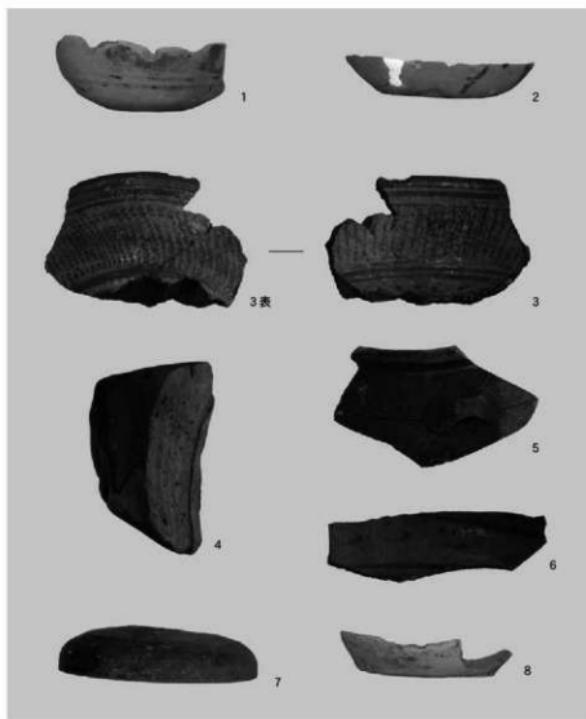


3) SE-044 (北から)

PL. 4



1) SE-043・SD-042 断面 (南から)



2) 出土遺物 (縮尺不同)

2. 第150次調査

1) 調査に至る経緯

平成26年2月28日、福岡市教育委員会に福岡市博多区那珂1丁目90番（住居表示：那珂1丁目5番29号）における共同住宅建設にかかる埋蔵文化財の有無について照会文書が提出された。これをうけて埋蔵文化財審査課では、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていることから、平成26年4月11日に確認調査を行い、敷地北側で地表下40～50cmに包含層と遺構を確認した。この結果を受けて申請者と埋蔵文化財審査課で協議を行い、北側道路に面した部分については地下げを行ことからこの部分について発掘調査を実施することで合意した。なお、建物部分については基礎の深さが遺構面に影響しないことから慎重工事と判断し、遺構は建物下に現状保存されている。

発掘調査は当該工事が個人事業主による施工であったため、本市の埋蔵文化財発掘調査国庫補助事業適用要項に基づき、国庫補助金の適用を受け、平成26年5月7日から同年5月19日まで実施した。調査面積は55.5m²である。

2) 調査組織（発掘調査：平成26年度 整理報告：平成27年度）

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課 課長 常松 幹雄

調査第2係長 榎本 義嗣

調査庶務：埋蔵文化財審査課管理係 横田 忍

事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係 比嘉えりか（平成26年度） 大森真衣子（平成27年度）

調査・整理報告担当：大塚 紀宜（平成26年度：埋蔵文化財調査課調査第2係主任文化財主事・平成27年度：埋蔵文化財審査課管理係長）

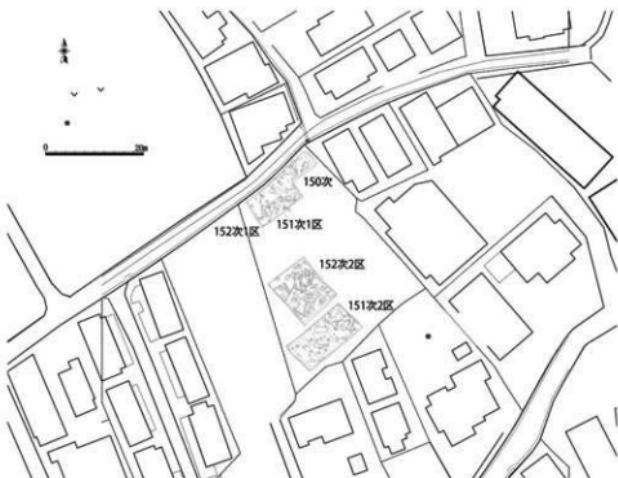


Fig. 14 第150～152次調査区位置図 (1/1,000)

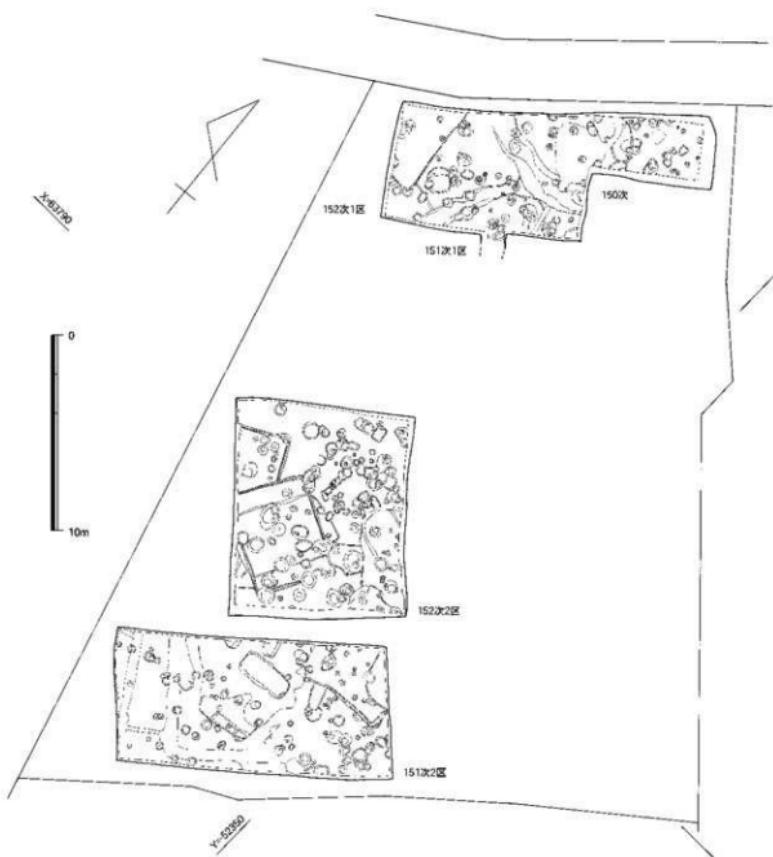


Fig. 15 第150～152次調査区配置図 (1/250)

3) 発掘調査の記録

1 調査概要

調査対象地は那珂遺跡群の東部に位置する。調査区周辺の標高は8～9mで、那珂遺跡群が立地する台地東縁にあたり、周辺の地形は全体に東に緩く傾斜する状況がうかがえる。周開一帯は畑地として開墾・造成された後に宅地として造成され、現在は住宅が密集していて旧地形を把握することは困難である。今回の調査地点も畑地の後に宅地として造成されている。

調査区は北側道路に沿った東西幅11.5m、幅3～6mの細長い範囲である。遺構面の深さは北側道路よりも20cm下、遺構面の標高は調査区東側で6.7m、調査区西側で7.2mで、遺構面も東側に緩く傾斜している。ただし遺構の出土状況が調査の結果、建物を構成していたと考えられる柱穴をは

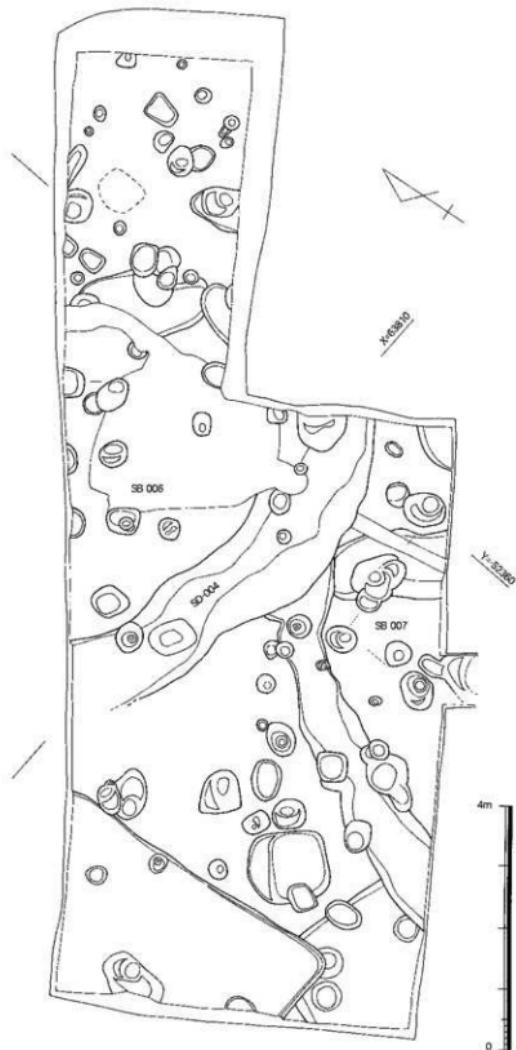


Fig. 16 第150次調査区全体図 (1/80)

じめ、溝状の遺構などが検出された。柱穴は直径 50 cm 大きなものが多いため、柱材の痕跡は確認されていないが、使用されていた柱材の直径は 20~30 cm と推定され、やや大きめの建物が想定できるが、調査区の範囲内で建物規模を明らかにすることは確認できなかった。溝状遺構は幅 1 m ほどで、断面形は浅い皿形を呈する。

なお、遺構番号は 150 次から 152 次まで通番としており、3 回次の調査で遺構番号の重複はない。

2 出土遺構・遺物

SD-004 (Fig. 17 PL. 6)

調査区西側で検出した溝状遺構。柱穴群よりも後出し、古墳時代の溝である 151 次調査 1 区 SD-003 を切る。平面形は北西から南東にかけて緩く弧を描き、検出面での溝幅は 1.1~1.5 m ほど一定である。溝の断面形は浅い皿状で、本来は全体に U 字形をなす溝の底部部分だけが遺存していると考えるのが適当である。検出面からの深さは北西侧で 7 cm、南東側で 15 cm ほどで、全体に大きく削平されていることが考えられ、本来はさらに幅広い溝であったとみられる。床面の標高は北西侧で 7.1 m、南東側で 6.9~7.0 m で、ごくわずかに東側に傾斜している。覆土は暗黒褐色粘土で、水が流れた痕跡は認められない。

出土遺物 (Fig. 18)

1 は甕口縁部破片と見られる。口縁は外側に開き、端部は丸める。頸部は屈曲し、頸部下に巨大な突起が付く。内外面は風化し、器面

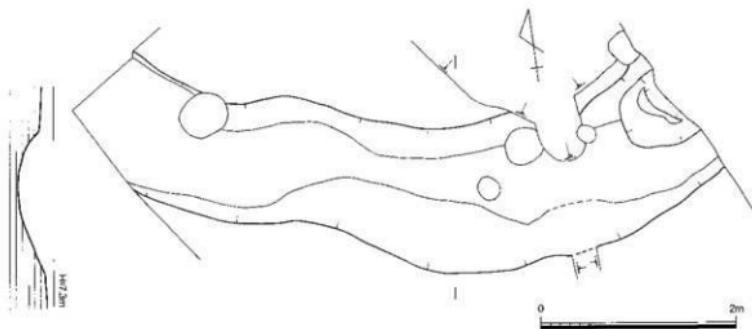


Fig. 17 SD-004 遺構実測図 (1/50)

調整は不明で、全体の器形も不明。2は弥生土器の蓋形土器の破片とみられる。上面はわずかに凹み、体部は上部から大きく開くものとみられる。内外面とも摩滅が著しい。3は弥生土器の高坏の脚部破片。径 5.6 cm、残存部高 11.5 cm で、弥生時代中期後半～末の大型の高坏だったとみられる。破片上部の坏部内面に赤色顔料が塗布され、外面も風化が進んでいるがかすかに赤色顔料の痕跡が残る。

4は須恵器坏身。6世紀前半のもので、口径 13.9 cm、残存高 4.0 cm。受け部の立ち上がりは内傾し、端部はわずかに反り上がって丸まる。受け部外面には重ね焼きの痕跡が残る。

この他、図示できた遺物の他に須恵器の壺・平瓶小片が出土している。

SB-006 (Fig. 19 Pl. 6)

調査区中央部の北側壁際で確認できた掘立柱建物の一部とみられる柱穴群。調査区内では 1×2 間分の範囲が確認できたが、建物はさらに北西側に延びる可能性がある。南側の柱穴列は擾乱により上部が削られている。東西の柱間は 1.2 ～ 1.3 m、南北の柱間は 0.8 ～ 0.9 m とみられる。柱穴は径 50 ～ 60 cm、遺構面からの深さは 30 ～ 50 cm である。建物の主軸は北東～南西方向に向く。

出土遺物 各柱穴内からは弥生土器の細片がごくわずか出土しており、図示可能なものはない。いずれの遺物も風化、摩滅しており、建物の時期を示すものとは断定できず、調査区周辺の遺跡の状況も考慮すると建物の時期は古墳時代後期以降に下る可能性が高い。

SB-007 (Fig. 19)

調査区南西側で確認できた掘立柱建物の一部とみられる柱穴群で、建物の南東部は調査区外に及ぶ。

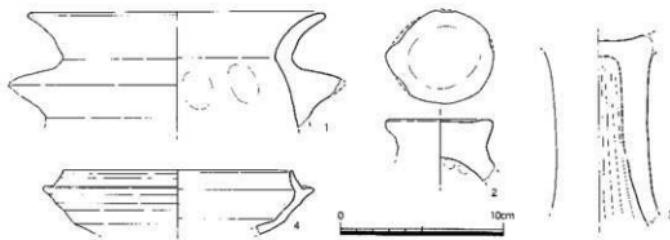


Fig. 18 SD-004 出土遺物実測図 (1/3)

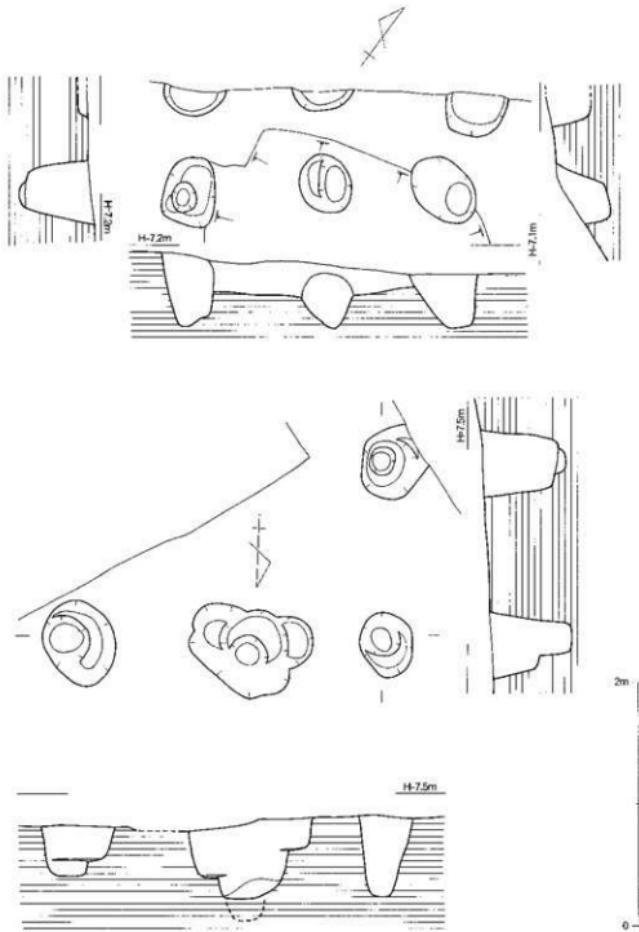


Fig. 19 SB-006・SB-007 遺構実測図 (1/40)

調査区内では1×2間分の範囲が確認できるが、建物の規模は南側と東側にさらに広がるとみられる。建物の主軸は正確に東西方向に向き、東西方向の柱間は1.2～1.3m、南北方向の柱間は1.4mである。柱穴は遺構面での径50～70cmで、全部柱穴が2段掘りで構成され、遺構面からの深さは40～70cmである。

出土遺物 各柱穴からは弥生土器の小片の他、土師器・須恵器破片が出土しているが、いずれも小片で図示できるものはない。弥生時代の土器は風化・摩滅が進み、建物の時期を示すものではない。古

墳時代の土師器・須恵器破片も小片であり、建物の時期はさらに下ると考えられる。

4) 小結

今回行われた那珂遺跡群第150次調査は、調査範囲が狭く、全体に後世の造成によって削平されており、遺跡の遺存状況が良好でないことから、この範囲だけで遺跡の状況を説明することは困難である。そのため、150次調査の東側で行われた151次1区、152次1区の状況も踏まえながら、150次調査の成果について考えたい。

150次調査区内で検出された遺構は溝・掘立柱建物の他、多数の柱穴である。径が20~30cmの小型の柱穴は中世以降など大きく時期が下るもの可能性があるが、径が50cm以上の柱穴は古墳時代~古代の建物を構成する柱の痕跡とみられる。

中でもSB-007は建物の軸線が正確に東西一南北方向に向き、一定の規格性を持った古代の建物である可能性が高い。調査区内では建物の一部しか検出できていないため、建物の規模や機能を推し量るには情報が不足しており、具体的な内容まで説明することはできないが、150次調査区周辺に古代の行政施設の一部が分布していたことを示唆する資料といえる。

それ以前の古墳時代には152次1区の堅穴住居や151次1区の溝SD-003があり、150次調査のSD-004でも6世紀前半の須恵器が含まれていることから、古墳時代後期にはこの付近に堅穴住居を主とする遺構群が濃密に分布していたことが考えられる。151次SD-003から供献土器とともに玉類が大量に出土したことは、この場で祭祀を執り行っていたことが考えられ、祭主である指導者を軸とした集団が居住していたとみてよい。

150次調査区を含め、周辺は後世の削平によって弥生時代の遺構が大きく削られているが、各遺構の覆土には弥生土器の小片が多く含まれている。SD-004にも弥生時代の土器破片が含まれており、本来は弥生時代にも集落が存在していたことは間違いない。



1) 調査区全景（西から）



2) 調査区東半部（東から）

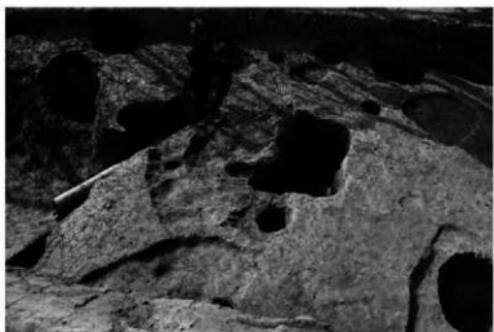
PL.6



1) 調査区東側壁面



2) SD-004 (東から)



3) SB-006 (南から)

3. 第151次調査

1) 調査に至る経緯

平成26年2月28日、福岡市教育委員会に福岡市博多区那珂1丁目90番（住居表示：那珂1丁目5番29号）における共同住宅建設にかかる埋蔵文化財の有無について照会文書が提出された。これをうけて埋蔵文化財審査課では、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていることから、平成26年4月11日に確認調査を行い、その結果敷地北側では当時の地表下40～50cmに包含層と遺構を確認し、敷地南側の建物予定地では地表下20cmで遺構面を確認した。この結果を受けて申請者と埋蔵文化財審査課で協議を行い、建物部分と北側道路に面した部分については遺構面に影響が及ぶ掘削を行うため、これらの範囲について発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は当該工事が個人事業主による施工であったため、本市の埋蔵文化財発掘調査国庫補助事業適用要項に基づき、一部国庫補助金の適用を受け、平成26年5月19日から開始し、まず北側の市道に面した部分の調査を先行して1区として実施した。建物部分は2区として同年8月に調査を行い、同年8月21日まで実施した。調査面積は1区、2区合わせて111.7m²である。

2) 調査組織（発掘調査：平成26年度 整理報告：平成27年度）

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課 課長 常松 幹雄

調査第2係長 梶本 義嗣

調査庶務：埋蔵文化財審査課管理係 横田 忍

事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係 比嘉えりか（平成26年度） 大森真衣子（平成27年度）

調査・整理報告担当：大塚 紀宜（平成26年度：埋蔵文化財調査課調査第2係主任文化財主事・平成27年度：埋蔵文化財審査課管理係長）

3) 1区の調査

1 調査概要

調査対象地は那珂遺跡群の東部に位置する。調査区周辺の標高は8～9mで、那珂遺跡群が立地する台地東縁にあたり、周辺の地形は全体に東に緩く傾斜する状況がうかがえる。周囲一帯は畠地として開墾・造成された後に宅地として造成され、現在は住宅が密集していく中で旧地形を把握することは困難である。今回の調査地点も畠地の後に宅地として造成されている。

調査区は2つの調査区に分かれている。1区は敷

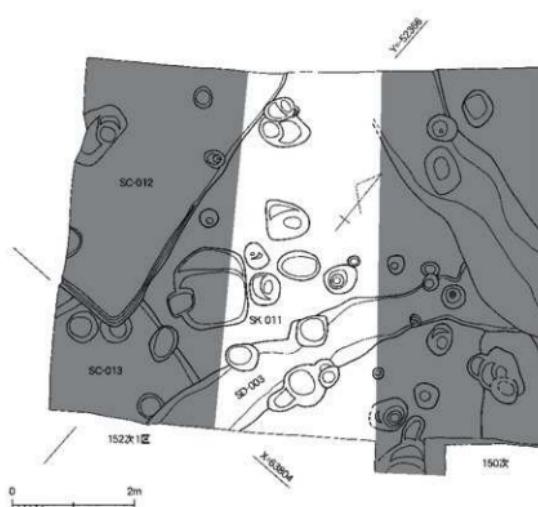


Fig. 20 第151次1区調査区全体図 (1/80)

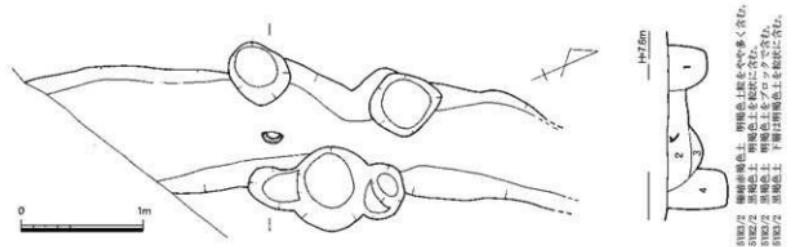


Fig. 21 SD-003 遺構実測図 (1/40)

地北側の市道に面した範囲で、第150次調査区の西側に隣接して設定された。2区は建物の建築範囲に該当する。

1区の調査は第152次調査1区の調査範囲と同時に重機で表土を除去し、調査作業を分割してそれぞれ実施した。遺構面は北側道路際で地表から20cm、南側で60cm下で検出され、標高は7.3～7.4mで遺構面はほぼ平坦である。1区での検出遺構は柱穴、溝状遺構、貯蔵穴で、溝状遺構からは滑石製玉製品が100点以上出土した。2区は現地表から20cmの表土直下で遺構面を検出し、堅穴住居3棟、土壙墓1基、柱穴が検出された。堅穴住居は弥生時代中期後半と古墳時代のものに分けられる。土壙墓は古墳時代前期である。

2 出土遺構・遺物

SD-003 (Fig. 21 PL. 7)

調査区南側で検出した溝状遺構。北東から南西に向かって緩く弧を描くように延び、検出面での幅は80cm～1mをはかる。深さは北側で5cm以下、南側で30cmで、南側の床面は北側よりも10cmほど低い。堅穴住居SC-012を切っており、堅穴住居よりも後出することが明らかである。

溝の断面形は逆台形に近い形で、両側の壁は角度を持って立ち上がり、床面はほぼ平坦である。遺

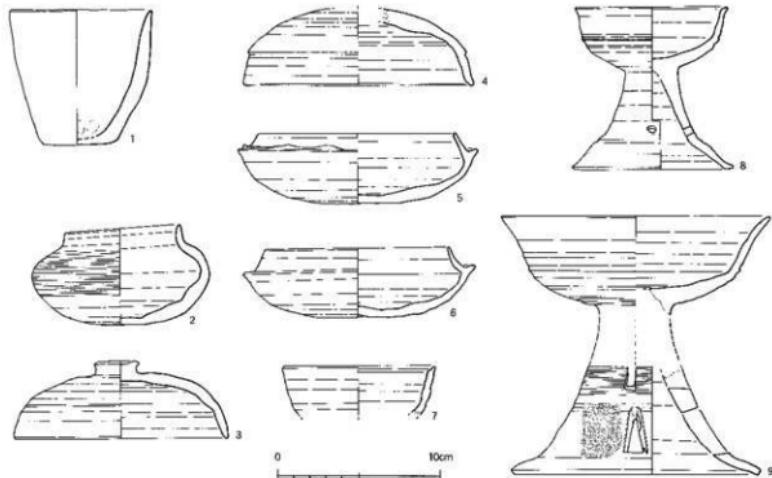


Fig. 22 SD-003 遺物実測図 1 (1/3)

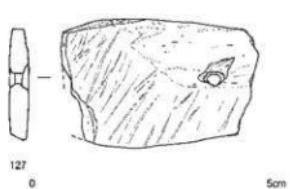
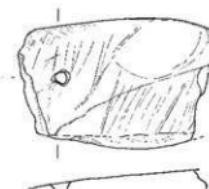
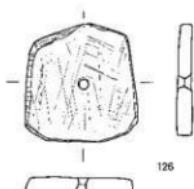
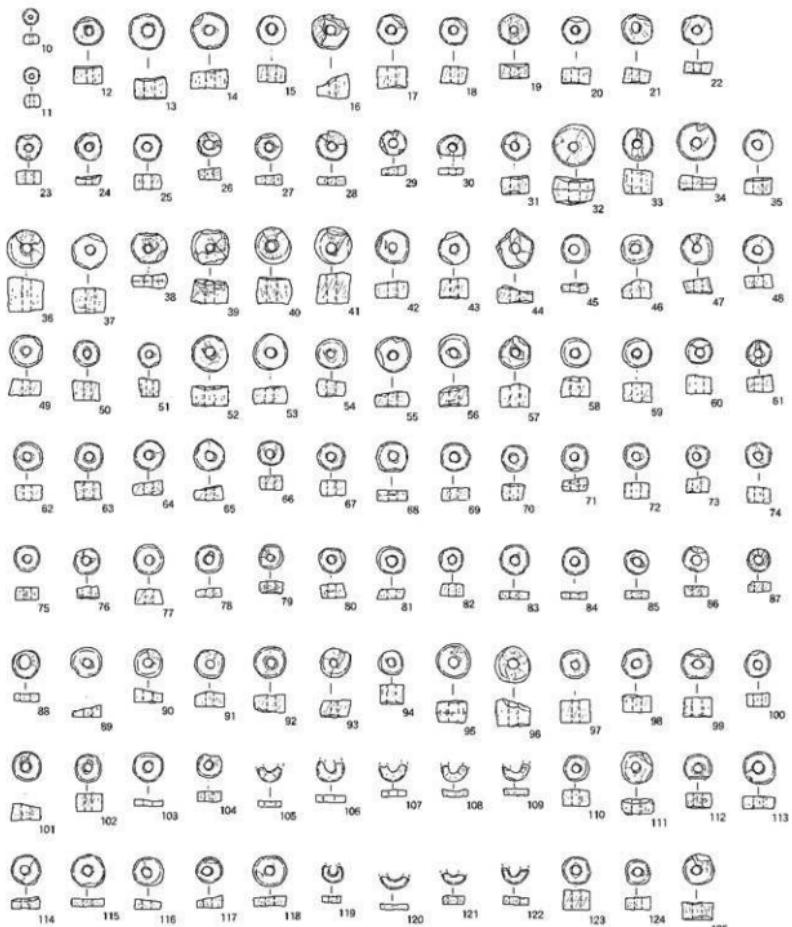


Fig. 23 SD-003 遺物実測図 2 (1/1)

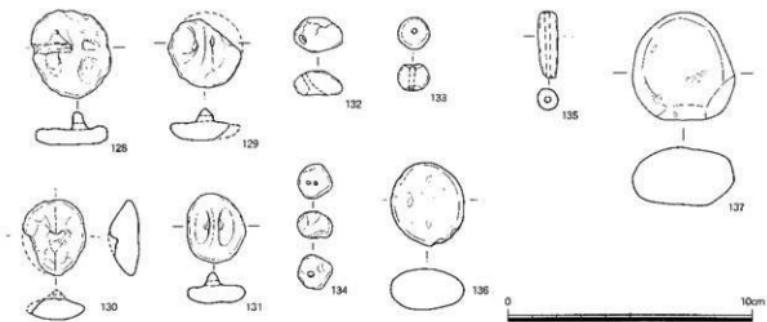
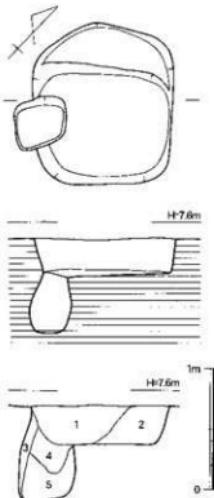


Fig. 24 SD-003 遺物実測図 3 (1/2・132~135は1/1・136と137は1/3)



- 1:SYR2/1 黒褐色土 黄褐色土を含む。
2:SYR2/2 黒褐色土 黄褐色土を含む。
3:SYR4/6 暗色土 ロームの西端部。 粘性で粘性高い。
4:SYR2/3 暗赤褐色土 ローム・次堆積層。

Fig. 25 SK-011 遺構実測図 の小型の壺。口縁内側を面取りし、体部は直立する。小片で、他の遺物よりも時期が下り、後世の柱穴等からの混入とみられる。(1/40)

8・9は高壺。8は全体に壺部が小さく、脚部が大きい。口縁部はわずかに外反し、体部は直立して下部に沈線が1条施される。脚部は外に開き、屈曲して内湾しながら広がる。脚部中位に径5mmの孔が3ヶ所開けられる。壺部の内面見込みと脚部裾部に自然釉が厚く掛かる。9は壺部と脚部が直接接合しないが、胎土から同一個体とみなした。壺部は体部が外反しながら大きく開く。脚部は外に開き、下部で屈曲して開く。透かしは2段透かしとみられる。

10～127は玉製品。10・11はガラス玉で黄緑～暗緑色を呈する。12～127は滑石製玉製品。127は垂飾として使用されたとみられ、上部に穿孔がある。126は方形板の中央に穿孔があり、有孔円板に類するものとみられる。12～125は白玉で、完形105個、破片9個。径は4.8～8.3mmで大きさにばらつきがある。128～131は土製模倣鏡。径は2.4～3.6cmで、祭祀に用いられたものである。132～135は土製玉。滑石製垂飾・白玉と一連で使用されたものか。

SK-011 (Fig. 25 PL. 8)

調査区東側で検出された方形の土坑。遺構西側は後世のピットに切られる。長1.1×幅1.0mで、深さは30cm遺存するが、覆土の埋没状況から本来1m程度はあったとみられる。壁は直立し、床面は平坦で、箱形を呈する。小型の貯蔵穴に該当する可能性もある。

出土遺物 弥生土器の破片が遺構内から出土しているが、遺物の詳細な時期は不明である。

4) 2区の調査

1 出土遺構・遺物

SC-051 (Fig. 27 PL. 8)

調査区北西側で検出した方形の竪穴住居。住居主軸はほぼ東西方に向き、東西幅5.0mが確認できるが、住居西側は擾乱でほぼ失わ

れており、遺構全体も遺構面-10

cm程度しか遺存していない。遺構覆土は黒褐色粘土で土器小片を含む。住居東側の壁際に幅15～20cm、深さ5cmの壁溝が掘られている。住居の主柱穴とみられる大型の柱穴が2基確認されており、全体で4本柱穴の建物だったとみられるが、床面が完全に確認されていないため、確証はない。柱穴は径50～60cmで、床面からの深さは10～15cmと浅めである。

出土遺物 遺構内からは弥生土器・須恵器・土師器の小片が出土しているが、図示できるものはな

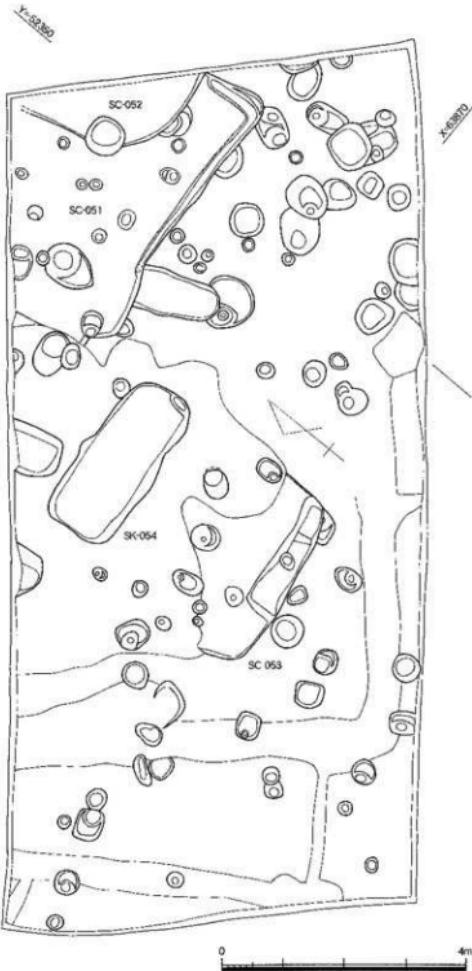


Fig. 26 第151次2区調査区全体図(1/80)

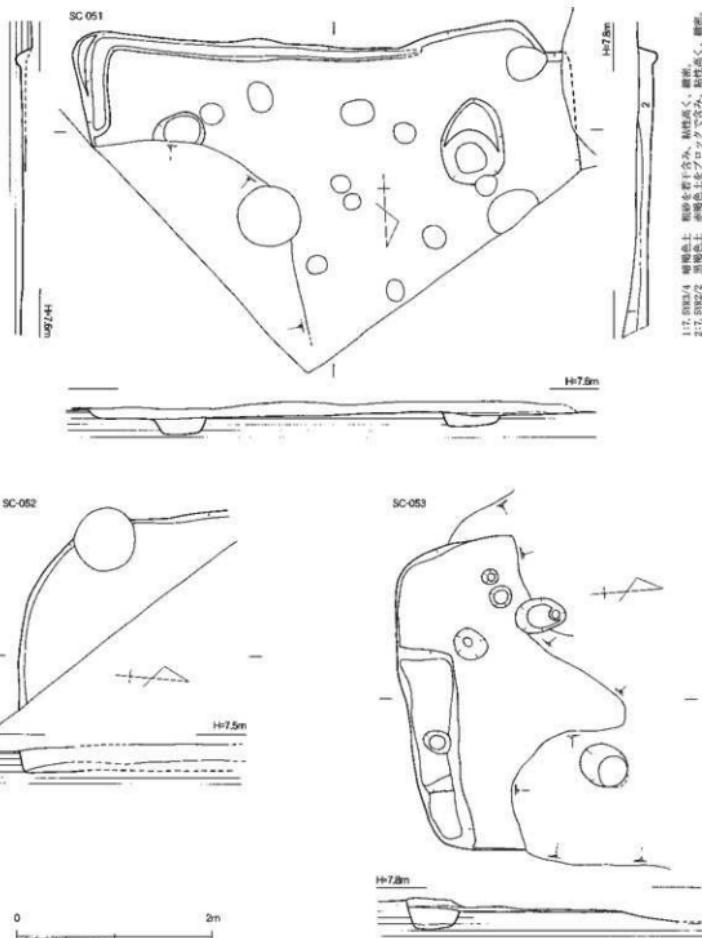


Fig. 27 SC-051・SC-052・SC-053 遺構実測図 (1/50)

い。出土遺物からみて、古墳時代の住居と推定される。

SC-052 (Fig. 27 Pl. 10)

SC-051 の遺構の下で隅丸方形の遺構の一部を確認した。形状から竪穴住居の一部とみなしたが、土坑の一部である可能性もある。

検出面からの深さは 25 cm だが、本来はさらに深かったものとみられる。平面形は隅丸方形のコーナー部分とみられ、緩くカーブするコーナー部分と直線的に延びる壁の部分が確認できる。床面はほ

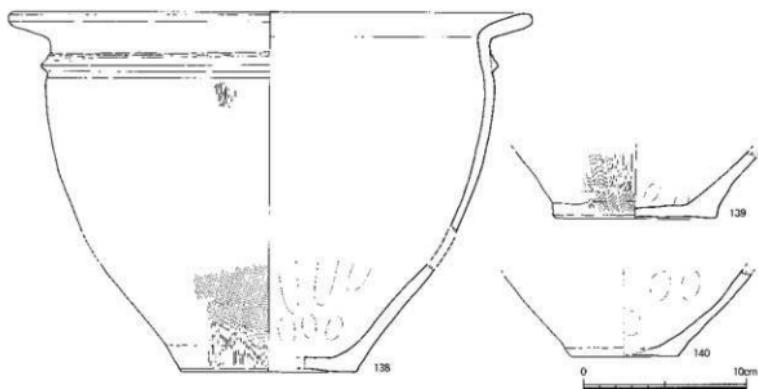


Fig. 28 SC-053 出土遺物実測図 (1/3)

ほぼ平坦で、壁面は床面から直立して立ち上がる。覆土は黒褐色粘土で、粘性が高い。住居に伴う柱穴は調査区内では確認できない。

出土遺物 弥生土器の小片が出土しているが、摩耗が著しく、図示不能で時期も不明。遺構の時期はSC-051を遡る時期とみられる。

SC-053 (Fig. 27 Pl. 10)

調査区中央部で検出した竪穴住居で、北側は削平と攪乱により失われている。建物の主軸はほぼ南北方向に向き、東西幅は3.2m、南北方向の遺存長2.3mの規模で、平面形は長軸に細長い隅丸長方形だったとみられる。現状では遺構面から床面まで深さ5~7cmほどしか遺存していない。床面は平坦で、地山上に厚さ10cm弱の張り床を施しており、張り床を除去した所、住居以前の柱穴が確認されたことから、この住居以前に別の建物があった可能性が高くなっている。また張り床上面の直上で土器破片が出土したことから、住居に伴う土器が廃棄時のまま埋没したものと考えられる。

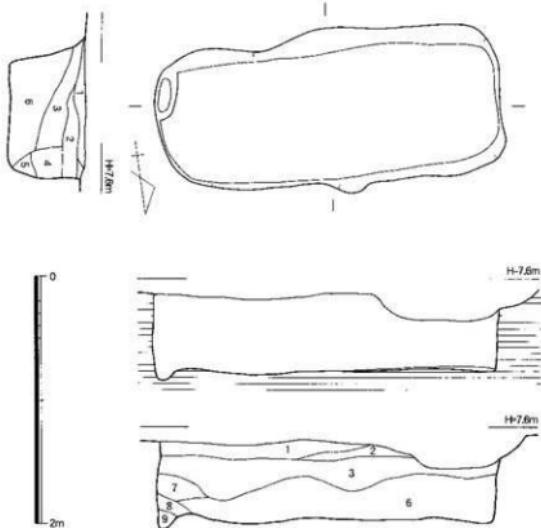
住居南東側の壁際に幅50cm、長さ2m、深さ20cmの長方形の住居内土坑が掘られている。土坑は東側が一段高い2段掘りを呈する。土坑の位置からみて住居に敷設された施設とみられるが、この土坑の機能については不明である。

出土遺物 (Fig. 28) いざれも住居張り床直上で出土したもの。138は鉢形土器。上半分と底部は直接接合しないが、復元高22.0cm、口径32.0cmの大きさに復元できる。口縁は屈曲して開き、口縁下に突帯が1条張り付く。胴部は張りが弱く、底部は全体に比して大きめで、平底である。内外面とも風化が進むが、外面には縦方向ハケ目、内面にはナデと指圧整形痕が確認できる。139は甕形土器の底部とみられる。平底で、壁面は外側に大きく開くため、138のような鉢形土器の可能性もある。外面は縦方向のハケ目、内面と底面はナデ。140は甕形土器の底部。器壁は薄めで、底部は平底、体部は若干丸みを持って立ち上がり、胴部最大径25cmぐらいの大きさと推定できる。内外面は風化により調整不明で、内面の一部に指圧痕が残る。

出土遺物からみて、弥生時代中期後半の住居と考えられる。

SK-054 (Fig. 29 Pl. 10)

SC-053の北側に位置する土壙墓。南西部が攪乱で若干削られるが、遺構の全体は確認できる。SC-



1:10YR2/2 黒褐色上 土器を多く含む。 2:10YR2/2 明褐色土を粒状に含む。 3:10YR4/4 黒褐色土 黑色土と褐色土ブロックの混合層。柔らかい。 4:10YR2/2 黒褐色土 明褐色土を粒状に含む。 5:5YR3/2 暗赤褐色土 黑褐色土と明褐色土のブロック混合層。柔らかい。 6:5YR4/2 赤褐色土 地山ローム層と褐色土の混合層。柔らかい。 7:7.5YR4/4 黑褐色土 黑色土と褐色土の混合層。 8:7.5YR2/1 黑色土 粘性高く、硬質。 9:7.5YR3/4 暗褐色土 柔らかく崩れやすい。

Fig. 29 SK-054 遺構実測図 (1/40)

能性がある。

出土遺物 (Fig. 30) 141 は弥生中期後半の短頭壺の口縁部破片。内外面とも摩滅しているが、ごくわずかに赤色顔料の痕跡が残る。

5) 小結

2区の調査区内で、弥生時代中期後半の住居と古墳時代の住居の2時期の遺構を確認した。また奈良時代の柱穴も存在することから、合計で3時期の遺構が確認されている。弥生時代中期後半の住居であるSC-053は遺存状況が非常に悪く、大きく削平されていることがうかがえる。おそらくは、周辺で更に多くの同時期の住居群があったものとみられるが、そのほとんどが削平により失われたものと見られる。古墳時代以降の各遺構の覆土から弥生土器の小片が多数出土することも、これの証拠といえるだろう。古墳時代の堅穴住居SC-051も遺存状態が悪いが、その一方で北に隣接する152次調査の住居の遺存状態が良好なのは、狭い範囲で急な地形の高低差があったことも想定され、現在の地形からは想像できない地形が広がっていた可能性もある。今後の調査で注意したい点である。

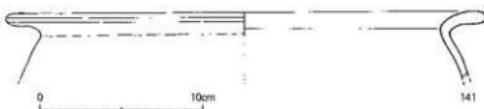


Fig. 30 SK-054 遺物実測図 (1/3)

- 26 -



1) 1区全景（南から）



2) SD-003（南西から）



3) SD-003 遺物出土状況（東から）



1) SK-011 土層断面（南から）



2) 2区全景（東から）



3) SC-051（東から）



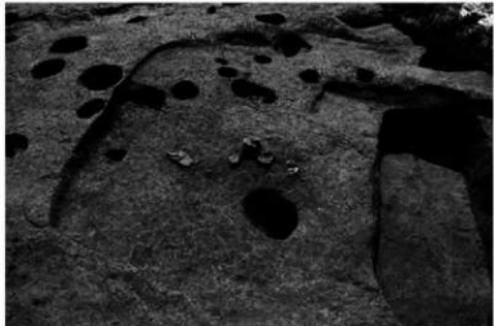
1) 2区東半部分（北から）



2) 2区中央部分（北から）



3) 2区西半部分（北から）



1) SC-052 (東から)



2) SC-053 (南から)



3) SK-054 (北から)

4. 第152次調査

1) 調査に至る経緯

平成26年2月28日、福岡市教育委員会に福岡市博多区那珂1丁目90番（住居表示：那珂1丁目5番29号）における共同住宅建設にかかる埋蔵文化財の有無について照会文書が提出された。（事前審査番号25-5-1243）これをうけて埋蔵文化財審査課では、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていることから、平成26年4月11日に確認調査を行い、その結果敷地北側では当時の地表下40~50cmに包含層と遺構を確認し、敷地西側の建物予定地では地表下20cmで遺構面を確認した。この結果を受けて申請者と埋蔵文化財審査課で協議を行い、建物部分と北側道路に面した部分については遺構面に影響が及ぶ掘削を行うため、これらの範囲について発掘調査を実施することに合意した。

発掘調査は当該工事が個人事業主による施工であったため、本市の埋蔵文化財発掘調査国庫補助適用要項に基づき、一部国庫補助金の適用を受け、平成26年5月21日から開始し、まず北側の市道に面した部分の調査を先行して1区として実施した。建物部分は2区として同年8月から調査を行い、同年9月11日まで実施した。調査面積は1区、2区合わせて113.2m²である。

2) 調査組織（発掘調査：平成26年度 整理報告：平成27年度）

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課 課長 常松 幹雄

調査第2係長 榎本 義嗣

調査庶務：埋蔵文化財審査課管理係 横田 忍

事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係 比嘉えりか（平成26年度） 大森真衣子（平成27年度）

調査・整理報告担当：大塚 紀宜（平成26年度：埋蔵文化財調査課調査第2係主任文化財主事・平成27年度：埋蔵文化財審査課管理係長）

3) 1区の調査

1 調査概要

調査対象地は150・151次調査に隣接し、那珂遺跡群が立地する台地の東側縁辺付近に位置する。調査地点付近の標高は8~9mである。

調査区は151次と同様、2つの調査区に分かれている。1区は敷地北側の市道に面した範囲で第151次調査区の西側に隣接し、道路面の高さまで造成を行うために削平される部分が対象となった。2区は建物の建築範囲に該当する。

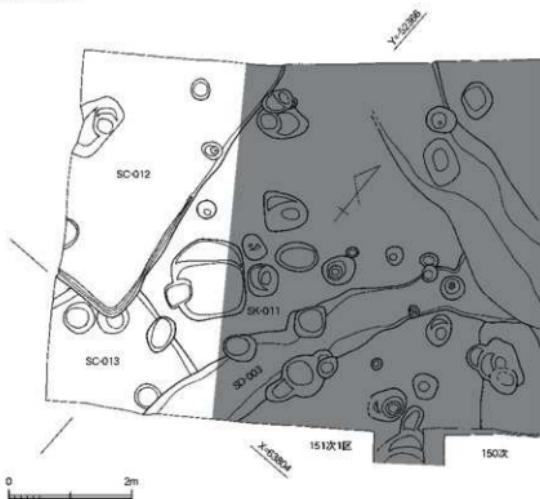


Fig. 31 第152次1区調査区全体図 (1/80)

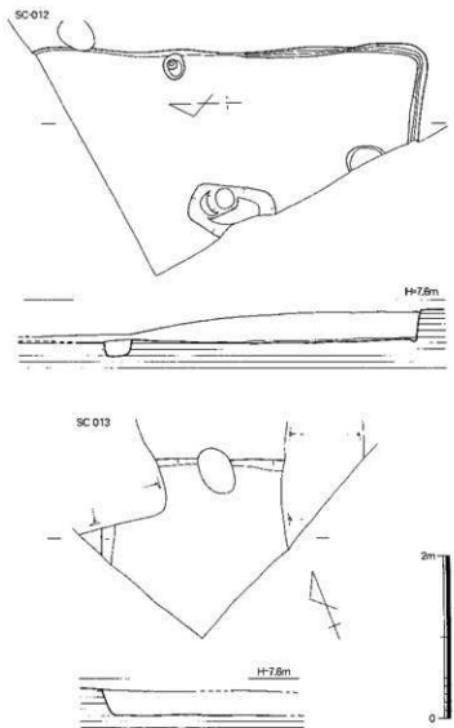


Fig. 32 SC-012・013 遺構実測図 (1/60)

内外面とも摩耗する。弥生中期後半のものとみられる。

SC-013 (Fig. 32 PL. 12)

調査区南西端で検出した方形の竪穴住居。SC-012 に切られ、6世紀の構である 151 次調査の SD-003 に切られている。遺構面からの深さは 25~30cm で、SC-012 と床面の標高はほぼ同じである。主柱穴に該当するビットは検出していない。

床面下に 4~20cm の張り床が施され、張り床下から住居以前のビットが 2 基確認されている。

出土遺物 (Fig. 36) 遺構内からはビニール袋 1 袋分の土器が出土しているが、いずれも小片で摩耗している。2 は底底部とみられ、内外面とも摩耗している。弥生時代中期のものとみられる。

4) 2 区の調査

1 出土遺構・遺物

SC-071 (Fig. 34 PL. 12)

調査区北西侧で検出した方形の竪穴住居。住居南側は SC-072 に切られている。住居西側は調査区

1 区の遺構面は北側道路際で地表から 20cm、南側で 60cm 下で検出され、標高は 7.2~7.5m で遺構面は南から北に向かって 30cm ほど傾斜する。1 区では竪穴住居 2 軒が出土した。2 区では竪穴住居が 3 軒、貯蔵穴 1 基、柱穴群が出土した。竪穴住居は弥生時代中期後半と古墳時代の 2 時期に区別できる。掘立柱建物は、古墳時代~奈良時代にかけての建物群と考えられる。

2 出土遺構・遺物

SC-012 (Fig. 32 PL. 12)

調査区西端で検出した方形の竪穴住居で、一边 4.1m 以上の規模と確認できる。床面は平坦で、床面下に厚さ 30cm の張り床が施され、張り床の土質は褐色粘質土で地山土を粒状に含む。張り床除去後の床面はほぼ平坦な面で、建て替え前の住居床面だった可能性もある。壁際に大型の柱穴が確認されており、建物は 2 本主柱で建てられていたと推定できる。

住居壁面は床面から直立し、住居南東~南側の壁際で幅 10cm、深さ 3cm の壁溝が確認されている。

出土遺物 (Fig. 36) 住居覆土・柱穴内から弥生土器の小片がビニール袋 1 袋分出土した。1 は甕形土器の口縁部破片。

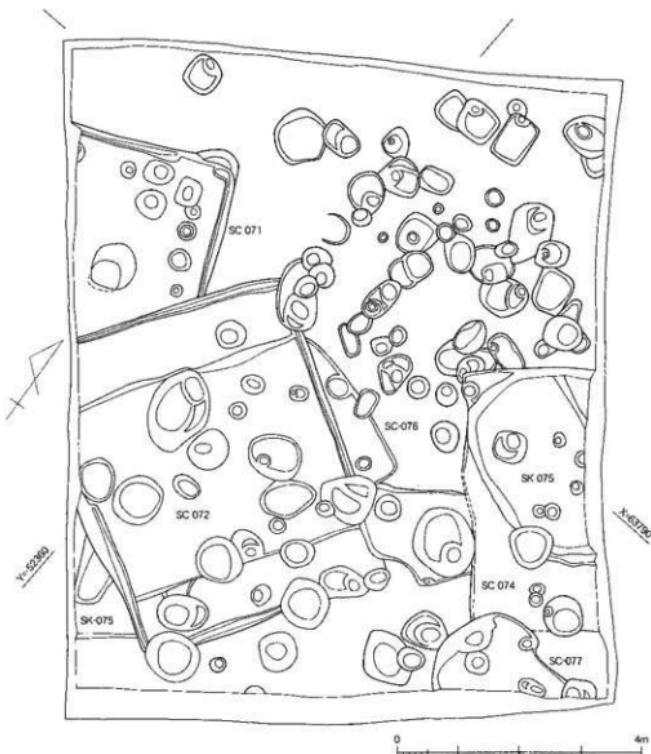


Fig. 33 第152次2区調査区全体図 (1/80)

外に及ぶ。南北幅4.8m、東西幅は2.9mまで確認でき、全体は5m四方の正方形に近い形とみられる。遺構面から住居床面の深さは50cm、床面の標高は7.1mである。床面に貼り床は見られない。

床面中央部に上面径80cm、深さ70cmの大型の柱穴が1基検出されており、これを主柱穴とみると住居上屋は2本主柱で建てられていたと考えられる。

出土遺物 (Fig. 36) 3は弥生土器の小型壺底部と見られる破片。外面とも摩耗しているが、赤色顔料痕が残る。この他、弥生土器、須恵器の小片が住居覆土から出土している。

SC-072 (Fig. 34 Pl. 13)

調査区西側で検出した長方形の堅穴住居で、奈良時代の建物跡により破壊された部分がある。住居の規模は長さ5.4m、幅4.2mで、両側に幅約1mのベッド状遺構が付く。ベッド状遺構は床面から10cmほど高くなっている、両側のベッドはほぼ同じ高さである。両側のベッド状遺構の中央部の側面部に主柱穴とみられる柱痕跡が確認され、住居建物は2本主柱で建てられていたと考えられる。

床面上から完形に近い須恵器杯が2点出土している。

出土遺物 (Fig. 36) 遺構内からは弥生土器・土師器・須恵器が出土した。4は弥生土器の蓋で、埋

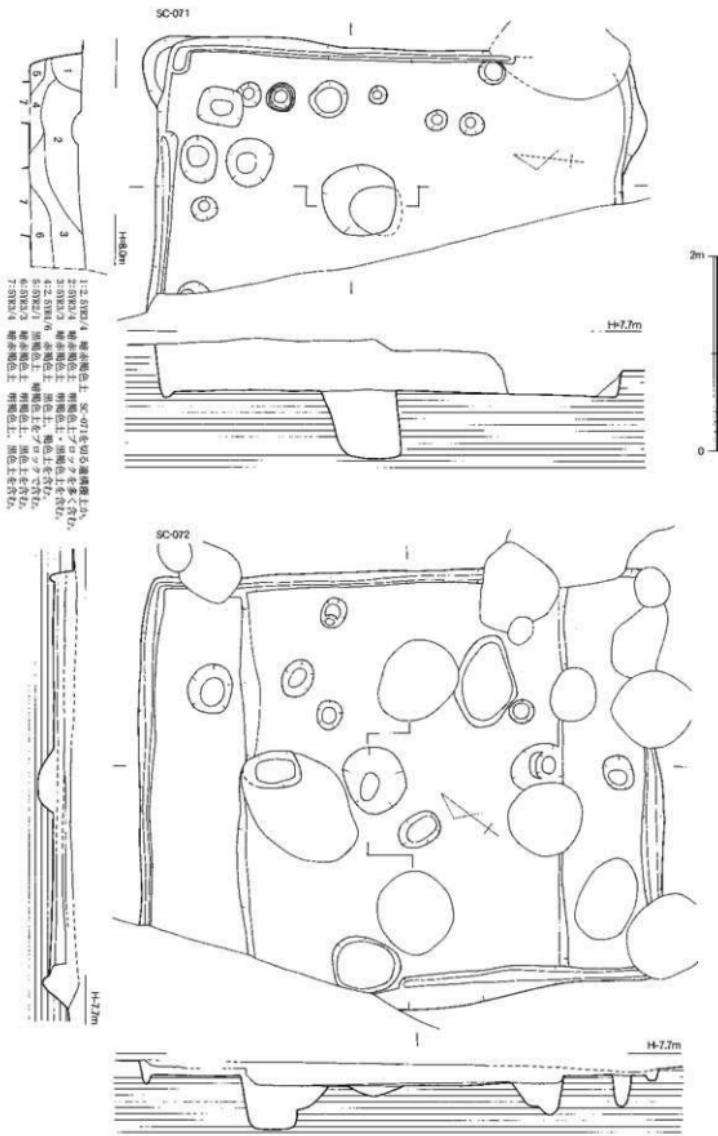


Fig. 34 SC-071・072 遺構実測図 (1/50)

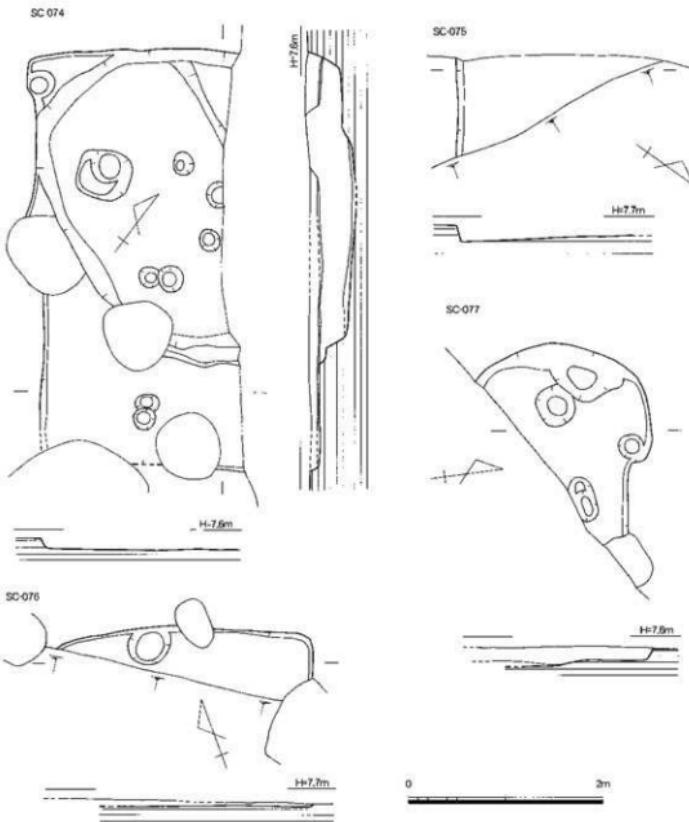


Fig. 35 SC-074～077 遺構実測図 (1/50)

没時に流れ込んだもの。5は須恵器広口壺口縁部。口縁は直立して立ち上がり、内面にヘラ状工具の痕跡が残る。内外面に部分的に自然釉が付着する。6・7は床面直上にあった須恵器壺で、住居の時期はこの須恵器から6世紀後半と推定できる。8は須恵器壺で住居外の柱穴からも破片が出土しており、埋没時に流入したものである。9は弥生土器の壺の底部。

SC-074 (Fig. 35 PL. 14)

調査区西側で検出した方形の堅穴住居で、遺構東半部分は調査区外に及ぶ。南北幅は4.3mを測る。住居の床面はSK-075と重複しており、南側床面の標高は7.4mで、遺構面からの深さは10cm以下で、全体に削平を受けている。壁構やベッド状遺構等の設備は確認できない。床面上で比較的大きな柱穴が2基あり、4本主柱の建物だった可能性もあるが、確定できない。

遺構覆土は黒褐色土で、自然堆積による埋没が想定される。

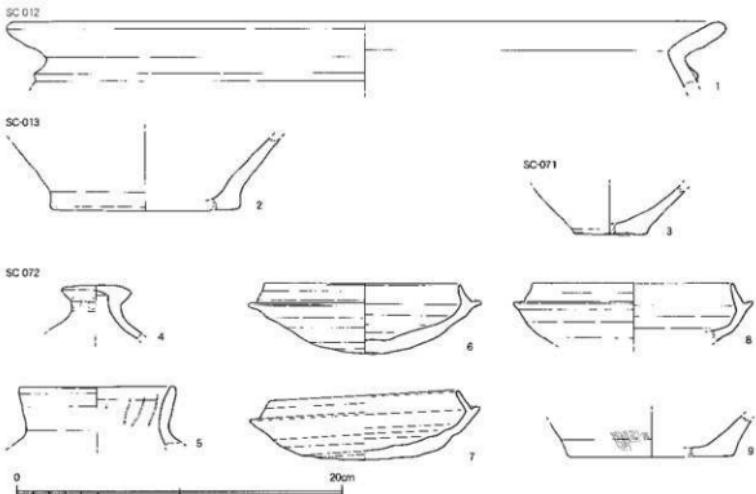


Fig. 36 堪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 遺構内からは弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土しているが、摩滅したものが多く、図示できるものはない。

SC-075 (Fig. 35)

調査区西側で確認された堪穴住居とみられる遺構で、住居の規模は分からぬ。遺構面からの深さは17cmで、床面は南に向かってごく緩く傾斜する。壁溝は確認できない。

出土遺物 遺構内からは弥生土器・土師器破片がビニール袋1袋分出土したが、いずれも小片で摩滅しており、図示できるものはない。

SC-076 (Fig. 35)

調査区中央部で確認された堪穴住居とみられる遺構で、確認できる部分はごく僅かである。遺構面からの深さで5cm以下しか遺存していない。検出部分で壁溝やベッド状遺構は確認できず、SC-072の遺構範囲内に遺存すると見られる主柱穴も確定できない。

出土遺物 調査区内からは弥生土器がビニール小袋1袋分出土しているが、小片で摩滅が著しい。

SC-077 (Fig. 35)

調査区南東側で検出された遺構で、検出状況は不整形だが、堪穴住居の一部と判断した。151次調査2区のSC-071と対応する同一の住居と考えられ、東西、南北ともに5mの規模の堪穴住居が復元可能だが、両者の床面の高さが約15cm異なるため、慎重に検討する必要がある。遺構西側は柱穴の重複等によって本来の形状を失い、北東側の直線部分のみが本来の住居の壁部分と考えられる。

出土遺物 遺構内からは弥生土器のほか、須恵器破片が出土している。ただし重複した別遺構からの紛れ込みも考えられ、遺構の時期は出土遺物からは確定できない。

SB-079 (Fig. 37 PL. 14)

調査区南側で確認された大型の柱穴群で、調査区内では1×4間の範囲が確認できるが、建物はさらに東あるいは南に続くことが考えられる。建物の軸線は正確に東西方向に向き、梁行1.5～

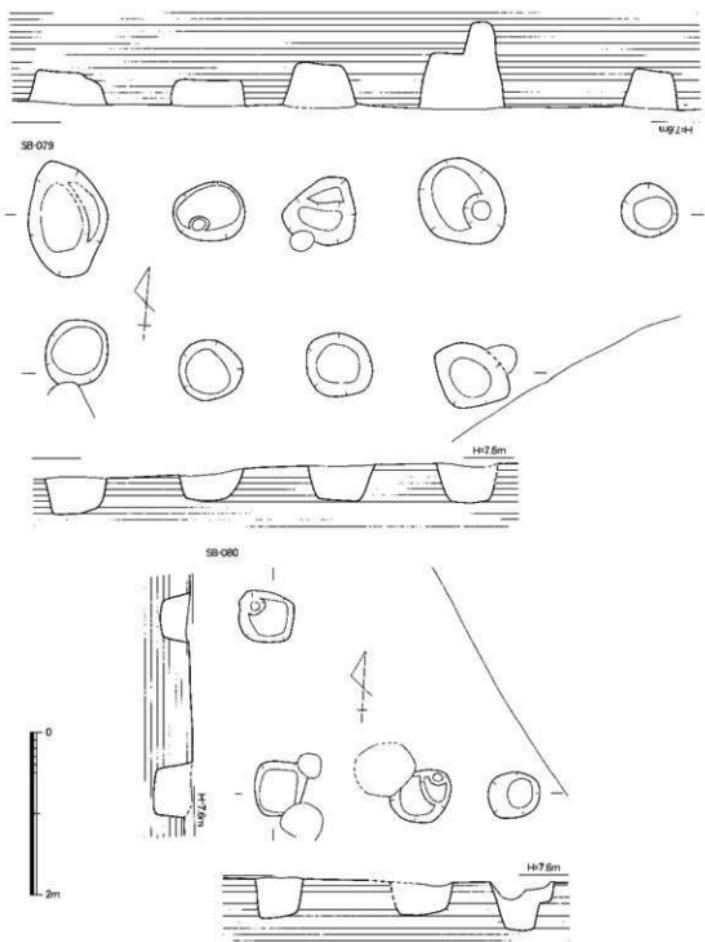


Fig. 37 SB-079・SB-080 遺構実測図 (1/60)

2m、桁行 1.7~2m を測る。平面形は円形から楕円形で、直径約 80~120 cm、遺構面からの深さは 30 cm から最大 1.1 m である。柱の痕跡が遺存するものはないが、一部の柱穴に残る 2 段掘りの形状から、20~30 cm の直径の柱が建てられていた可能性がある。

柱穴の規模や柱間の長さからみて、相当規模の建物が建てられていたことが考えられる。

出土遺物 柱穴内からは弥生土器・土師器・須恵器が出土しているが、細片が多い。須恵器坏で、6

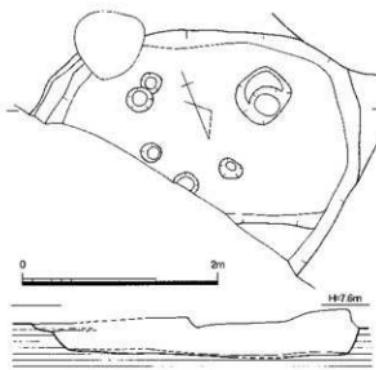


Fig. 38 SK-075 遺構実測図 (1/40)

世紀末～7世紀初頭の様相を示すものがある。
SB-080 (Fig. 37)
 調査区北東側で確認できた柱穴列。柱穴は隅丸方形と円形の2種類があり、柱穴の大きさは60～70cm、深さは40～60cmである。柱穴列は1×2間分が確認できる。柱間は南北2.2m、東西1.5～1.8mである。

出土遺物 柱穴内からは弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土している。図示可能なものはない。

SK-075 (Fig. 38 Pl. 13)

SC-074 の掘削途中で確認された遺構で、調査当初はSC-074の一部と誤認して掘削した。土層断面の観察から、SC-074よりも先行して掘削された遺構であることが明らかである。遺構の平面形は隅丸方形で、長さ3.4m、幅2.0mの規模で

ある。床面はほぼ平坦で、小型のピットが確認できる。遺構南側は階段状に作られている。

出土遺物 (Fig. 39) 10は弥生土器の甕の口縁部。口縁はL字に屈曲した後、垂下するように伸びる。11は弥生中期後半の鉢。底部はやや上げ底になる。内外面とも摩滅しているが、指圧整形痕が残る。12は小型の鉢。体部は内湾し、内外面ともに赤色顔料痕が残る。

これらの出土遺物から、遺構の時期は弥生中期後半頃と考えられる。

その他の出土遺物 (Fig. 39)

13はSP-330出土の土師器坏。口径13.6cmで、底部は回転ヘラケズリ、体部は回転横ナデ。

5) 小結

152次調査では弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居が重複して検出され、複数の時期にわたって集落が営まれていたことが判明した。

出土した遺物からみて、堅穴住居の時期は弥生時代中期後半～末の時期と古墳時代後期の時期の2時期に区分できる。152次1区、2区の調査区内ではSC-072が確実に古墳時代のものとでき、それ

以外のベット状遺構を持たない方形の堅穴住居は弥生時代中期後半とすることができそうである。

また、遺構が遺存している時期の遺構も大きく削平されており、当時は現在確認できる遺跡の規模よりもさらに多くの建物や遺物が存在したと考えるのが適切である。

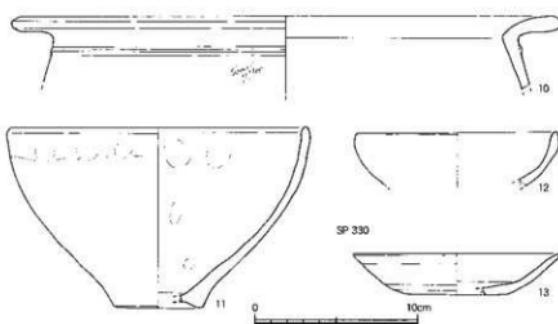


Fig. 39 SK-075 出土遺物実測図 (1/3)



1) 1区全景（南から）



2) 2区全景（東から）

PL.12



1) SC-012 (南から)



2) SC-013 (南東から)



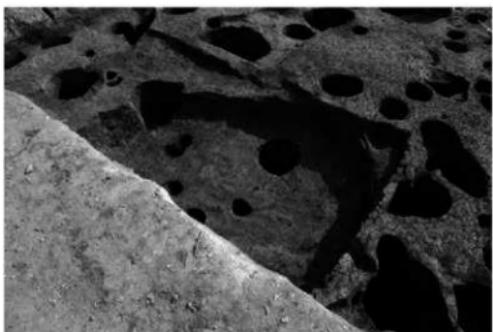
3) SC-071 (西から)



1) SC-072 (南から)



2) SC-072 (北西から)

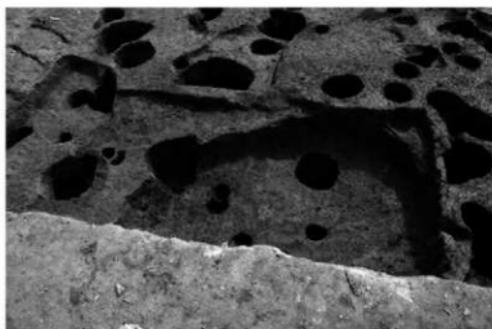


3) SK-075 (北東から)

PL14



1) SC-074 (南西から)



2) SC-074 (東から)



3) SB-079 (東から)

5. 第 153 次調査

1) 調査に至る経緯

平成 26 年 5 月 16 日、福岡市教育委員会に福岡市博多区那珂 1 丁目 102 番、103 番（住居表示：那珂 1 丁目 6 番 14 号）における埋蔵文化財の有無について照会文書が提出された。これをうけて埋蔵文化財審査課では、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていることから、平成 26 年 6 月 12 日に確認調査を行い、その結果敷地北側で地表下 80～90 cm で遺構面を確認した。この結果を受けて申請者と埋蔵文化財審査課で協議を行い、建物建設部分については杭工事を伴うため、これらの範囲について発掘調査を実施することで合意した。調査の実施については、申請者の個人専用住宅部分については国庫補助事業として発掘調査を実施し（153 次）、共同住宅部分については本市の埋蔵文化財発掘調査国庫補助事業適用要項に基づき、個人事業に係る国庫補助金一部適用事業として（154 次）行うこととなった。

発掘調査は平成 26 年 9 月 10 日から開始し、同年 9 月 23 日まで実施した。調査面積は 91.0 m² である。

2) 調査組織（発掘調査：平成 26 年度 整理報告：平成 27 年度）

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課 課長 常松 幹雄

調査第 2 係長 榎本 義嗣

調査・整理庶務：埋蔵文化財審査課管理係 横田 忍

事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係 比嘉えりか（平成 26 年度） 大森真衣子（平成 27 年度）

調査・整理報告担当：大塚 紀宜（平成 26 年度：埋蔵文化財調査課調査第 2 係主任文化財主事・平成 27 年度：埋蔵文化財審査課管理係長）

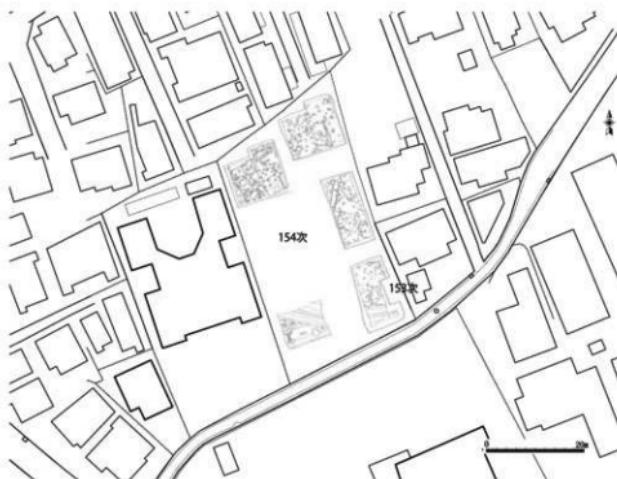


Fig. 40 第 153・154 次調査区位置図 (1/1,000)

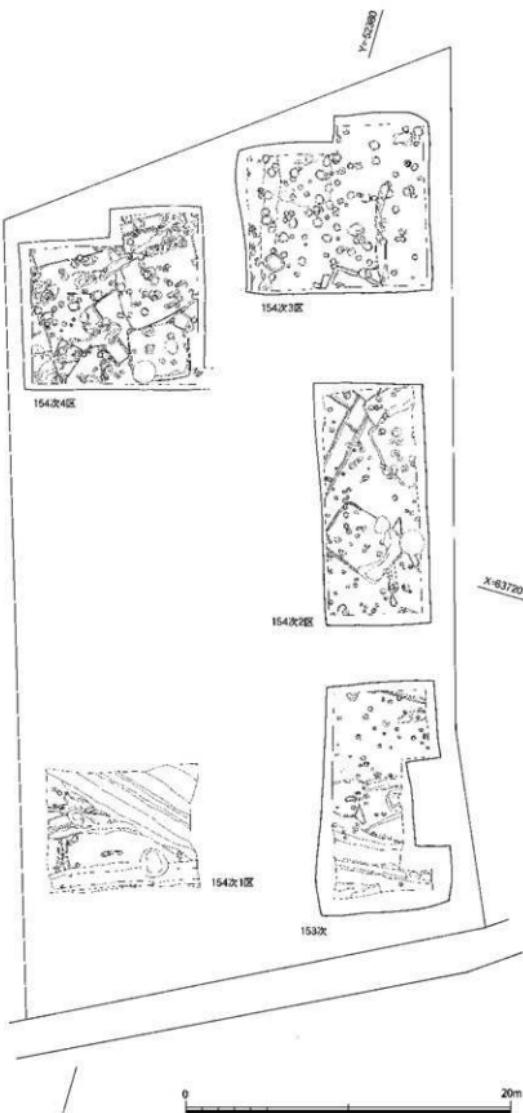


Fig. 41 第153・154次調査区配置図 (1/300)

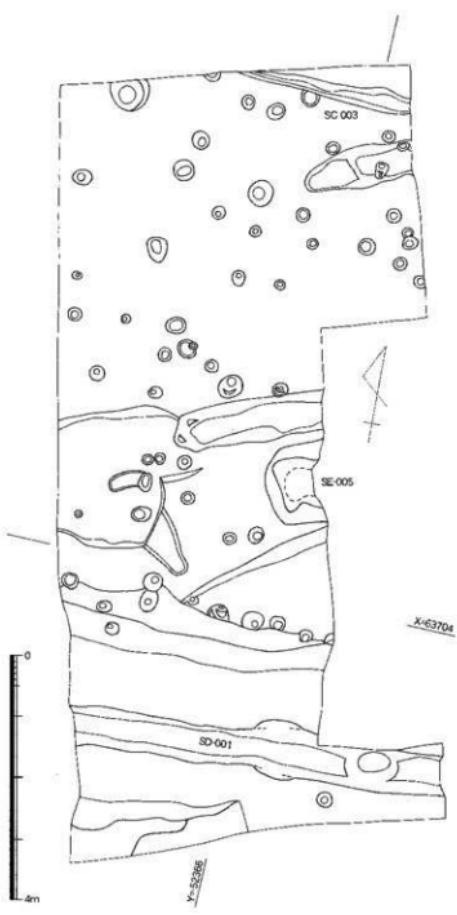


Fig. 42 第153次調査区全体図 (1/80)

3) 調査概要

第153次調査区は、154次調査区を含めた敷地の南東側に位置する。那珂遺跡群の東部に位置し、八手手状に延びる低丘陵の尾根にあたり、標高は約10mである。敷地内は昭和40年代まで畠地として耕作された後に盛り土造成して宅地化された。

調査区の設定にあたっては、既存の庭木を移設することができなかつたため、調査区の形状は一部が回んだ長方形として、東西6.0m、南北12.6mの範囲で設定した。

現地の標高は9.2m前後で、現地表から60cmは造成盛り土の花崗岩風化土（マサ土）が堆積し、その下層は20cmの黒色粘質土が堆積する。この黒色粘土は以前畠地として耕作していた際の耕作土である。その下面で明褐色ローム層を検出し、その上面で遺構を確認した。

調査の結果、調査区南側で大型の溝状遺構を1条検出した。溝は東西方向に向き、上端幅は4m、遺構面からの深さは2.2mを測る。溝からは弥生時代中期後半から弥生時代後期、古墳時代前期に至るまでの土器が出土している。また、この溝を切る形で中世の井戸が掘りこまれていることが判明した。

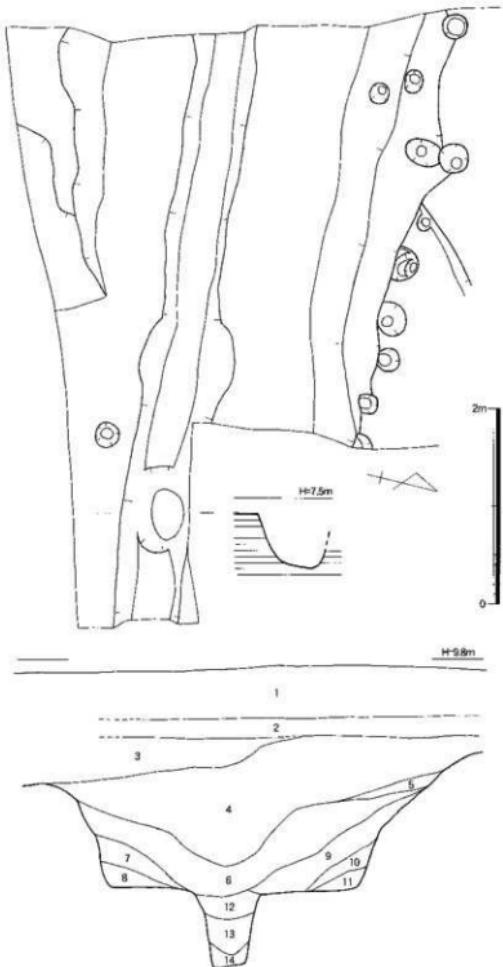
調査区北側では中世とみられる小規模の柱穴群が検出されている。また弥生～古墳時代の住居の一部が確認された。

4) 検出遺構・遺物

1 溝状遺構

SD-001 (Fig. 43 PL. 15・16)

調査区南側で検出した大型の溝状遺構。遺構面での検出幅は4.0m、遺構



- 1:造成盛土 真砂土上で、崩れやすす。
 2:SYR4/1 黒褐色土上 粘砂を多く含む。湿度、日焼け上。
 3:SYR4/2 黒褐色土上 粘砂を多く含む。湿度、日焼け上。
 4:SYR3/3 噴出褐色土 上らかい。湿度、粘土質を多く含む。
 5:SYR4/6 黑褐色土上 明褐色土ブロックを多く含む。粘土質だが、やや乾い。
 6:SYR3/3 噴出褐色土上 4層より組成。明褐色土を多く含む。砂粒を若干含む。
 7:2 SYR2/2 植被暗褐色土上 粘質土で明褐色土粒を多く含む。砂粒を若干含む。
 8:SYR4/6 赤褐色土 噴出褐色土をブロックで挟む。細砂を多く含む。乾い。
 9:SYR4/6 噴出褐色土上 粘砂を多く含む。明褐色土を多く含む。柔らかく崩し。
 10:SYR2/2 黒褐色土上 噴出褐色土を多く含む。湿度、日焼け上。
 11:SYR4/4 黑褐色土上 噴出褐色土を多く含む。柔らかく崩し。無い。7層に対応するものか。
 12:SYR3/3 噴出褐色土上 粘性高く、柔らかい。粗砂を若干含む。
 13:SYR3/3 噴出褐色土上 粘性高く、明褐色土ブロックを多く含む。
 14:SYR2/2 黑褐色土上 粘性高く、湿度高く、柔らかい。八女粘土ロックを多く含む。

Fig. 43 SD-001 遺構実測図 (1/50)

面からの深さは 2.4 m に達する。断面形は箱掘りの溝を 2 段重ねた特異な形状である。上段の溝は遺構面からの深さが 1.5 m、下端幅は 2.0 ~ 2.5 m の規模で、下端面の標高は溝の東端で 6.4 m、溝の西端で 6.35 m で、調査区内で標高差はほとんど見られず、床面は完全な平坦面をなす。下段の溝は上段の溝の中央に掘られ、上面幅は 0.6 m、深さ 0.8 m、床面幅 30 ~ 40 cm で非常に細い。最下面の床面には細かい凹凸がみられるが、水が流れた痕跡や通路として使用された痕跡はない。最下面の標高は溝の東端で 5.6 m、溝の西端で 5.6 m で、下段の溝の床面も調査区内での標高差はほとんどない。また下段溝床面の高さで、地山土は灰白色の八女粘土に達する。

溝北側の上端際には径 30 cm ほどの柱穴が並んで位置しており、溝沿いに櫛などの工作物が築かれていた可能性が高い。これらの柱穴は溝埋没前に埋まっており、工作物撤去後に溝が埋没したとみられる。

溝東側部分で、溝上部から円形に掘り込まれた痕跡を確認し、11 ~ 12 世紀の井戸であると確認した。井戸は北側の一部が調査区外に及ぶが、直径約 90 cm の規模だったとみられる。井戸と溝の覆土は近似しているが、井戸部

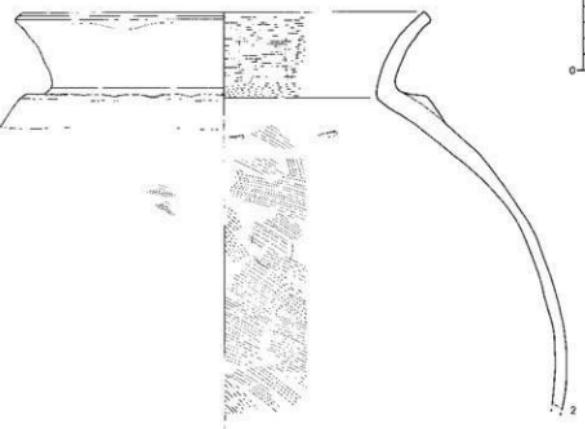
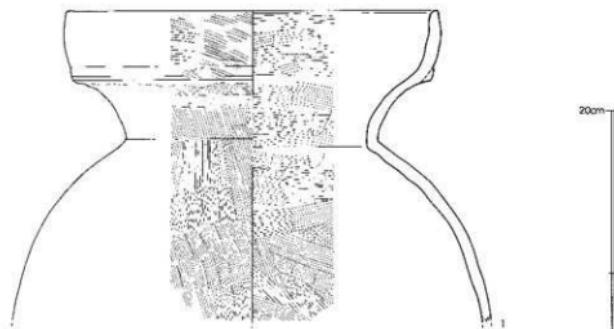


Fig. 44 SD-001 出土遺物実測図 1 (1/3)

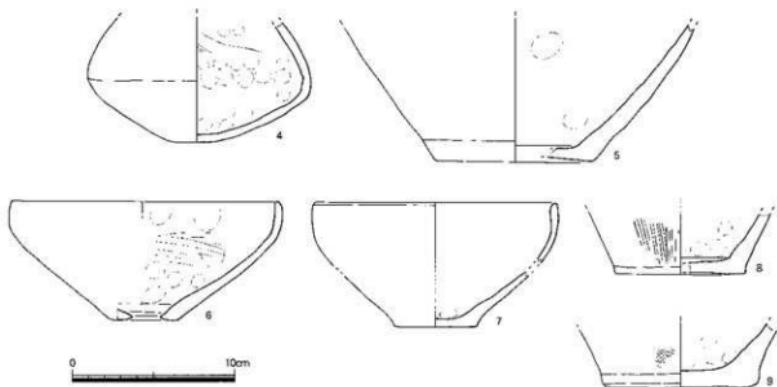


Fig. 45 SD-001 出土遺物実測図 2 (1/3)

分の覆土は特に軟弱になっている。

溝内部の土層の堆積状況を見ると、下段の溝内部には粘性が高い暗褐色土や黒褐色土が含まれ、地山土ブロックが含まれることから、下段の溝は比較的短期間に自然埋没したとみられる。上段の溝は床面隅に極端赤褐色土や赤褐色土の地山土に比較的近い土が堆積し、その上層に地山土を粒状に含む脆い土が堆積することから、6層以下は短期間に流入した土砂で埋没したとみられる。上層の4層は緻密で、長期にわたって堆積したことがうかがえ、この層から土器が大量に出土したことから、浅めの凹んだ溝に土器を廃棄しながら埋没が進んだものと考えられる。この土層観察から、まず下段の溝が埋没した後で上段の溝が箱状に残り、その後上段の溝も両側からの土砂の継続的な流れ込みにより埋没したことがわかる。溝の埋没期間については溝内部の覆土に含まれる遺物が弥生時代中期後半から古墳時代前期まで長期にわたる遺物が含まれることから、2、3百年かけて徐々に埋まっていったことが推定される。

溝の南側は後世の擾乱によって本来の溝の側面が壊され、原型をとどめていない。また、調査の際の表土除去の際に、調査区南東端の部分にあった擾乱を重機で除去したため、SD-001の東側部分は上段中位まで失われていたことを記録しておく。

出土遺物 (Fig. 44~48) Fig. 44~45 は溝上段からの出土土器。1は二重口縁壺。口縁は頸部から屈曲して内湾気味に直立する。頸部は漏斗状にすぼまり、胴部は球形になるとみられる。内外面ともハケ目。2は短頸壺とみられる。口縁は短く開き、胴部は頸部で屈曲して大きく膨らむ。頸部下に低い突帯が1条付き、突帯上面は連続して工具を当てた痕跡が残る。外面は摩滅しているが、内面にはハケ目が残る。1、2は北部九州外からの搬入品とみられる。3は大型の甕破片。口縁は頸部から屈曲して「くの字」に立ち上がり、頸部下に突帯が1条付き。内外面とも摩滅が著しい。

4は長頸壺の胴部とみられる。底部はわずかに面取りし、胴部は算盤玉形を呈する。外面は摩滅し、内面には指オサエ痕と工具痕が残る。5は底部が欠けており、焼成後の穿孔があった可能性がある。底部は平底で、胴部は底部から膨らみ気味に立ち上がる。弥生時代後期の甕形土器とみられる。

6~7は鉢。6は上半部が内湾し、底部に焼成後の穿孔がある。内外面とも丹塗り痕あり。7は6とほぼ同じ器形で、上半部が内湾し、底部は平底である。内外面とも摩滅が進み、調整や丹塗りの有無

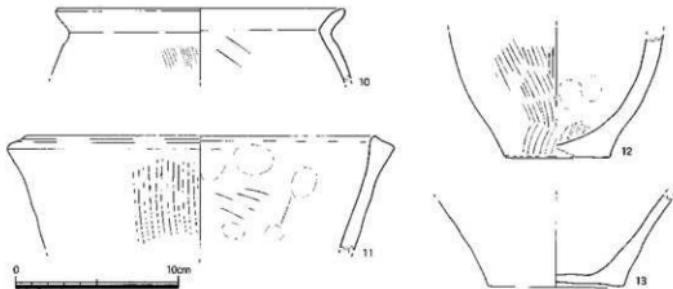


Fig. 46 SD-001 (下段) 出土遺物実測図 (1/3)

は不明。8・9は甕形土器の底部。いずれも平底で、外面は縦方向ハケ目。弥生後期前半以前の時期のものである。

Fig. 46 は溝下段からの出土土器。10は小型甕の口縁部。口縁は短く外反する。外面はハケ目、内面には板状工具痕が残る。11は大型器台の口縁部とみられ、復元口径は23.6 cmになる。端部はやや厚めにし、外面に縦方向ハケ目を施し、内外面に丹塗りの痕跡が残る。12は小型壺の底部。胴部は長胴形になるとみられ、外面は粗いハケ目、内面は指オサエ痕跡と板状工具痕が残る。13は甕形土器の底部。底部はわずかに平底で薄く作られる。外面は摩滅が著しい。

Fig. 48 は溝東側で検出した井戸と見られる円形の掘り込みの中から出土した陶磁器。15は白磁皿。底部は平底で露胎。体部外表面と内面は全面灰白色の釉がかかり、内面見込みには劃花文をヘラ描きと櫛描きで描く。16は白磁碗底部。外面は底部付近は露胎、内面は施釉され、見込みは重ね焼きのために輪状に釉を掻き取り、砂目が残る。釉色は灰白色。17は青磁碗。釉色はオリーブ黄色で、内面に櫛描文が施される。18は碗の底部。底部付近は露胎で、外面の釉は一部底部まで釉垂れしている。外面上部と内面は施釉される。小片で詳細は不明だが、朝鮮青磁の碗の可能性もある。

2 井戸

SE-005 (Fig. 49 PL. 16)

調査区中央で検出した素掘りの井戸。造構東側は調査区外に及ぶ。井戸側壁が方形に近い形状であることから、平面形は円形に近い隅丸方形とみられる。造構面での径は1.3 mで、造構面から1.7 mまでの深さまで掘削により確認したが、完掘していない。掘削最下部の径は50 cmで、断面形は細長い漏斗状を呈する。

造構覆土は、上層から極暗褐色土、褐色土、純赤褐色土が堆積し、いずれも粘性が高く、柔らかく。掘削最下部の覆土は水分を多く含む。

出土遺物 造構内か

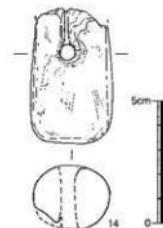


Fig. 47 SD-001 出土石製品 (1/2)

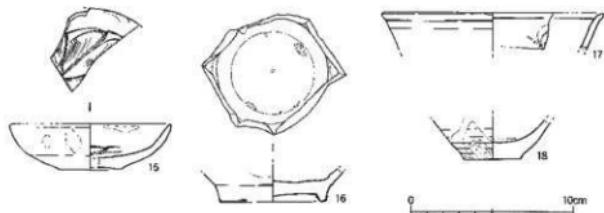


Fig. 48 SD-001 出土遺物実測図 3 (中世遺物) (1/3)

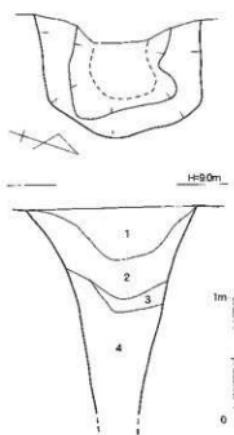
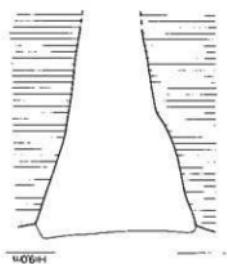


Fig. 49 SE-005 遺構実測図
(1/40)

とが考えられる。今までの時点で該当する遺構は周辺の調査では確認されていないが、今後の調査で新たな知見が出てくることが十分考えられる。

調査区北端で検出された堅穴住居は古墳時代のものとみられ、154次調査など周辺の調査区で確

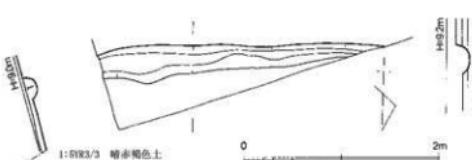


Fig. 50 SC-003 遺構実測図 (1/50)

らは弥生土器がビニール袋1袋分出土した。大半が細片で、いずれも摩耗が著しく、図示可能な遺物はない。弥生時代中期後半～後期の土器とみられる。

3 堅穴住居

SC-003 (Fig. 50 PL. 16)

調査区北端で一部を検出した堅穴住居。調査区内では住居の南端のみが確認でき、住居の四隅すら確認できていない。また遺構面から住居床面まで7cmしか遺存しておらず、削平も著しいとみられる。壁はほぼ東西に向き、壁際には幅30cm、深さ12cmの壁溝が掘られている。遺構覆土は暗赤褐色土で、粘性が高い。

このSC-003は154次調査2区の南端で検出された堅穴住居の一部と対応して1軒の住居を構成する可能性がある。

出土遺物 遺構内からは須恵器小片が1点出土したが、小片のため図示できず、器形も不明である。同時に滑石破片1点が出土しており、周辺調査区で出土した滑石製玉製品との関連が考えられる。

5) 小結

今回の調査では弥生時代の大型の溝状遺構をはじめ、弥生時代から古墳時代にかけての遺構群と中世の井戸の痕跡を確認した。大型の溝状遺構は154次調査1区で同一とみられる溝状遺構を調査しており、この溝が台地上を廻る大規模な遺構の一部である可能性が高くなっている。遺構の全容がわからぬため、この溝が掘られた原因や理由、また溝の機能や目的については一切不明だが、掘削された時期が弥生時代中期後半頃であり、完全に埋没したのが古墳時代前期～中期にかけてという点で、当時博多湾沿岸にあったとされる「奴国」の拠点とされる比恵・那珂遺跡群の全盛期に作られ、維持されていたことは明らかである。

また、比恵・那珂遺跡群全体で見ても、これほどの大規模な溝状遺構は他の調査では確認されておらず、今回調査した153次調査地点付近にこの大型の溝を必要とするほど重要な施設があったこ

とが考えられる。現在までの時点で該当する遺構は周辺の調査では確認されていないが、今後の調査で新たな知見が出てくることが十分考えられる。

認された堅穴住居と合わせて、古墳時代にはこの地区に広範囲に堅穴住居で構成される集落が作られていたことが考えられる。



1) 調査区全景（西から）



2) 調査区北半部（北から）



3) SD-001（西から）



1) SD-001 西壁土層（東から）



2) SC-003 (北から)



3) SE-005 (西から)

6. 第 154 次調査

1) 調査に至る経緯

平成 26 年 5 月 16 日、福岡市教育委員会に福岡市博多区那珂 1 丁目 102 番、103 番（住居表示：那珂 1 丁目 6 番 14 号）における埋蔵文化財の有無について照会文書が提出された（申請番号 26-2-139）。これをうけて埋蔵文化財審査課では、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていることから、平成 26 年 6 月 1 日と 9 月 2 日に確認調査を行い、その結果敷地北側で地表下 80～90 cm で遺構面を確認した。この結果を受けて申請者と埋蔵文化財審査課で協議を行い、建物建設部分については杭工事を伴うため、これらの範囲について発掘調査を実施することで合意した。154 次調査については本市の埋蔵文化財発掘調査国庫補助事業適用要項に基づき、個人事業にかかる国庫補助金一部適用事業として行うこととなった。

発掘調査は平成 26 年 9 月 24 日から開始し、同年 12 月 12 日まで実施した。調査面積は 4 調査区の合計で 409.3 m² である。

2) 調査組織（発掘調査：平成 26 年度 整理報告：平成 27 年度）

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

調査統括：福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課 課長 常松 幹雄

調査第 2 係長 榎本 義嗣

調査・整理庶務：埋蔵文化財審査課管理係 横田 忍

事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係 比嘉えりか（平成 26 年度） 大森真衣子（平成 27 年度）

調査・整理報告担当：大塚 紀宜（平成 26 年度：埋蔵文化財調査課調査第 2 係主任文化財主事・平成 27 年度：埋蔵文化財審査課管理係長）

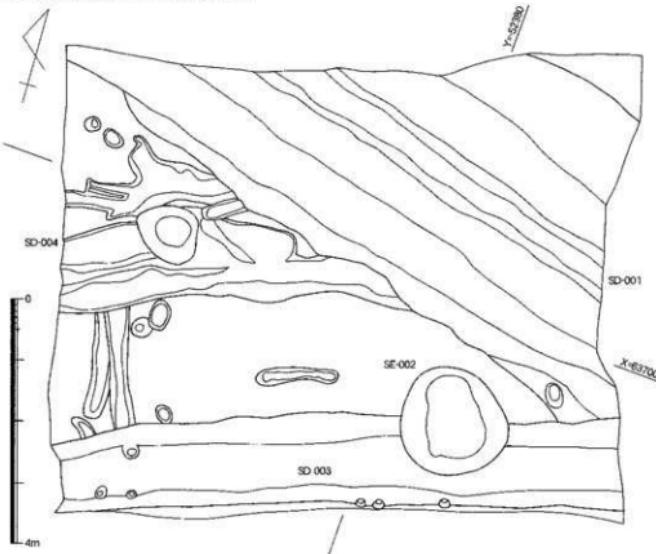
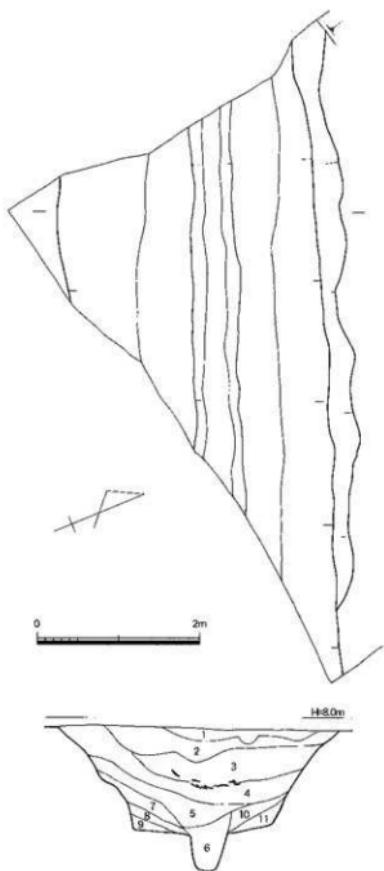


Fig. 51 第 154 次 1 区調査区全体図 (1/80)



- 1:SYR4/3 黄褐色土 粗砂を少量含み、粒っぽい。
 2:SYR2/3 橙褐色土 黏性高く、粗砂、須恵器・土師器破片を多く含む。
 3:SYR3/4 暗赤褐色土 明褐色土粒を多く含む。粗砂を若干含み、柔らかい。
 弥生中期末～後期の土器を非常に多く含む。
 4:SYR3/4 暗赤褐色土 3層と近似する。明褐色土粒を若干含み、粘性高い。
 弥生中期末～後期の土器を若干含む。
 5:SYR2/3 暗赤褐色土 粘性高く、柔らかい。粗砂を多く含む。須恵土器片
 を若干含む。
 6:SYR2/3 暗赤褐色土 非常に粘性高く、柔らかい。須恵土器片を若干含む。
 7:SYR2/3 暗赤褐色土 明褐色土粒を多く含む。粗く、粗砂を多く含む。
 8:SYR2/2 暗赤褐色土 粗砂を多く含む。明褐色土粒がロックを多く含み、
 粘り。
 9:SYR4/5 赤褐色土 深色土をしみ込むに若干含む。柔らかく、細い。
 10:SYR3/3 暗赤褐色土 明褐色土粒を多く含む。粘性高く、柔らかい。
 11:SYR4/4 黒褐色土 黑褐色土をしみ込むに含む。粗砂を多く含み、柔らかく、粘性高い。

Fig. 52 SD-001 遺構実測図 (1/60)

3) 発掘調査の記録

1 調査概要

調査対象地は153次と同一の敷地で、弥生時代前期の環濠が確認された67次調査の北側に隣接し、弥生時代から古代にかけての集落跡を検出した142次調査の南側に隣接する。敷地内は昭和40年代まで畠地として利用されており、その後に盛土造成を行って宅地として造成された。那珂遺跡群が位置する丘陵の比較的高所に位置しており、敷地内の標高は調査時点で8.9mである。

調査対象範囲は建物部分であり、建物4棟の建築範囲がそれぞれ調査区として設定され、1区から4区と設定して調査を実施した。遺構面は各区ともほぼ同じで標高7.8m前後であり、100mほど北側に位置する151・152次調査区との比高差は30～40cmしかないが、これはある時期に丘陵頂部を広い範囲で造成したことによるものと推定される。

1区では153次調査で確認された大型の溝状遺構の延長部が確認できた。溝からは弥生時代中期後半から後期の土器が大量に出土し、土器と同時期の集落が溝の周間にあったことを示している。また中世の井戸や溝状遺構も確認し、153次調査の井戸とみられる掘り込みとあわせて、11世紀後半から12世紀前半の時期にこの地区が利用されていたことが確認された。

2区では弥生時代後期前半と古墳時代後期の竪穴住居6基が確認できた。弥生時代後期前半の竪穴住居はやや小型のものである。古墳時代後期の住居は大型である可能性があり、特別な建物が建てられていたことが考えられる。

3区では2×2間の掘立柱建物1棟と井戸1基を確認した。掘立柱建物は古墳時代から奈良時代のものとみられ、井戸からは弥生時代中期後半の土器が大量に出土した。

4区は遺構密度が最も高い調査区で、削平を受けた度合いが低いことが推定できる。4区からは弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居が確認された。また弥生時代中期の小型の貯蔵穴とみられる土坑や、古墳時代から奈良時代にかけての溝状遺構も確認された。

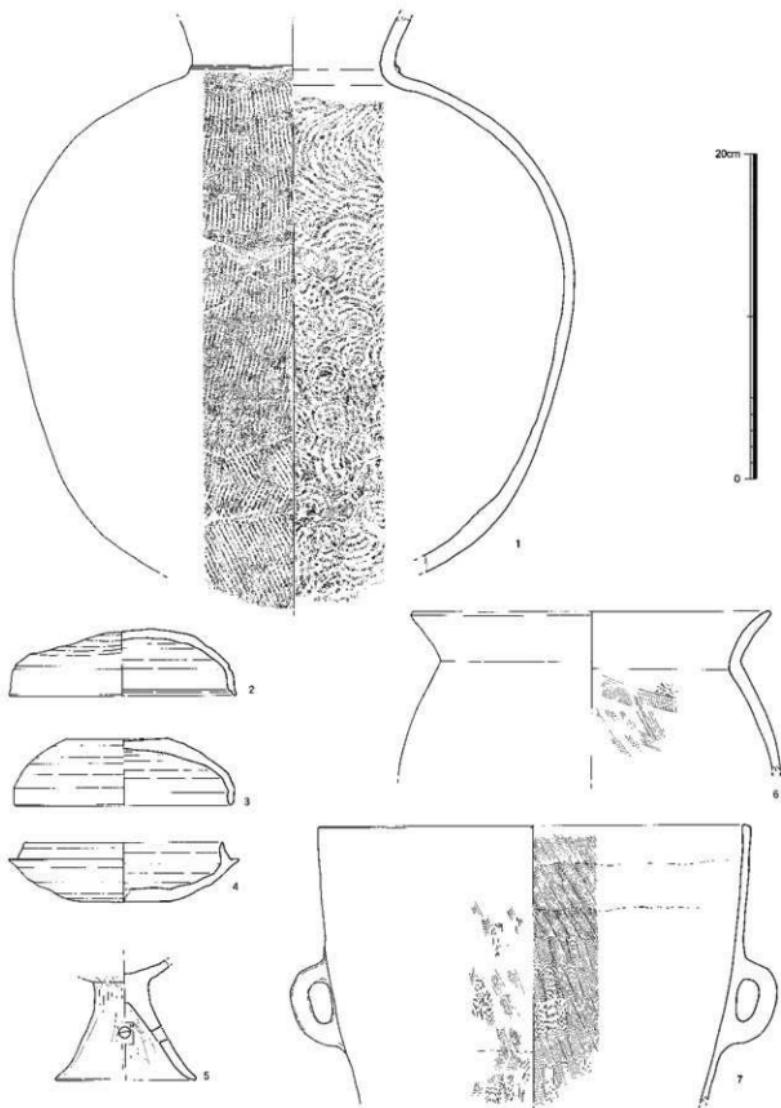


Fig. 53 SD-001 出土遺物実測図 1 (1/3)

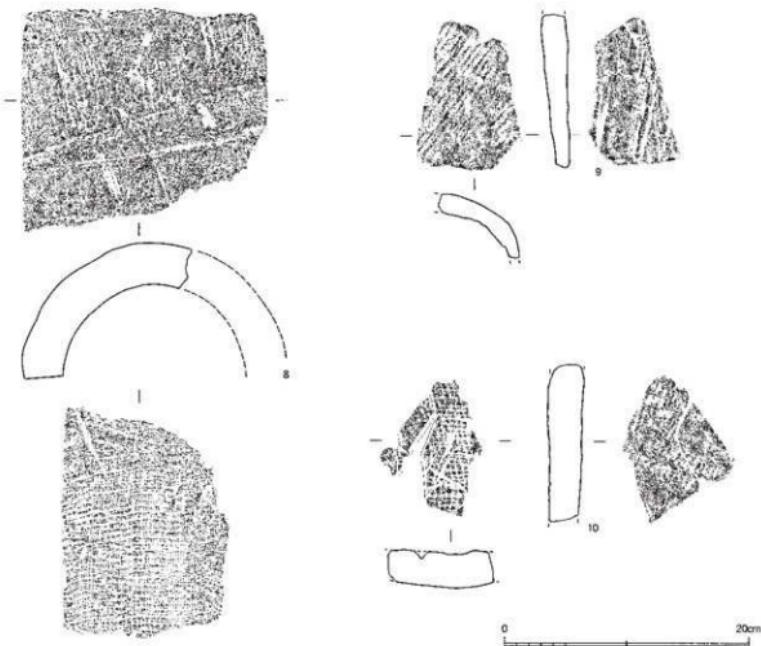


Fig. 54 SD-001 出土遺物実測図 2 (1/4)

2 1区の調査

(1) 溝状造構

SD-001 (Fig. 52 PL. 17・18)

調査区内を南東から北西に向けて走る大型の溝状造構。153次調査のSD-001と同一の構とみられ、規模や断面形がほぼ同じである。断面形は2段掘りで上下の箱掘りの溝で構成され、下段の溝は上段の溝のほぼ中央に位置し、この形状も153次SD-001と同じである。上段上面で幅4.1～4.2m、上段下端幅は2.2～2.3m、下段上面幅70～80cm、下段床面幅30～50cmである。造構面からの深さは2.4m、上段床面の標高は6.1～6.2m、下段床面の標高は5.6mで、これは153次調査SD-001とほぼ同じ標高であることを示し、30m近い長さにわたってほぼ水平に溝を掘削したと考えられる。

上段の溝は、壁面は上方にハの字に広がって立ち上がり、両側の壁面の傾斜角はほぼ同じである。床面は中央に向かってごく緩く傾斜しており、北側で7cm、南側で5cmの傾斜が認められる。上段床面の標高は調査区東端で6.05m、西端で6.03mで、調査区内的東西で床面の比高差はほとんどない。

下段の溝は断面形がU字形に近い箱掘りで、床面に狭い平坦面を形成する。両側の壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。下段床面の標高は調査区東端で5.6m、西端で5.5mで、調査区内で10cm

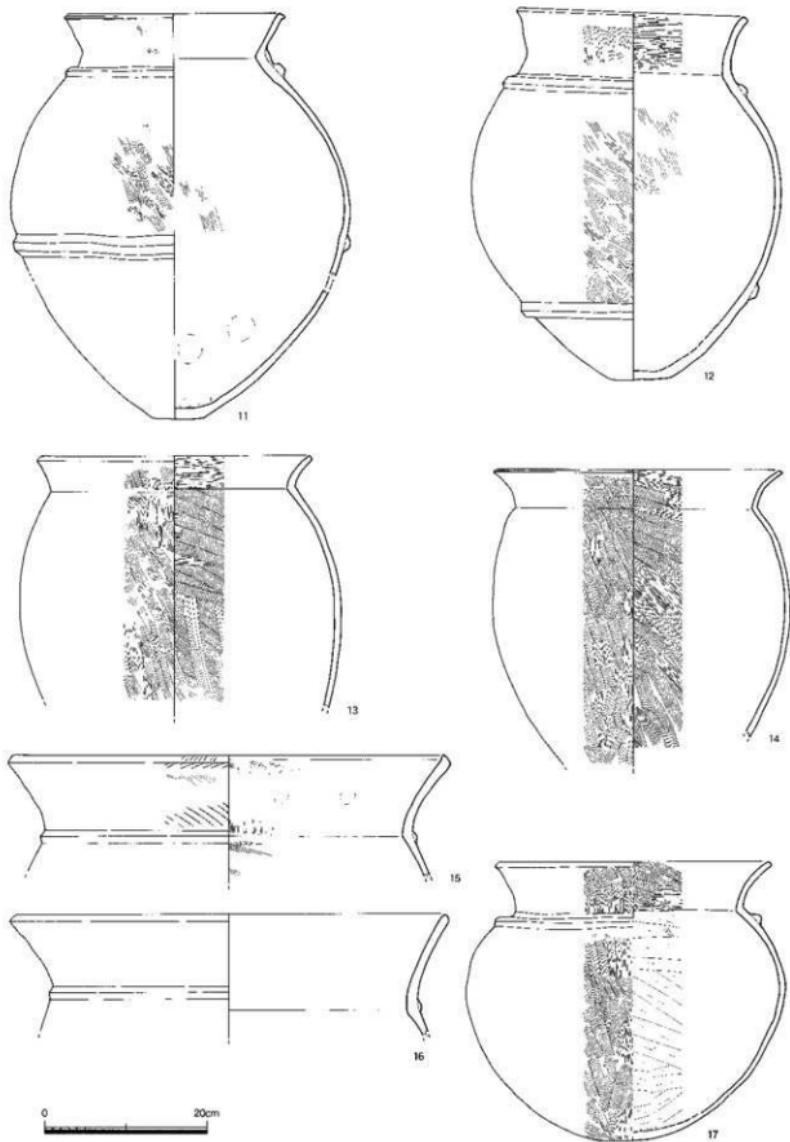


Fig. 55 SD-001 出土遺物実測図 3 (1/6)

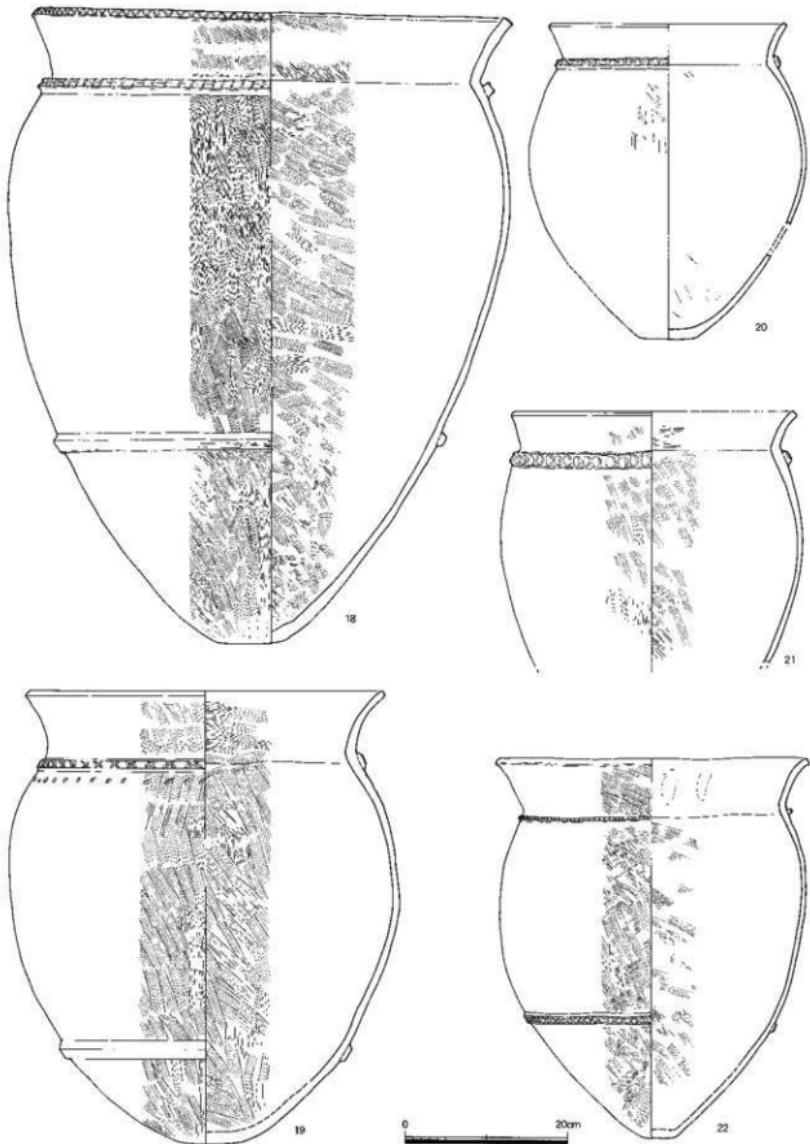


Fig. 56 SD-001 出土遺物実測図 4 (1/6)

程度のごく緩い傾斜が見られる。

遺構内の覆土は、下段溝と上段溝下位で暗赤褐色土が堆積し、上段溝の下段両際では極暗赤褐色土が地山壁面を削りながら流入する自然堆積の状況を示している。上段溝の覆土は中位から上位にかけて長期にわたって堆積した状況が見られ、上段溝の中位付近で弥生時代中期末～後期の大量の土器が投棄されていることから、溝の埋没過程の途中で浅い凹み状の溝に土器を投棄したものとみられる。この土器投棄の状況は溝の底部や上部には見られないことから、溝の埋没当初から行われていたことではなく、本来の溝の機能とは異なっていたと考えられる。溝上層の覆土には古墳時代の須恵器が含まれ、古墳時代に入つても溝の埋没が進んでいたことが分かり、溝の埋没に数百年かかっていたことが想定される。また溝の最上層には中世の陶磁器破片が含まれており、SD-004 のような別の中世の溝が重複していたと考えられる。

153 次 SD-001 で確認された、溝最下部での八女粘土層は、154 次 1 区の調査範囲内では確認できなかつた。

出土遺物 (Fig. 53～70 PL. 27～30) 溝からは弥生時代中期末から後期の土器が大量に出土した。特に上段溝の中位付近で出土した弥生時代中期末から後期にかけての土器群は完形に接合復元できるもののが多いため、溝外からの流れ込みではなく、溝内へ人為的に投棄されたものとみられる。

1～7 は溝の上位から出土した遺物で、遺構面からの深さ 80 cm までの層に含まれる遺物を抽出しており、古墳時代の遺物が主である。1 は須恵器甕。外面は胴部は平行タタキと横方向カキ目、底部は平行タタキで仕上げる。内面には同心円の当て具痕が残る。2～4 は須恵器壺。2 は焼成時の歪みが大きいが、全体に扁平な形状とみられ、口縁部は段を作る。3 はやや浅めのつくりで、口縁部を内湾気味につくる。外面天井部のみ回転ヘラケズリ。4 は坏身で、受け部の立ち上がりは内径気味に太く直立する。体部は浅めに作られ、外面底部のみ回転ヘラケズリ、他は回転横ナデで仕上げる。5 は土師器高杯の脚部で、断面形で直線的に開き、脚部中央に円形の穿孔が 3ヶ所開けられる。6 は上層から出土した古墳時代前期の甕。口縁部は外反しながら開き、胴部は長胴に近い形になるとみられる。内面にハケ目を施している他は摩耗が進み、調整不明。7 は瓶で、山陰系の様相を示す。胴部は直立し、把手は胴部両側に環状に貼り付けられる。内外面とも縱方向の細かいハケ目で調整される。

8～10 は溝内から出土した瓦で、溝の最上層で中世の遺物に混じつて出土したものである。8 は丸瓦で、復元径は 16 cm 程度で、上面には繩目タタキ痕、下面には布目痕が残る。焼成は良好で、灰黄色を呈する。9 は丸瓦の破片で、薄手である。上面は平行タタキ目、下面には布目痕と竹状の模骨痕とみられる凹線が残る。焼成は軟質で、橙色を呈する。10 は平瓦の破片で、ごくわずかに湾曲する。上面には布目痕、下面には平行タタキ目が残る。これも焼成はやや軟質で、色調は橙色を呈する。

11～22 は溝中位の土器裾部の堆積層から出土した、比較的大型の土器。11 は弥生後期中頃の大型甕で、口径 27.0 cm、胴部最大径 41.4 cm を計る。口縁部は直線的に開き、端部は面取りして整える。頭部の屈曲部には外側から粘土を貼り付けて補強し、屈曲部直下と胴部最大径部直下に断面台形突帯を各 1 条貼り付ける。底部はレンズ状につくる。12 も同様の器形で、口縁は直線的に開き、端部がわずかに外反する。頭部下と胴部下位に太めの断面台形突帯を付ける。底部は角のとれた平底で、11 よりわずかに古い弥生後期前葉の様相を示す。13 は口縁が外反しながら短く開き、胴部は丸く膨らむ。胴部下半を欠くが、やや長胴気味になるとみられる。14 は口縁部が外反しながら長く伸びるもので、胴部は最大径がやや上位に付く長胴気味のものである。内外面全体に縱方向のハケ目が施される。15 は口径 54.0 cm の大型の甕。口縁部は直線的に開き、口縁端部は面取りをした上から鋭い線で刻目を施す。頭部屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。16 は口縁部が長く開き、屈曲部に

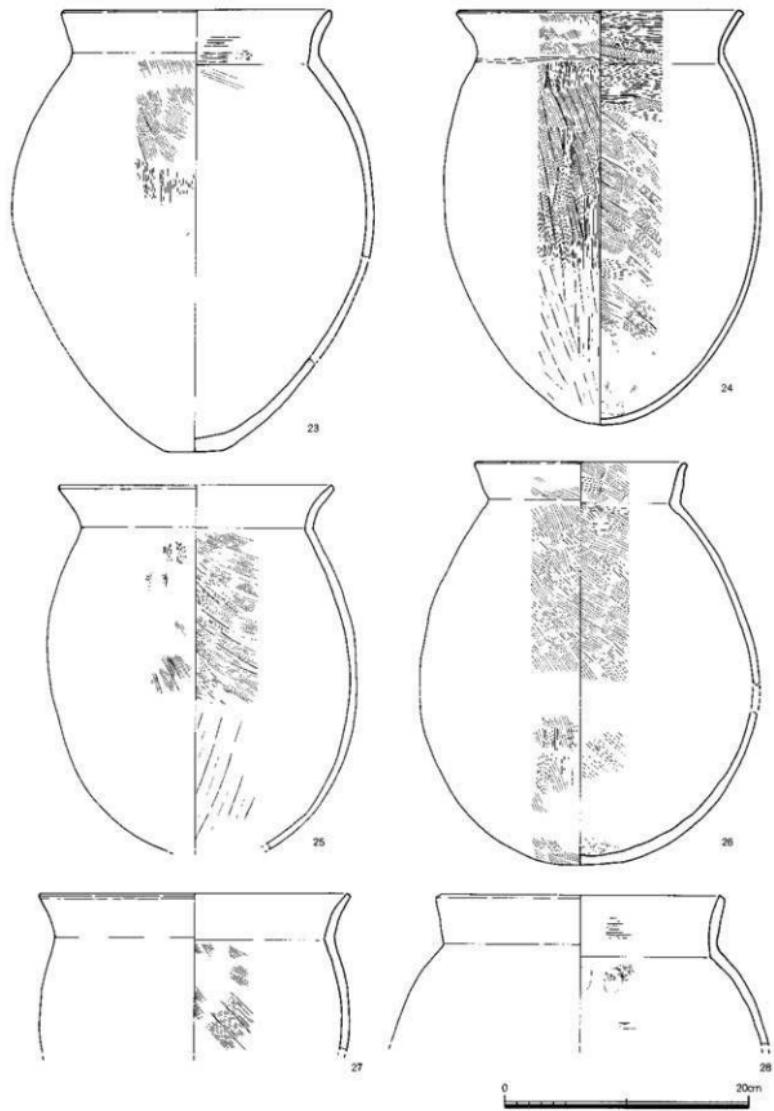


Fig. 57 SD-001 出土遺物実測図 5 (1/4)

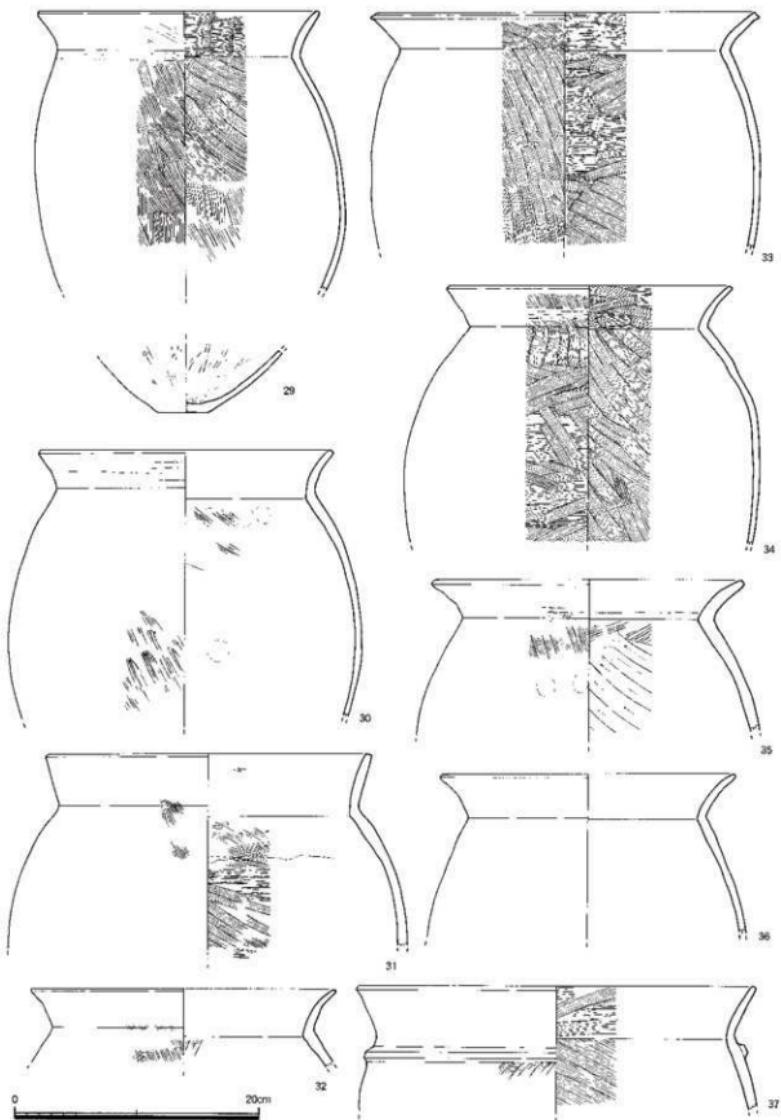


Fig. 58 SD-001 出土遺物実測図 6 (1/4)

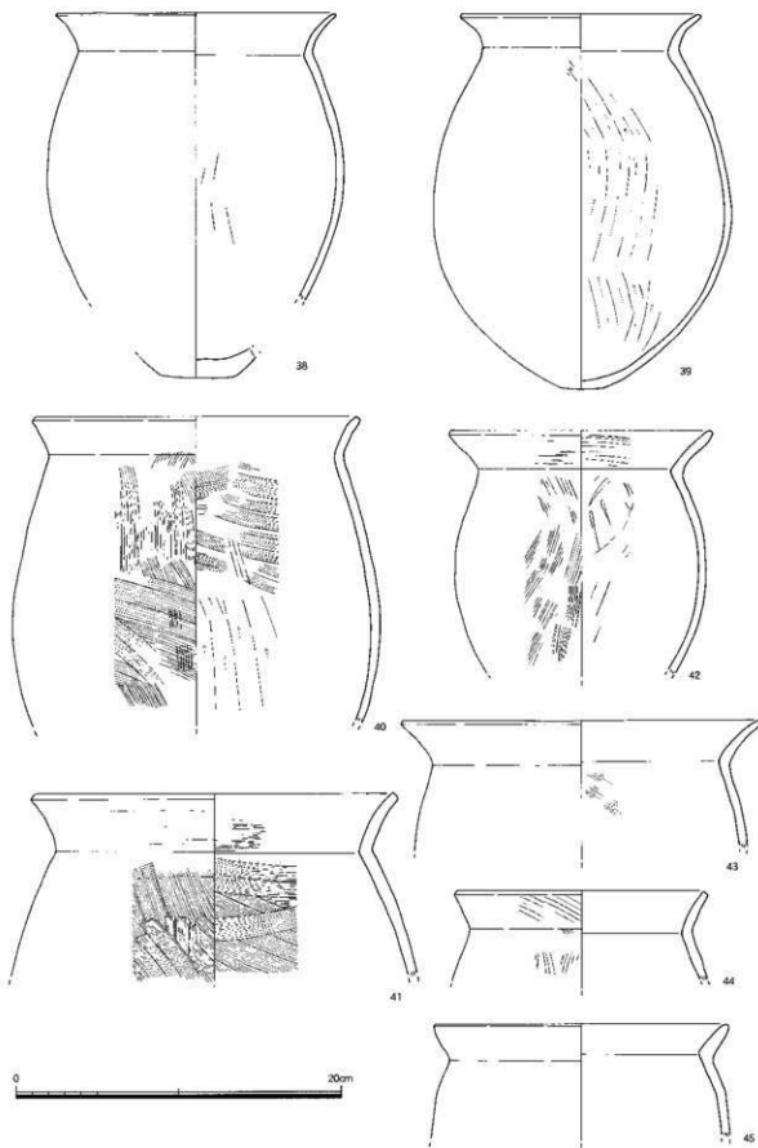


Fig. 59 SD-001 出土遺物実測図 7 (1/3)

断面三角形突帯を貼付する。内外面とも風化が進み、器面調整は不明。17は胴部最大径39.0cmで、球形の胴部をもつもので、底部は丸底を呈し、弥生後期後葉の様相を示す。口縁は外反して開き、屈曲部直下に断面台形突帯を付ける。外面は縦方向ハケ目、内面は斜め上方向のケズリで器面調整を行う。

18は土器溜の西側部分で出土した、口径58.5cm、器高78.0cm、胴部最大径61.2cmを計る大型の甕。口縁部はわずかに外反して開き、口縁端部は面取りした上から山形の刻目を施す。頸部屈曲部の直下に断面コ字突帯を貼り付け、突帯の上面に刻目を施す。胴部は肩が張る形状で、胴部下位に断面台形突帯を貼り付け、底部は角がとれた平底で弥生後期前葉の様相を示す。外面上半のハケ目の下に、整形時の平行タタキの痕跡がみられる。19は胴部がやや球形で、底部が丸底に近いレンズ状を呈する弥生後期中葉の甕である。口縁は長く外反し、頸部の屈曲は緩い。屈曲部直下に低い断面台形突帯を貼り付け、突帯上面にX字形の刻目を施すが、この際の工具痕が突帯下に付いている。20は紡錘形の胴部で、口縁がわずかに外反して開き、頸部屈曲部に断面台形の突帯を貼付する。突帯上面に指圧による刻目を施している。内外面とも摩滅しているが、縦方向ハケ目が施されていたとみられる。底部は角がとれた平底で、弥生後期前葉のものであろう。21は胴部に比して口径が広く、口縁は外反して開く。頸部屈曲部直下の突帯上面には指圧による大きめの刻目を施す。胴部は肩が張る形状とみられる。22は、口縁端部が外側に強く開き、屈曲部直下に断面コ字突帯を貼付し、突帯上面に細かい刻目をつける。胴部は紡錘形で、溝下部に断面台形突帯を貼り付け、上面にX字形の刻目を施す。底部はレンズ状に近い平底を呈し、弥生後期前葉から中葉にかけての時期であろう。

23～45は溝中位の土器溜状の堆積層から出土した甕形土器。23は口縁は直立気味に緩く外反し、端部は丸める。胴部は紡錘形で、底部はレンズ状に近い平底を呈し、弥生後期前葉から中葉にかけての時期である。24は口縁が直線的に開き、端部は面取りされる。頸部の屈曲は緩く、胴部は長胴で、底部は丸底である。25は口縁が外反し、頸部が緩く屈曲し、胴部は梢円球形を呈する。底部を欠くが、おそらく丸底であろう。外面は縦方向のケズリ、内面は上半部が斜め方向ハケ目、下半部が縦方向ケズリ。26は口縁が直立し、胴部はなで肩の下膨れ形とみられるが、胴部はさらに長胴になる可能性がある。底部は丸底を呈する。27は甕上半部のみの破片で、口縁が大きく開き、頸部の屈曲は弱く、胴部は張らない。胴部が長胴になるとみられる。28は口縁が直立し、頸部の屈曲は弱い。内外面とも摩滅しており、全体の形状も明らかではない。

29は胴部以上と底部が直接接合しないが、胎土から同一個体とみなした。口縁部は軽く外反し、端部は面取りして整える。頸部は緩く屈曲し、胴部は長胴で、底部は角のとれた平底である。30は口縁がやや大きく開き、胴部は上半部が球形を呈する。胴部下半部を欠いており、胴部全体の形状は不明。31は口縁が直立気味に開き、体部は肩が張らずなどだらかに張る。外面は摩耗が激しく、縦方向のハケ目が微かに見えるだけである。32は口縁が外反して大きく開き、頸部の屈曲も強い。内外面ともに摩耗が著しく、外面にハケ目がわずかに残る。33は口縁が直線的に開き、頸部の屈曲は明瞭である。胴部は肩が張らず、長胴になるとみられる。外面に縦方向ハケ目、内面に横方向ハケ目が残る。34は口縁が外反して短く開き、体部は胴が張る形状である。長胴か球胴かの判断は難しい。外面は上部に縦方向ハケ目を施すが、中位には横方向のハケ目を施す。35は器壁が厚く、口縁部は外反しながら開き、胴部の張りはやや強い。外面は細かい縦ハケ、内面はケズリで整える。36は胴部が長胴で肩が張らない形状のもので、口縁は長く開き、頸部の屈曲は明瞭である。内外面とも摩耗が著しく、器面調整は不明である。37は口縁下に台形突帯が貼り付けられるもの。口縁は直線的にひらくが、開き方は弱い。口縁の屈曲は緩く、胴部の張りも弱く、胴部形態は長胴と考えられる。

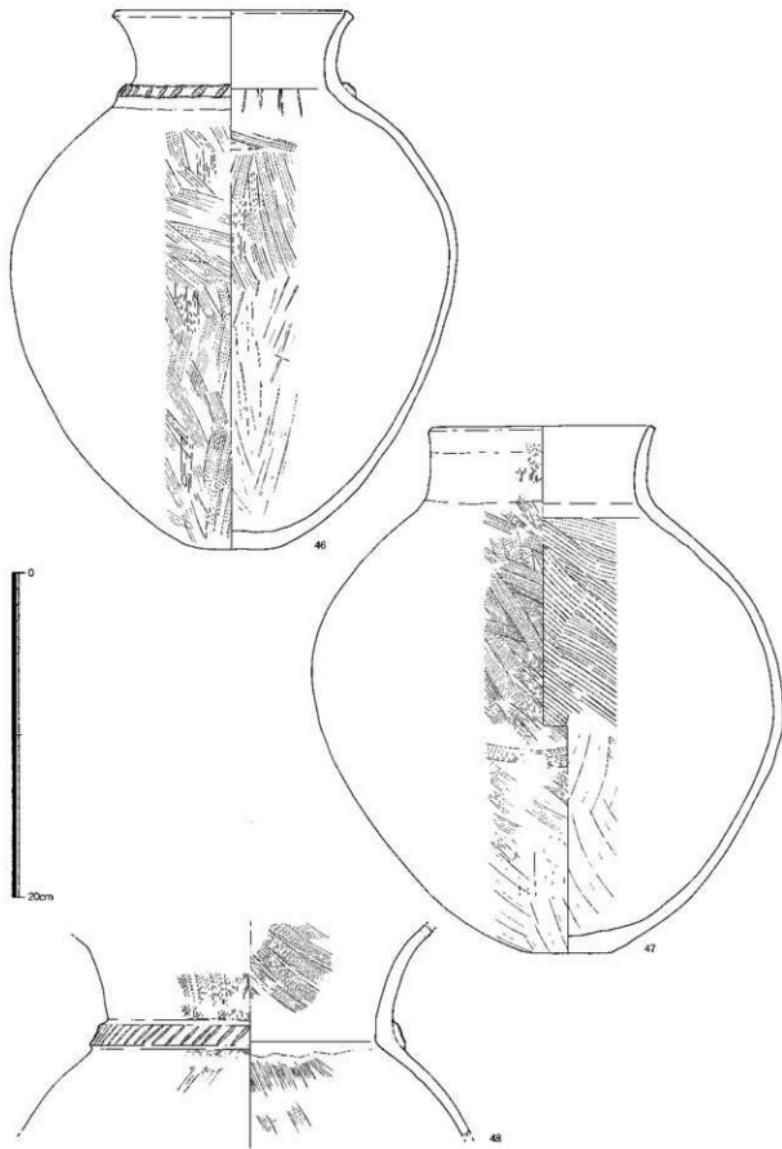


Fig. 60 SD-001 出土遺物実測図 8 (1/3)

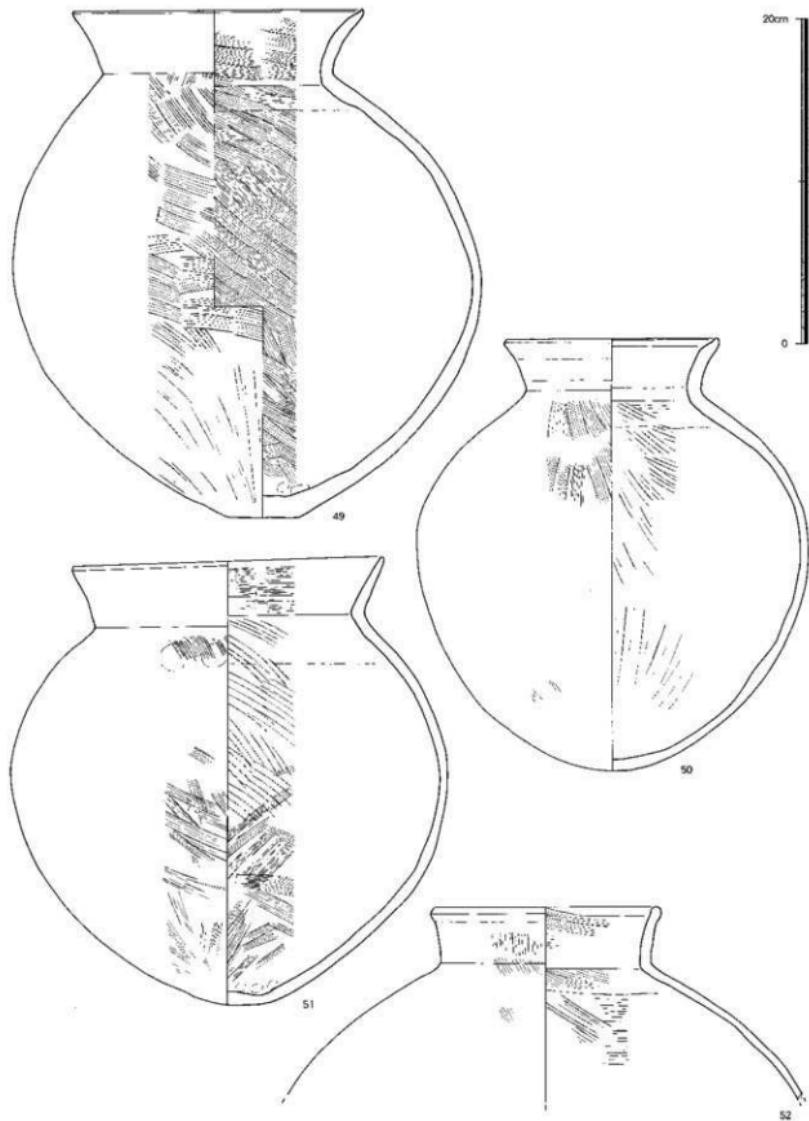


Fig. 61 SD-001 出土遺物実測図 9 (1/3)

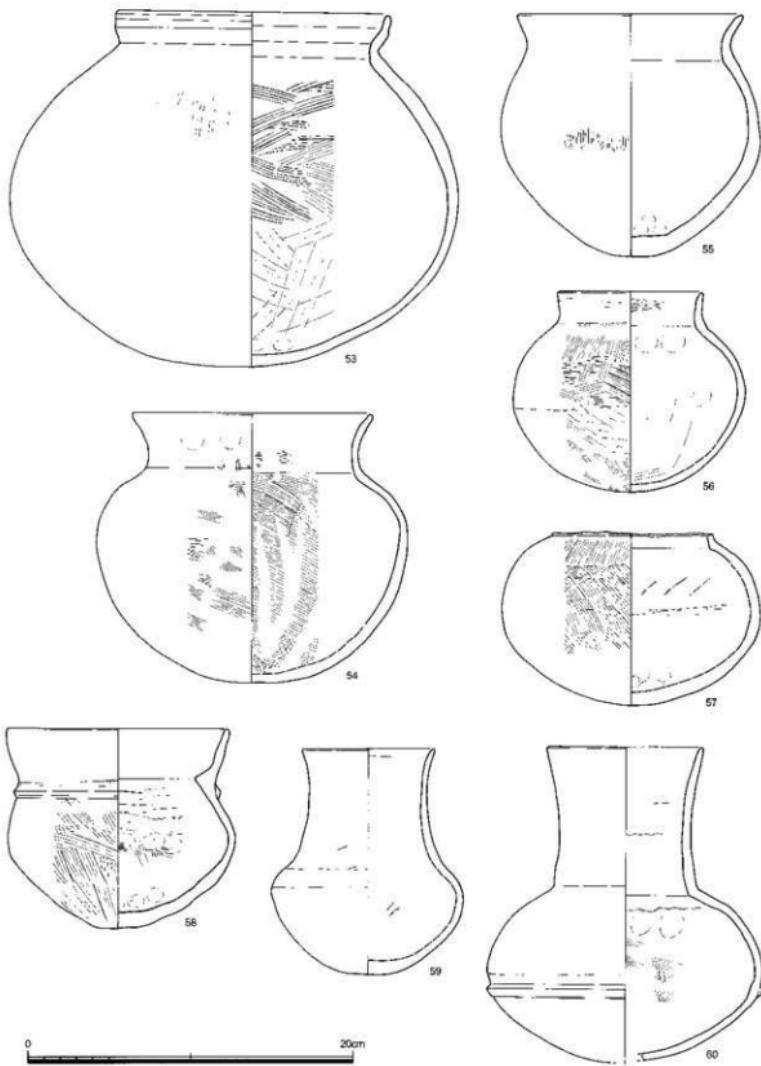


Fig. 62 SD-001 出土遺物実測図 10 (1/3)

38～45は、口径20cm程度以下の、比較的小型の甕である。38は胴部と口縁部が直接接合しないが、胎土観察より同一個体とみなした。器壁は薄く、口縁部は外反して強く開き、胴部は紡錘形になり胴部中位が張る。底部はレンズ状を呈する。胎土がピンク色に変色しており、二次被熱を受けたことがうかがえる。39は口縁が大きく外反し、頭部は緩く外湾し、胴部は中位よりもやや下で最大径となる。底部は丸底に近いレンズ形を呈する。外面は摩耗が進むが、縦方向ハケ目があったとみられ、内面は縦方向のケズリで整える。40は口縁が短く開き、頭部の屈曲は緩く、胴部は肩が張らず長胴形になるとみられる。外面調整は胴部中位以下は横方向ハケ目、胴部上位は縦方向ハケ目、内面調整は胴部中位以下は縦方向ケズリ、胴部上位は横方向ハケ目と内外面で対照的である。この40は87と同一個体として台付甕である可能性がある。41は口縁が外反し、頭部の屈曲は明瞭で、胴部は肩の張りがなく、なで肩形である。42は口縁が胴部に比べて大きく開き、胴部は紡錘形を呈する。43も口縁が大きく開き、胴部は頭部に比べほとんど開かない。外面は摩耗が進み、内面もハケ目が一部残るだけで器面の大部分は摩耗し剥落している。44は口径15.6cmのごく小型の甕で、外面にわずかに丹塗り痕が残り、祭祀用として作られて使われた可能性もある。45は口縁が短く太くつくられ、端部は丸く整えられる。胴部には細かい凹凸があり、手捏ねのような作りである。内外面とも摩滅が進み、器面調整は不明だが、全面ナデ調整だった可能性がある。

46～48は壺形土器のうち、弥生時代後期後半に属するもの。46は口縁部が外湾しながら開き、端部は上方に跳ね上がる。頭部と胴部の境界に断面台形突帯を貼り付け、上面に刻目を施す。胴部は卵形で肩がやや張り、底部は角のとれたレンズ状を呈する。外面はハケ目、内面は下半部が縦方向のケズリ、上半部は縦方向のハケ目で整える。47は頭部から口縁部にかけて直立し、頭部の屈曲は明瞭ではない。胴部は卵形で肩が張る。底部は角のとれた平底を呈する。外面はハケ目で、下部のハケ目はナデ消されている。内面下部は縦方向ケズリ、上部は粗いハケ目で器面調整を行う。48は二重口縁甕の頭部付近の破片とみられる。頭部と胴部の境界には刻目をもつ帶状の突帯が貼り付けられる。外面全体と頭部内面に丹塗り痕跡が残る。

49～52は古墳時代初頭から前半の壺形土器である。49は口縁部が外反し、頭部の屈曲は明瞭で、体部は球形に膨らむ。底部は丸底で、一部平坦な部分があるものの、この部分で土器を立てると傾いてしまうため、意図して作られた底部かどうかは不明。50は口縁が厚く外反し、頭部の屈曲は緩く、明瞭ではない。体部は球形に膨らみ、底部は丸底を呈する。外面は縦方向ハケ目、内面は下半部が縦方向ケズリ、上半部は斜め方向の粗いハケ目で調整する。51は口縁部が短く直線的に開き、体部は球形で底部は丸底を呈する。外面と内面下半部には細かいハケ目、内面上半部には粗いハケ目が残る。52は短頭甕で口縁が短く直立し、胴部は大きく球形に膨らむ。外面は縦方向ハケ目、内面は横方向のハケ目が残る。

53～57は短頭甕。53は口縁が二重口縁状に内湾しながら短く立ち上がり、胴部は横に大きく開き扁平気味になる。外面は摩耗しているが、内面底部付近はケズリ、上部は粗いハケ目で調整したことが分かる。54は口縁部は外湾して開き、胴部は球形を呈する。外面には細かいハケ目、内面はハケ目後部分にナデ消しを施す。55は口縁部が短く外反し、胴部は中位が張る。外面には煤が付着しており、甕として煮炊に使用されたことも考えられる。内外面とも摩滅が進む。56は口縁が直立し、胴部は球形を呈する。外面は下半部は斜め方向から横方向のハケ目、上半部は縦方向ハケ目を施し、内面はナデで仕上げる。57は口縁部を丁寧に打ち欠いており、胴部のみ完全に遺存する。外面は底部付近がナデ、胴部中位は斜め方向ハケ目、頭部付近は縦方向ハケ目を施す。

58は丸底甕で、上下2破片に分かれており、図上で復元している。口縁部は外側に直線的に開く。

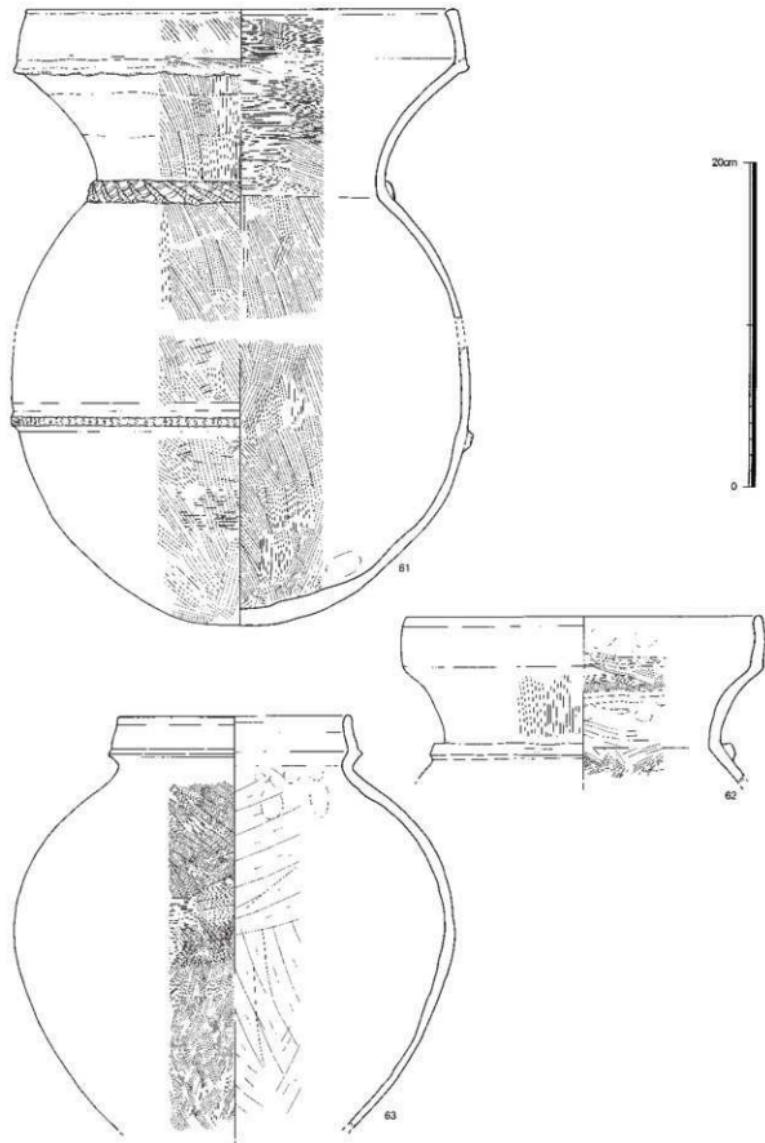


Fig. 63 SD-001 出土遺物実測図 11 (1/3)

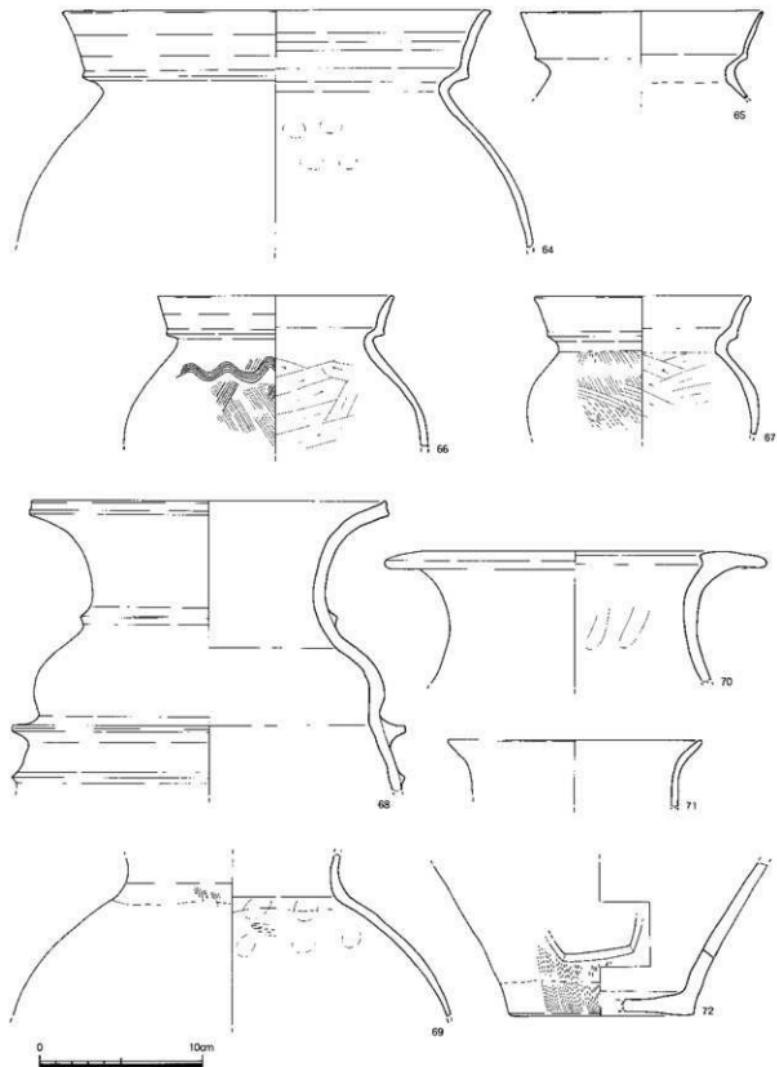


Fig. 64 SD-001 出土遺物実測図 12 (1/3)

頸部は内側に突出して屈曲し、胴部は算盤玉形に近い形である。

59・60は長頸壺。59は頸部が全体に緩く外湾し、頸部と胴部の境界の屈曲ははっきりしない。胴部は肩が張る。内外面とも摩滅が著しいが、全体にナデ仕上げの可能性もある。60は頸部が外側にわずかに開き、胴部は扁平な球形で胴部中位の最大径付近に断面コ字突帯を1条貼り付ける。内外面ともナデ仕上げとみられるが摩耗も進む。

61～67は二重口縁壺。61は口縁が内傾し、頸部は外側に大きく開く。胴部は球形で、頸部と胴部の境界に帯状の突帯を貼り付け、上面に斜格子状に刻目を施す。胴部中位のやや下方にも刻目を施した断面台形突帯を貼り付ける。内外面ともハケ目で調整しており、外面には丹塗りの痕跡が残る。62は口縁部～頸部のみの破片。口縁部はわずかに内湾しながら直立し、口縁部と頸部の境界の屈曲は緩い。頸部と胴部の境界に断面コ字突帯を貼り付ける。63は頸部が短く、口縁部は直線的に内傾する。胴部は倒卵形になるとみられ、最大径は胴部上位に位置する。外面は細かいハケ目、内面はケズリで器面調整する。

64は頸部が短く外湾し、口縁部はわずかに外湾して外側に開く。胴部は球形を呈していたとみられる。内外面とも摩滅が進む。65～67は二重口縁をもつ小型壺。65は薄手のつくりで、内外面とも摩耗が著しく、二次被熱を受けた可能性もある。66は胴部外面をハケ目で調整した後に波状文を肩部に廻す。口縁は外側に短く開き、頸部の外反は短く強い。67は口縁が外側に大きく開き、体部は球形を呈するとみられる。外面はハケ目、内面はケズリで調整する。

68は瓢形土器の上半部破片。口縁部は外反して大きく開き、頸部の屈曲は緩く、頸部に断面三角形突帯が貼り付けられる。

69は胴部が球形の短頸壺とみられる。胎土観察から71と同一個体の可能性が高いが、接合しない。内外面とも摩耗が進み、器面調整は不明。

70は鈴先状口縁をもつ壺の口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は上面が内傾し、外側に大きく突出する。頸部は緩く外湾する。内外面とも丹塗りを施す。71は壺の口縁部。直立し、端部が外反して開く。内外面とも摩耗が進む。

72是有窓甕形土器の底部付近破片。窓は幅6cm程度だろうか。底部は平底で、弥生中期後半から後期前半のものであろう。

73～82は高杯。構内から出土した高杯は完形に復元できたものが少なく、焼成が軟質で器面が摩耗した破片が多い。73は杯体部が外反し、杯底部はやや丸みをもつ。74は杯体部が外反しながら大きく開き、杯底部は浅く平らに作る。74と78は胎土と焼成からみて同一個体の可能性がある。75は杯体部が直線的に大きく開く。76は口縁が大きく開き、杯部全体は広く浅く作られたものとみられる。76と79は胎土、焼成から同一個体とみられる。77は杯部から脚部まで完形に復元できたが、全体の垂みが大きい。杯部は浅い鉢形で、杯体部は内湾する。脚部は端部が外側に屈曲して開く。焼成は軟質で内外面とも摩耗が著しい。78は脚部破片で、脚体部は長く、下部は大きく開く。外面はヘラミガキ、内面はハケで調整されており、二次被熱の痕跡が残る。79は脚部破片で、脚体部は直立し、下部は外側に開く。外面は摩耗が進み、調整は不明。

80～82は杯部が鉢形を呈するもの。80は杯部底部から脚部上部の破片で、杯底部が丸く、脚部はハの字に開く。内外面ともに摩耗が進む。81は脚部上部の破片で、脚部はやはりハの字に開く。外面に縱方向のハケ目が残る。82は杯部が半球形の塊状を呈する。杯部外面にハケ目が残り、内面はナデ調整、脚部外面はハケ目が残る。

83～88は台付鉢・台付壺。83は鉢部に高台状の台部がつく。鉢部は深めに作られ、内外面とも

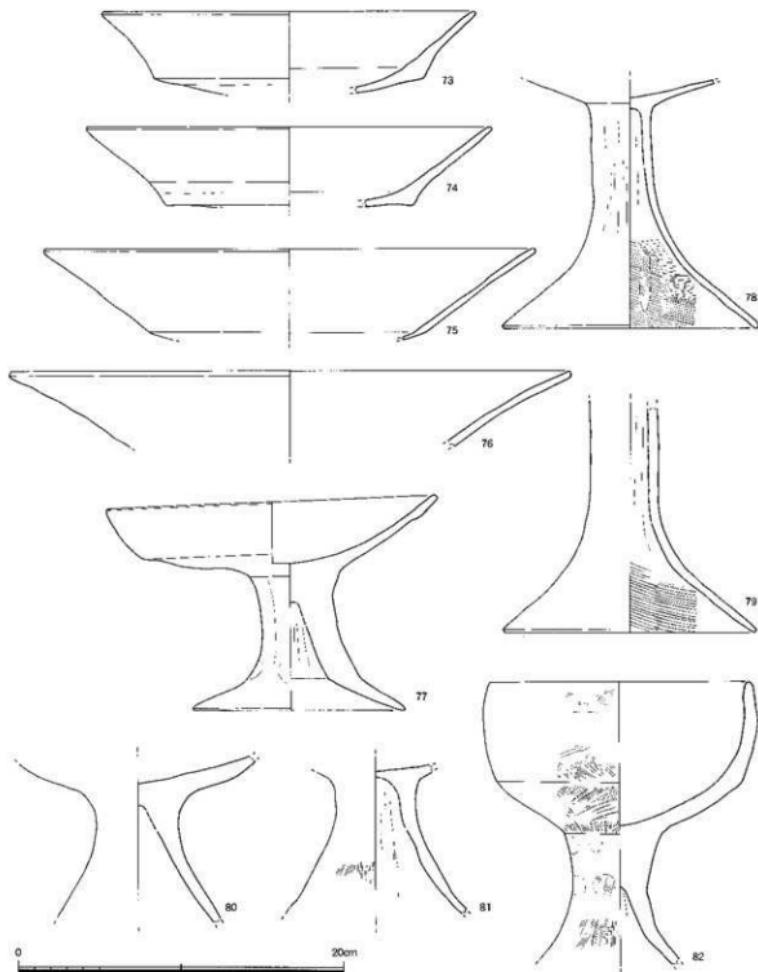


Fig. 65 SD-001 出土遺物実測図 13 (1/3)

目の粗いハケ目で整えられる。台部は直線的に八の字に開き、台部内側の天井部は指圧整形されている。84は球形の胴部を持つ壺に脚部がついたもので、壺部の口縁は頸部から屈曲して外側に開く。脚部は低く、八の字に開く。壺部底部は焼成後に穿孔されている。壺部の外面はハケ目、内面はケズリで調整され、脚部は内外面とも摩耗しており調整不明。85は小型の台付壺。口縁は短く直立し、穿孔が両側に2ヶ所ずつ計4ヶ所開けられており、懸垂用の紐を通すための穿孔とみられる。胴部

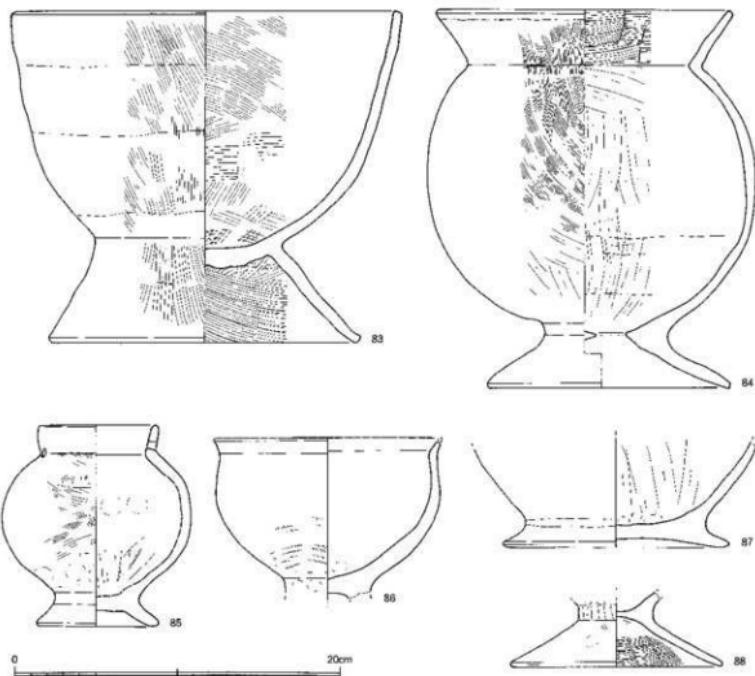


Fig. 66 SD-001 出土遺物実測図 14 (1/3)

は球形で台部は壺下部に輪状に貼り付けられ、八の字に短く開く。86は脚接合部が遺存する鉢部破片。壺部が鉢形の高壺の破片の可能性もある。口縁部は端部をわずかに欠くが、短く外反することが確認でき、体部は半球形を呈する。内外面とも摩滅が著しいが、外面に横方向のヘラミガキと見られる痕跡が残る。87は40と同一個体の可能性のある脚部破片で、台付壺の下部とみられる。脚部の形状は壺底部の端部から外側に低く短く張り出すもので、脚部内面には不定方向のハケ目が見られる。88は壺部内面が剥落し、原形をとどめていない。脚部は直線的に開き、脚部内面にはクモの巣状のハケ目がみられる。

89～91は器台。89は山陰系の鼓形器台。上部には突帯を貼り付けて高壺に似せた形態を作るが、実際には体部はほとんど屈曲していない。脚部は外側に開くが、上部よりも開き度合いが小さく、上部の形状が大きく目立つように作られている。外面はハケ目、内面はナデで器面調整を行う。90は鼓形器台の上部破片で、全体に薄手に作られ、口縁部は短く外反し、脚部との境界付近に突帯を貼り付けている。内外面とも摩耗が進む。91は脚部が開かず直立する形態で、上部は短く外反する型式のものとみられる。外面は縦方向ハケ目、内面は横方向のハケ目で調整する。

92～94は小型の壺・鉢。92は小型壺で、器高 18.0 cm、口径 11.0 cm を計る。口縁は軽く外反し、頸部の屈曲は明瞭で、胴部は長胴で張りが少なく、底部は角がとれた平底である。93は壺形の

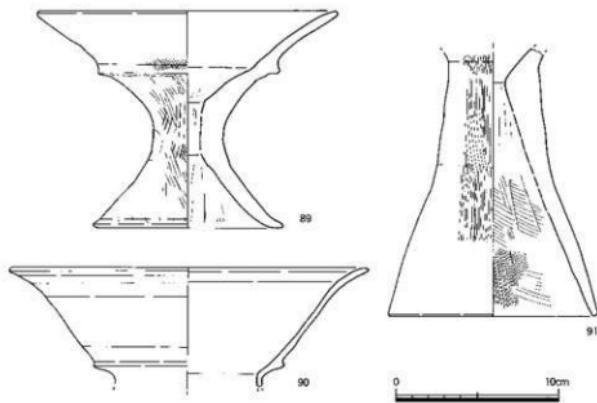


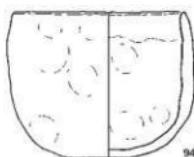
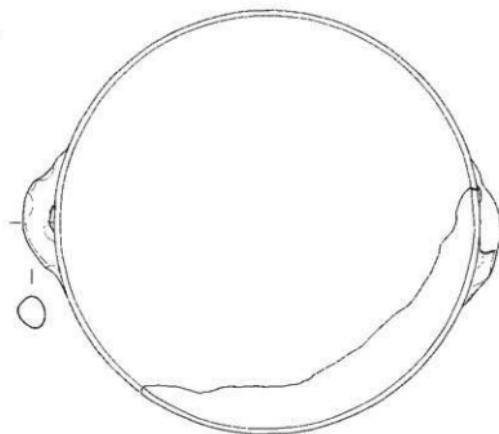
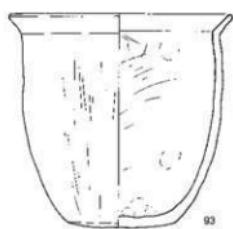
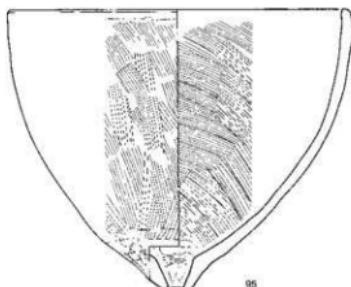
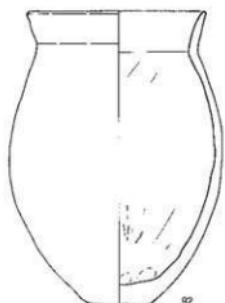
Fig. 67 SD-001 出土遺物実測図 15 (1/3)

95は鉢形の壺で、全体に逆円錐形に作られ、底部に小孔が開けられる。体部は丸みをもち、半球形に近い。底部の孔部分は体部から突出するように作られ、孔の直径は1.0cmである。内外面とも粗いハケ目で体部を作り、孔部分はナデで整形している。特徴的な形状から、壺以外の用途も考えられそうである。96は壺の上部とみられる。体部は直線的に広がり、全体では台形に近い円筒形を呈するとみられる。体部の上部に把手を2ヶ所貼り付けており、把手は手捏ねで輪状に作られ、横向きに付けられている。内外面とも二次被熱を受けており、摩耗も進んでいる。

97～102は溝の下段から出土した遺物。下段からの遺物出土量は上段の出土量に比べると極めて少ない。97は弥生中期後半の壺形土器。口縁端部を欠くが、鈍先状口縁を持ち、頭部はやや太めで、体部は胴部中位が張り出し、コ字突帯が2条貼り付けられる。底部は平底で厚みを持つ。内外面とも摩滅が進むが、丹塗りの痕跡が確認できる。98は壺形土器の肩部で、63と形態、法量が近似するが、胎土や焼成が異なり、別個体である。全体に摩耗が進んでいるが、内外面全面に丹塗りの痕跡が残る。99は鉢形土器。体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。底部は平底に作る。摩耗が進むが外面底部付近に縦方向のハケ目痕跡が残る。100は無頸壺で、口縁端部をわずかに欠く。口縁は短く外反し、胴部は横に張って若干扁平である。底部は平底を呈する。内外面とも摩耗が著しい。101は壺形土器の口縁部である。口縁は逆し字形で、やや太く短めである。口縁直下に断面三角形突帯が付く。細片で、流れ込みの可能性があるため、溝の掘削時期に伴うものかどうか判断できない。102は支脚。上面と下面の径はほぼ同じである。全体に指圧痕が多く残り、手捏ねで作られていることが分かる。

これらの遺物からみて、溝の掘削時期は溝下段で確認された遺物の時期である弥生時代中期後半～中期末の可能性が高いと見られる。一方、溝上段で出土した遺物、特に覆土中位の土器溜状の部分から出土した遺物は弥生時代後期中頃から古墳時代初頭までの時期を中心としたものであり、100年から200年の時期幅が考えられる。このことから、溝が掘削されてからかなりの期間、溝は徐々に埋まりつつ、溝としての機能を果たしていたものとみられる。溝が遺構面まで完全に埋まつた時期は溝の最上層で出土した遺物のうち、古墳時代後期の須恵器から示される時期とみられる。

鉢。口縁部は短く外反し、頭部は明瞭に屈曲する。胴部は円筒状に作り、底部はレンズ状につくる。器面調整は内外面とも、板状の工具でナデるようにケズリを施し、整えている。94は体部が口縁まで直立し、底部は体部から緩く丸め、平底を作る。内外面ともに指圧痕が多く残り、手捏ねで作成されたものとみられる。



0 10cm



Fig. 68 SD-001 出土遺物実測図 16 (1/3)

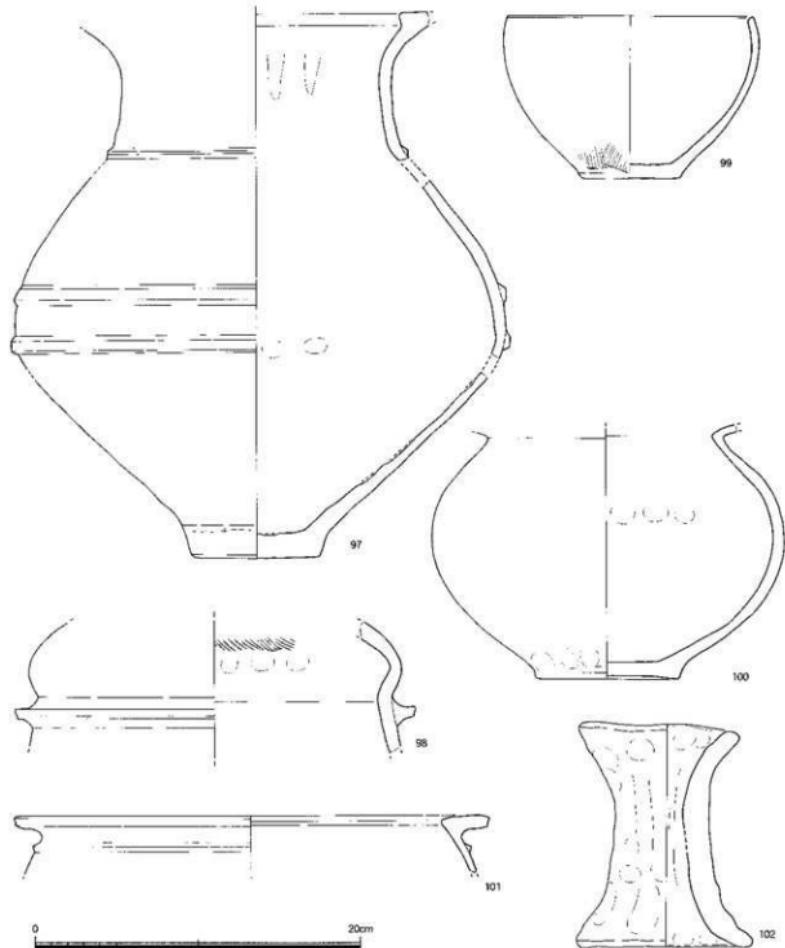


Fig. 69 SD-001 出土遺物実測図 17 (1/3)

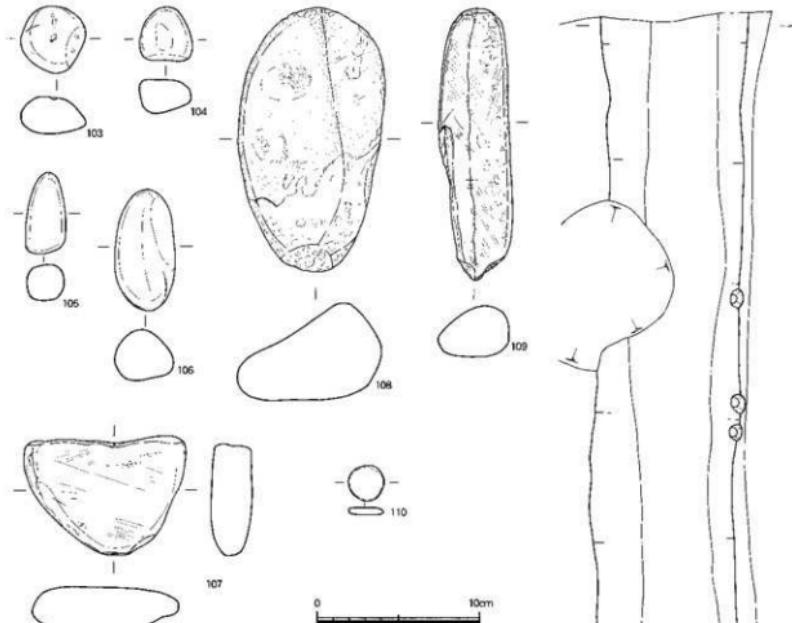
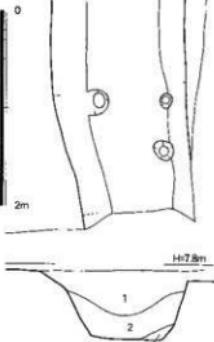


Fig. 70 SD-001 出土遺物実測図 18 (1/3・1/1)

ここで問題となるのが、大量に出土した弥生時代後期の土器に対する住居や建物などの遺構が今調査の他の調査区をはじめ周辺の調査からほとんど出土しないことである。この溝に投棄された土器は距離の離れた地区から持ち込まれたものだろうか。それともあるいは、周辺の住居が廃絶する際に、土器を残さず全てこの溝に投げ込んだとも言うのだろうか。わずかな土器片から弥生中期後半と時期比定している堅穴住居の中に、実は弥生時代後期まで下るものがあるのかもしれないが、確証はない。この弥生時代後期の大量的土器群については今後の検討課題である。

103～110はSD-001から出土した石製品。103～105は石弾で、溝最上層から出土した。全長は3.3～5.0cmと幅があり、重量も27.5g～42.5gで差がある。106は自然石を利用した石製品で、石弾や磨石とみられる。107は砥石を転用した石錐で、表面に擦痕が見られ、また側面に紐を掛ける回みが残る。108・109は蔽石で、端部に叩打痕が残る。110は墓石で、溝最上層で中世の遺物



1.SYK3/4 基赤色土 明褐色土粒、黒褐色土粒を若干含み、粘性高い。堅穴器・土器器を含む。
2.SYK3/5 黑褐色土 黑褐色土粒が多く含み、粘性高い。土器器小片を含む。今穴器。
3.SYK4/6 赤褐色土 黑褐色土ブロックを含む。粘性高く。やや粗い。

Fig. 71 SD-003 遺構実測図
(1/50)

と同時に出土した。径 2.2 cm。

SD-003 (Fig. 71 PL. 18)

調査区南側を東西に走る溝状遺構。調査区南端をほぼ調査区に沿った形で直線的に伸びる。遺構面での幅は 1.2~1.4 m、遺構面からの深さは 70~80 cm、底面幅は 60~80 cm で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦面を呈する。底面の標高は東端で 7.1 m、西端で 7.0 m で底面はほぼ水平で、水が流れた痕跡はない。

遺構覆土は、暗赤褐色土~赤褐色土で、各層は自然堆積の様相を示す。

出土遺物 出土遺物は土師器、須恵器の小片が多い。図示できるものはない。出土遺物からは古代の溝状遺構であることが推測される。

(2) 井戸

SE-002 (Fig. 72 PL. 18)

調査区南側で検出された井戸。遺構検出面では円形の井戸と

確認したが、掘り進めていくと、円形の井戸が 2 基重複したものであることが明らかになった。北側の 1 基は径 70 cm の円形の素掘りの井戸、南側は長さ 1.1 m、幅 1.0 m の梢円形の掘り方の素掘りの井戸とみられるが、前後関係は明らかにできていない。

壁面は下部から遺構面までほぼ直立する。遺構覆土は黒褐色土で粘性が大きい。

遺構面から 1.2 m まで掘り下げて遺構の状況を確認したが、この深さまで掘り下げたところで涌水が激しくなったため、安全上、この深さで掘削を中止した。

出土遺物 (Fig. 73・74) 出土遺物には土師器、須恵器・白磁破片がある。小片が多く、図示できるものは少ない。111 は白磁碗破片。口縁は玉縁状を呈し、体部は直線的に開く。内外面ともに灰白色の釉を施す。112 は陶器鉢の底部。外縁には平行タタキ目が残り、褐色の釉を施す。内面はナデ痕跡が残り、無釉。114 は滑石製石鍋の底部破片。復元底径は 18.0 cm で、底部には煤が付着する。

この他、土師器には古代や中世のものも含まれる。

出土遺物からみて、中世以降の井戸とみられる。

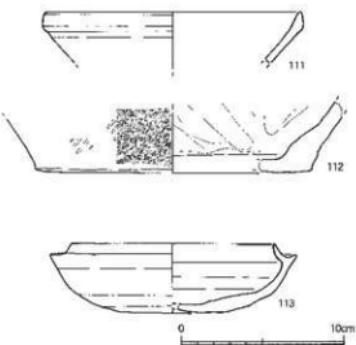


Fig. 73 1区出土遺物実測図 (1/3)

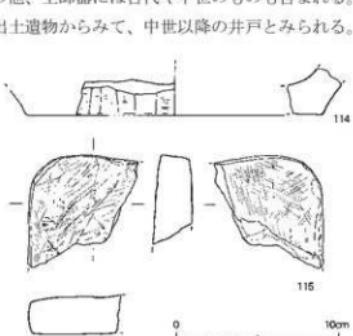


Fig. 74 SE-002・SD-004 出土石製品実測図 (1/3)

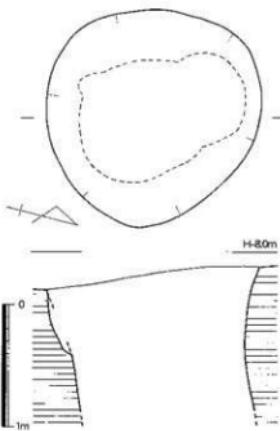


Fig. 72 SE-002 遺構実測図 (1/40)

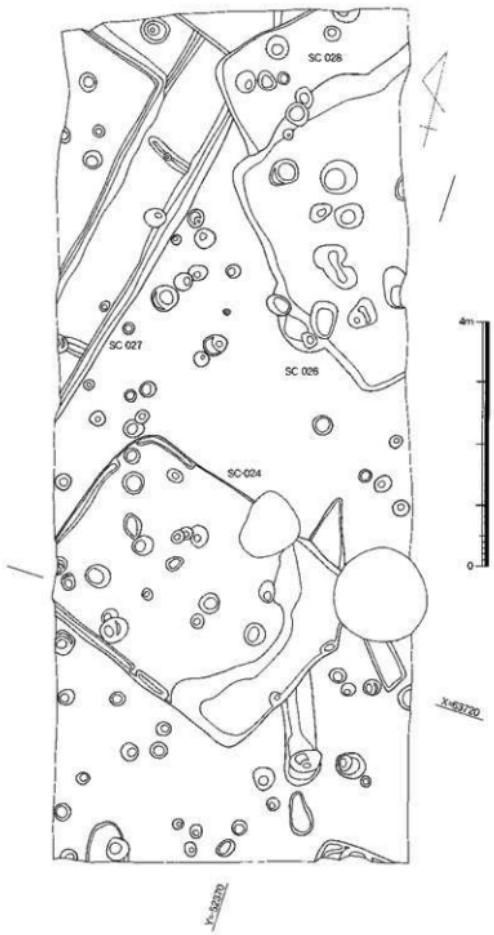


Fig. 75 第154次2区調査区全体図 (1/80)

この部分に貼り床が施されていた可能性もある。

出土遺物 (Fig. 79・80) 116は須恵器坏。受け部立ち上がりは内傾して短く立ち上がる。底部にヘラ記号が付けられる。外面底部は回転ヘラケズリ、外面体部と内面は回転横ナデ、内面は回転横ナデ後一定方向のナデで仕上げる。117は須恵器高环脚部。环部との接合部は径が大きく、脚部は直線的に開き、端部は屈曲して外反する。

130は磨製石斧。全長12.8cm、刃部長5.3cm、厚さ4.2cmで、刃部は使用によって若干丸みを帯

(3) その他の遺物 (Fig. 73・74)

113と115はSD-004からの出土。SD-004は古代～中世の轍跡と見られる浅い不整形の溝状遺構。113は須恵器坏で、立ち上がりが内傾し、体部は浅い。6世紀後半のものであろう。115は硯を転用した石製品。滑石製で青灰色を呈する。

3 2区の調査

(1) 堪穴住居

SC-024 (Fig. 76 PL. 19)

調査区南西側で検出した堪穴住居で、住居のほとんどの部分が調査範囲内で確認できたため、遺構の形状や規模がほぼ完全に把握出来ている。

住居は平面形が隅丸長方形で、全長4.6m、幅3.4～3.5m、遺構面から住居床面までの深さは4～7cmで、大きく削平されていることが想定できる。遺構覆土は暗赤褐色土で粘性が高く緻密で、遺構覆土に弥生土器の細片が多く含む。

住居の主柱穴は中軸上にある2つの深い柱穴とみられ、住居上屋は2本主柱で建てられていたと考えられる。この他にも住居内には多数の小型のピットがあるが、住居とは直接関係ないと考えられる。住居西側～南側の壁際には幅20cm、深さ3～5cmの壁溝が掘られている。壁溝はごく浅く、数ヶ所で途切れている。住居内では壁溝以外にはベッド状遺構や炉などの設備は確認できない。

住居全体に及ぶ張り床は見られないが、住居南東側に一段低い掘り込みがあり、

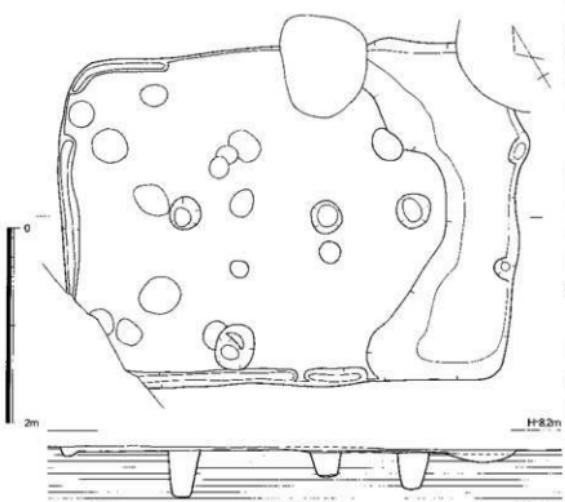


Fig. 76 SC-024 遺構実測図 (1/50)

同時期に建築されたものと考えられる。遺構面からの深さは 20~40 cm で、SC-024 よりも遺存状態が良好であるが、これは旧地形で SC-024 の地点よりも低かったことによるものであろう。遺構覆土は暗赤褐色土を主としている。覆土の堆積状況を観察すると、土層堆積線が不連続になっている箇所があり、遺構掘り下げ時に住居の切り合いを確認できていないことが分かり、未知の住居が調査区東外側にわたって重複している可能性が高い。

住居の主柱穴は建物主軸上の 2 基の大型の柱穴とみられる。主柱穴は直径 60 cm で、住居床面から 60~70 cm の深さまで掘られている。柱痕跡は土層でも確認できなかったが、20~30 cm の柱が建てられていたことが想定可能で、建物上屋は 2 本主柱で建てられていたことが確認できる。

住居床面には壁溝や炉などの施設は確認できない。また張り床も確認できない。

出土遺物 (Fig. 79) 遺構内からは土師器や須恵器の破片が出土している。118 は壺または甌の口縁部小破片。頸部は外湾し、口縁端部は丸く仕上げる。内外面とも摩耗が進み、調整は不明だが、内面にケズリの痕跡が残る。119 は須恵器坏蓋。体部は直立し、天井部は若干丸みを持つ。外面天井部は回転ヘラケズリ、体部外面と内面は回転横ナデ。120 は須恵器坏蓋で器高が低く、口縁部のみが直立する。天井部は回転ヘラケズリ、体部外面は回転横ナデで、内面は回転横ナデ後不定方向のナデ。121 は須恵器坏身で、受け部の立ち上がりは太く短い。体部は低く、底部にヘラ記号が付く。外面に自然釉がかかること。この他に弥生土器の小片が出土しているが、摩滅したものが多い。

SC-027 (Fig. 78 Pl. 20)

調査区北西側で検出した堅穴住居で、SC-028 よりも先行する。住居の大部分の範囲は調査区外に及び、住居の正確な規模は不明である。

調査区内で確認された住居北壁と東壁沿いには幅 20 cm、深さ 10 cm のしっかりした壁溝が掘られ、

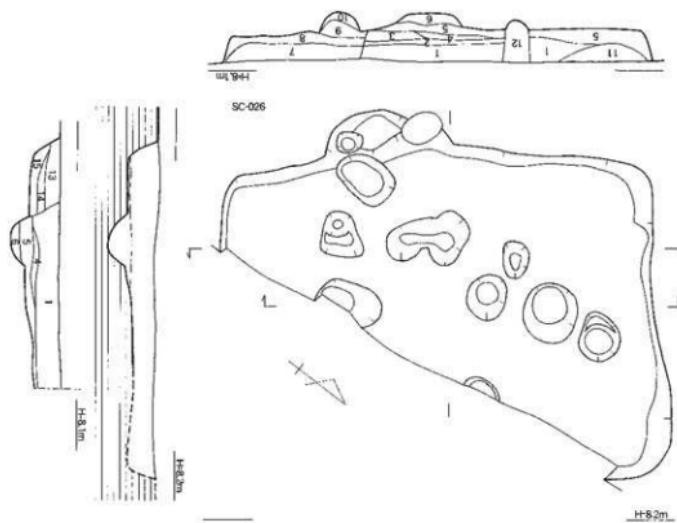
びている。基部は厚く、平坦面をなしている。花崗岩質で、表面の風化、剥落が著しく、二次被熱を受けた可能性もある。

この他、古墳時代の土師器破片で甌形土器の把手破片が出土しており、また弥生土器の摩滅した小片が多数出土する。

SC-026 (Fig. 77 Pl. 20)

調査区北東側で検出した堅穴住居で、住居の約半分が調査区外に及ぶが、住居の規模や形状は判断可能である。

住居の平面形は隅丸長方形で、全長 4.5 m、幅 3.3 m を測り、SC-024 と同形態で同規模であり、おそらく



- 1: SY05/2 増赤褐色土 明褐色土を小ブロックで含む。上部小片を多く含む。繊維。
 2: SYR3/3 増赤褐色土 白色粘土をブロックで含む。粘性高く、微細。
 3: SYR2/1 黑褐色土 白色粘土を小ブロックで含む。明褐色土をしみ状に含む。繊密で粘性高い。
 4: SYR3/6 明褐色土 柔らかく粘性あり。
 5: SYR2/2 増赤褐色土 白色粘土を小ブロックで含む。繊密。
 6: SYR4/4 増赤褐色土 黑褐色土をしみ状に含む。柔らかく粘性高い。
 7: SYR3/3 増赤褐色土 明褐色土を近似する。
 8: SYR5/6 增赤褐色土 黑褐色土をブロック状に多く含む。3層に近似する。
 9: SYR3/2 増赤褐色土 明褐色土を粒状に若干含む。繊維。
 10: SYR5/6 明赤褐色土 黑褐色土をブロックで含む。粘性高い。
 11: SYR3/2 増赤褐色土 粗砂を若干含む。中世の礫下げ土か。
 12: SYR3/2 増赤褐色土 粘性高い。中世のピットか。
 13: SYR3/1 黑褐色土 7層と対応する。黒色土をブロックで含み。繊維。
 14: SYR3/2 増赤褐色土 白色粘土をブロックで含む。粘性高い。
 15: SYR3/3 増赤褐色土 明褐色土を粒状に含む。黒褐色土を小ブロックで含む。粘性高い。

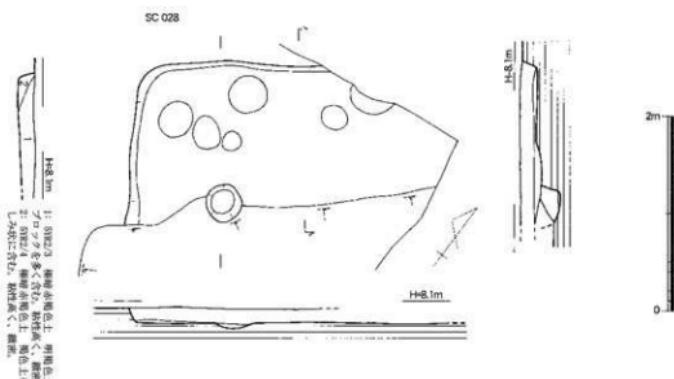


Fig. 77 SC-026・028 遺構実測図 (1/50)

その内側に幅80cmのベッド状造構が作られる。ベッド状造構は東側のベッドが北側のベッドよりも7cm高くなっている。両者の境界には区画溝として幅15cmの溝が掘られている。東側のベッドの上面には、さらに区画溝として2本の幅20cmの深い溝が掘られており、この溝を左右対照と仮定すると、住居の南北幅は8.0mと推定することが可能である。

住居床面はベッド状造構からさらに低く掘られており、造構面からの深さは50cmである。床面の周囲の際には幅15cmの壁溝状の溝が掘られており、排水等の機能を有していたとみられる。床面には厚さ10cmの張り床があり、その下から住居以前の大型の柱穴が確認されている。

造構覆土は極暗赤褐色土を主体とし、土層断面からは造構外からの土砂の流れ込みによる継続的な自然堆積の様相が看取できる。

検出できた床面の範囲が狭く、主柱穴は確認できない。また住居内にこの他の炉などの施設も未確認である。

出土遺物 (Fig. 79・80) 弥生土器、土師器がパンケース1箱分出土した。土師器は甕の胴部破片などが含まれ、摩滅は少ない。122は土師器壺で、口縁部から頸部にかけて緩く外反し、端部は丸く作る。外面は縱方向ハケ目、内面はケズリで仕上げる。123は小型甕。口縁は短く外反し、胴部は張りが少ない。内外面とも摩耗が進む。124はミニチュア土器の底部とみられる。手捏ねで台付鉢か甕の脚部を表現している。125は弥生中期末の甕の口縁部。内外面とも摩耗が進む。126は短頭壺の口縁部。口縁部は直立し、胴部は球状になるとみられる。胎土はきめ細かく、在地系とは異なる。

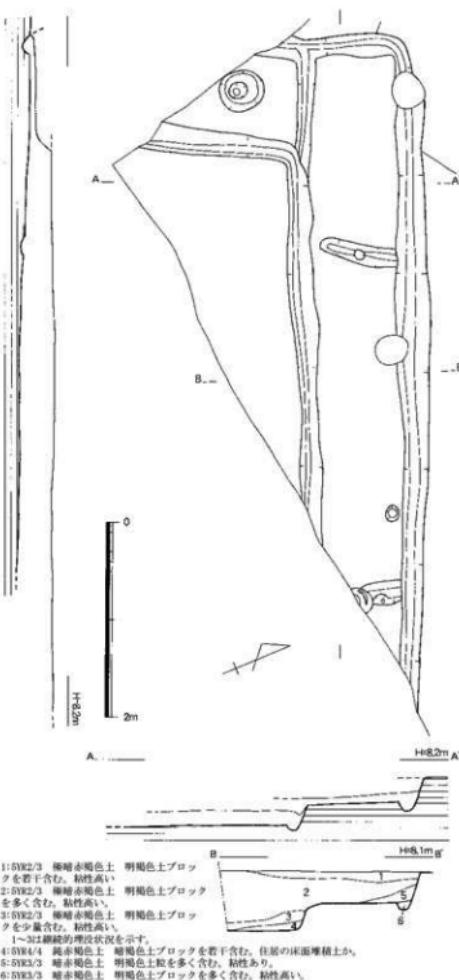


Fig. 78 SC-027 造構実測図 (1/50)

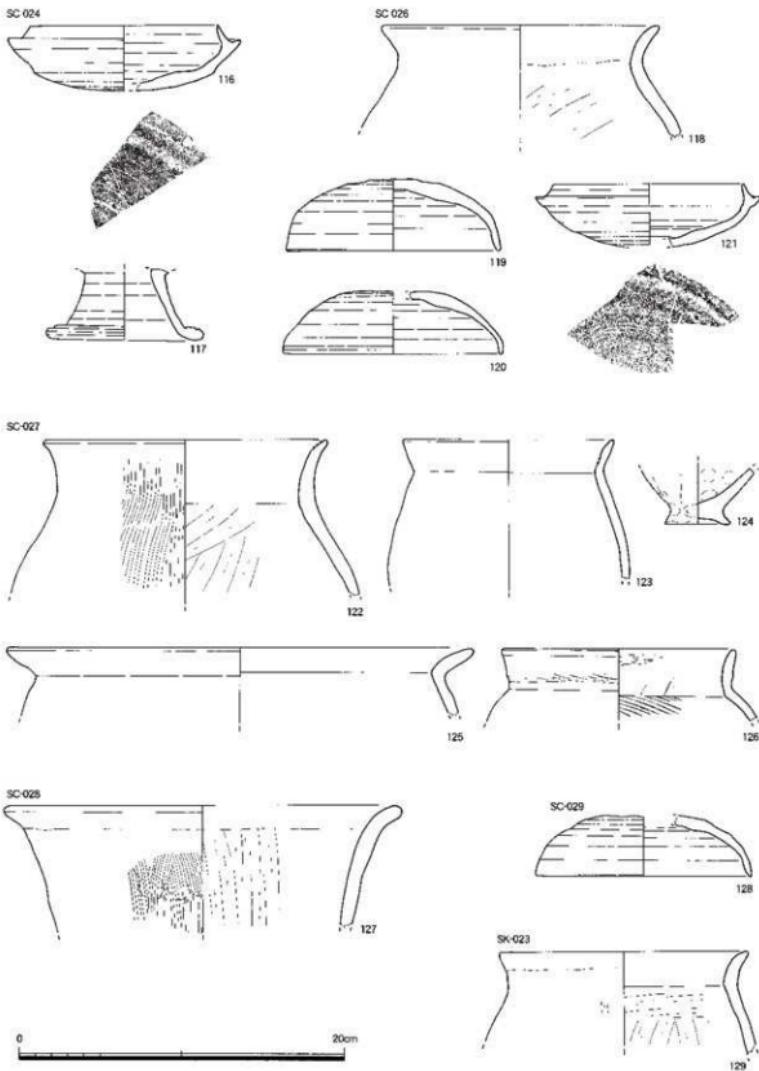


Fig. 79 2区出土遺物実測図 (1/3)

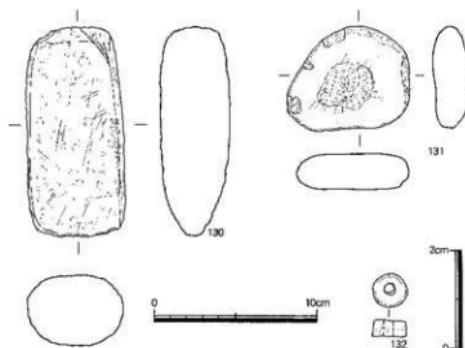


Fig. 80 2区出土石製品実測図 (1/3・1/1)

131は磨石。全長7.5cm、幅6.4cm、厚さ2.2cmの不整円板上で、周間に研磨痕と叩打痕が残り、上面中央部にも叩打痕が残る。

これらの遺物からみて、住居の時期は古墳時代中期とみられる。

SC-028 (Fig. 77 Pl. 20・21)

調査区北側で検出した竪穴住居で、SC-026に住居の大部分を切られ、また住居の北東側が調査区外に及ぶため、住居の規模等は明らかでない。SC-028として遺存する範囲は幅1.5m、長さ3.7mの範囲だけ

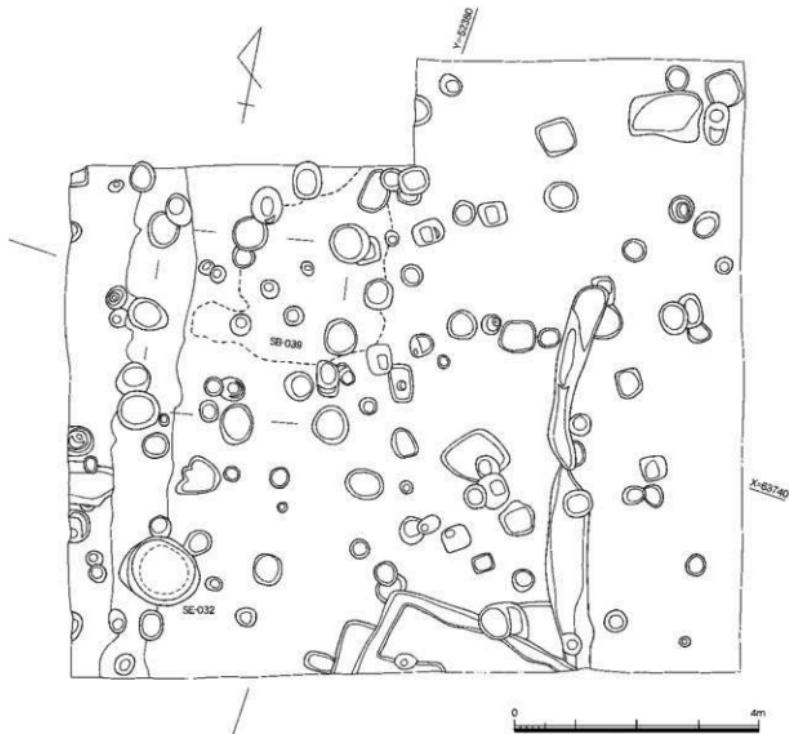


Fig. 81 第154次3区調査区全体図 (1/80)

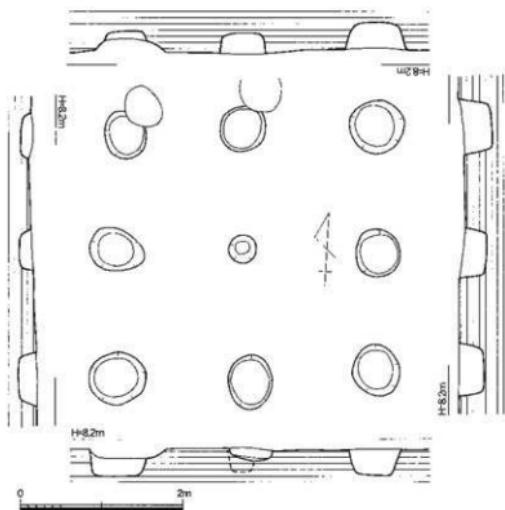


Fig. 82 SB-039 遺構実測図 (1/60)

SC-029

調査区北側で検出した堅穴住居で、SC-027よりも後出し、SC-028よりも先行する。遺構検出面で遺構上端ラインを確認したが、遺構壁面はSC-027と覆土が近似していたために確認できず、SC-027の外側にある住居床面を確認できたのみである。遺構床面は検出面から23cmの深さで、床面は平坦である。住居の形態や規模、壁溝などの施設の有無などは不明である。

出土遺物 (Fig. 79) 128は須恵器壺蓋。天井部から体部にかけて丸みをもち、器高は低めである。天井部は回転ヘラケズリ、体部外面と内面は回転横ナデで、表面に小さな焼け膨れが見られる。この他に土師器、弥生土器の破片がビニール小袋1袋分出土しているが、摩滅が著しい。

住居の時期はおそらく古墳時代後期（6世紀）と推定される。

SC-030

SC-028に大部分重複して確認された堅穴住居で、確認できた要素はSC-028床面で検出された壁溝と、SC-028の北側でわずかに検出された上端のみである。SC-030として掘削した部分はほとんどなく、住居の概要も一切不明である。

出土遺物 土師器の小片が1点出土している。器形や時期は不明である。

(2) その他の遺物 (Fig. 79・80)

129はSC-024を切っている浅い皿状の搅乱SK-023から出土した土師器甕破片。内外面とも摩耗が進む。胎土は極めて粗い。132はSP-203から出土した滑石製白玉。151次SD-003から出土した白玉に石材、法量が近似する。このビットの覆土は全て洗浄したが、出土したのはこの1点だけである。

である。

遺構面からの深さは15cm程度で、床面は平坦だが、床面上で別の堅穴住居（SC-030）の壁溝とみられる幅30cmの浅い溝状遺構を検出している。SC-028とともに主柱穴はSC-024やSC-026の主柱穴の配置を参考に、径40cmで床面からの深さ20cmのビットを主柱穴と認定した。対応する東側の主柱穴は調査区外に位置する。

出土遺物 (Fig. 79) 127は瓶の口縁部とみられる。口縁端部は外反し、胴部は直線的に開く。外面は縦方向ハケ目、内面は縦方向のケズリ。

出土遺物には、このほかに奈良時代まで時期が下りそうな小破片も若干含まれる。

4 3区の調査

(1) 挖立柱建物

SB-039 (Fig. 82 PL. 22)

調査区北西側で検出した掘立柱建物。建物の規模は 2×2 間の総柱建物で、柱間で南北幅3.0m、東西幅3.2mのほぼ正方形の平面形をした建物が想定できる。建物の主軸はほぼ南北方向に向く。建物西侧の柱穴列は南北方向の溝状の擾乱によって上面が削られているが、柱穴の床面は遺存しており、柱穴の位置と規模は確定できる。

柱穴は計9基あり、柱穴の規模は径50~70cm、遺構面からの深さは15~30cmで、遺存する深さが浅いことから、建物建築時以降に相当の削平を受けていることが考えられる。柱穴の平面形は円形で、中央の1基だけが径35cmで他の柱穴よりも径が小さい。

柱痕跡は確認できていないが、柱間は東西方向に北側から1.5~1.6m、1.6~1.7m、1.6~1.6mでほぼ揃っている。南北方向は東側から1.6~1.4m、1.5~1.5m、1.6~1.6mで、ほぼ揃つており、南北、東西方向とも非常に整った柱間隔とみられる。

出土遺物 柱穴内からは弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土しているが、いずれも小片で、摩滅が著しい。須恵器は古墳時代に属する型式とみられる。

(2) 井戸

SE-032 (Fig. 83 PL. 22)

調査区南西側で検出した井戸。検出面での平面形は楕円形で、長さ1.25m、幅1.05mを計る。井戸下部は円形の素掘りで、土層観察でも井戸枠などが設置されていた痕跡は確認されていない。下部の直径は0.8mで、以降検出面から2.5mまで掘り下げ

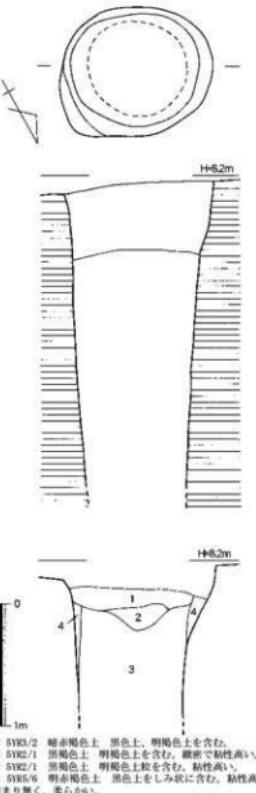


Fig. 83 SE-032 遺構実測図 (1/40)

掘していない。

遺構面から深さ60cmまでは遺構壁面の一部が滑落したような形状を示し、土層断面でも同様の状況を示しており、この範囲は断面形が漏斗状を呈する。それ以下の深さでは井戸掘り方に崩落の痕跡はなく、遺構掘削時の状況を残しているとみられる。

遺構覆土は上層で暗赤褐色土、黒褐色土が堆積し、自然堆積の様相を呈する。井戸下層も自然堆積の様相を示し、上層の井戸壁際で地山土が滑落したような痕跡がみられる。覆土全体を見ると、人為的に土砂を投入して埋め戻した堆積状況ではない。

出土遺物 (Fig. 84~86) 井戸覆土内からは総量でパンケース4箱分の土器が出土した。特に井戸下層から最下部にかけて多数の土器が出土し、使用時に落下したものや井戸廃絶時に投棄されたものなどが堆積していたと推定される。

Fig. 84は井戸の覆土下層以上で出土した遺物。133・134は蓋形土器。133は全体に凹凸が多く、

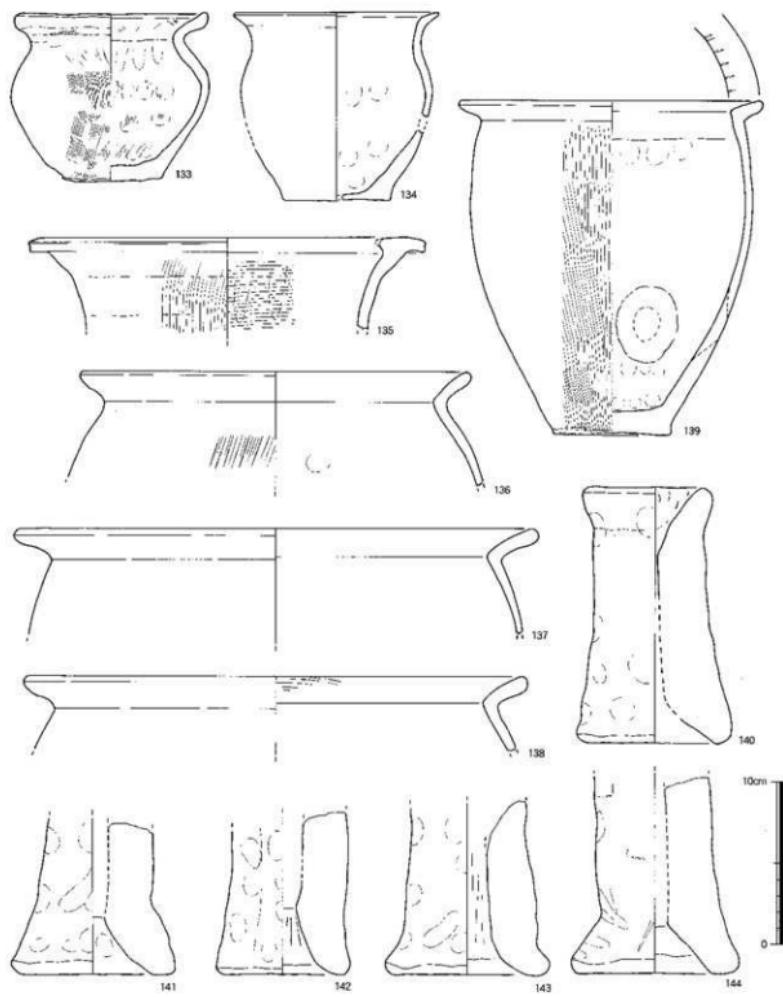


Fig. 84 SE-032 出土遺物実測図 1 (1/3)

粗雑な作りである。134は器壁が薄く、整った形で、胴部は肩が若干張る。内外面とも摩滅が進み、内面に指オサエ痕が残るのみである。135は壺形土器の口縁部破片。鋤先状口縁を持ち、口縁上面は平坦面を作る。外面は縦方向ハケ目、内面は横方向ハケ目で調整しており、外面へ口縁上面は丹塗りが施されている。

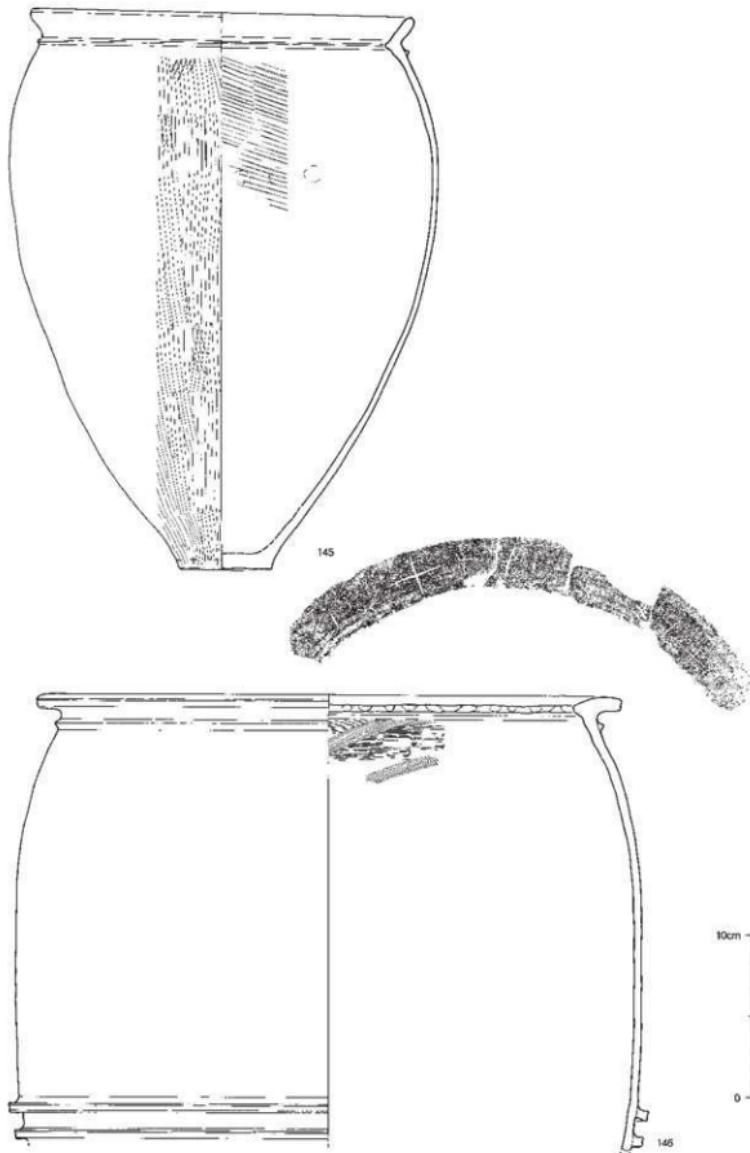


Fig. 85 SE-032 出土遺物実測図 2 (1/3)

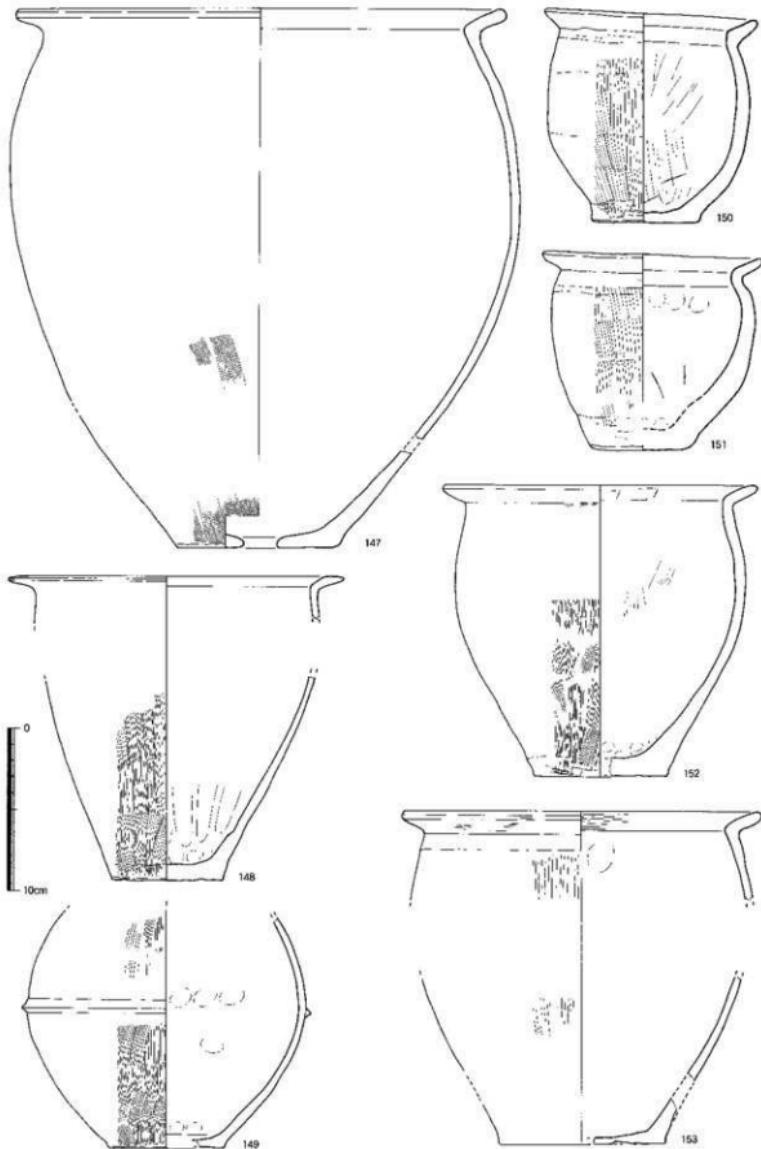


Fig. 86 SE-032 出土遺物実測図 3 (1/3)

136～138は甕の口縁部。136は胴部が頸部から丸く膨らむ形と推定される。胴部外面に縦方向の粗いハケ目が残るが、全体に摩滅が進む。137は胴部の膨らみが控えめで、内外面とも摩滅が進む。138は口縁端部がやや厚めに作られ、口縁部上面に横方向のハケ目が残る。

139は甕形土器で、ほぼ完形に復元できる。口縁部は逆L字に屈曲する。口縁部上面には、6本の刻目が施文されている。胴部は若干張り気味で、底部は胴部に比べて径が太めである。胴部下部には焼成後に外側からの穿孔が1ヶ所開けられており、廃棄時に穿孔された可能性がある。胴部外面は縦方向のハケ目、内面はナデで仕上げており、外面へ内面上部にかけて丹塗りを施している。

140～144は器台。140は上半部の一部を欠損するが、完形に復元できた。上部は径がやや小さく、端部は外反する。胴部の器壁は厚く、脚部は屈曲せずに緩く開く。内外面とも指オサエ、ナデで整形しており、外面に指圧痕が多く残る。141は下半部のみ遺存する。脚部は屈曲して外反する。内外面とも指オサエ、ナデで整形する。142は筒状の器形で、脚部はごくわずかに開く。中軸の孔は下面では楕円形に潰れている。外面に指圧痕、ナデの痕跡が残る。143は体部が直立し、脚部は端部で短く外反する。144は左右非対称で、外面には指オサエ痕と板状工具痕の両方が残る。

Fig. 85・86は掘削部最下層から出土した土器。大型の土器の破片が密集して出土したことから、本来の井戸の底にかなり近い部分に該当するとみられる。

145は甕形土器で、ほぼ完全な形に接合復元される。口径47.0cm、器高68.4cmの大型品である。胴部は肩が張り、頸部直下に細い断面三角形突帯を1条貼り付ける。外面は丹塗りの可能性もある。146は甕棺大の大型甕の上半部破片で、全周の1/3程度遺存する。口縁部は本来T字形だったものを、内側の突出部を打ち欠いてL字に整形している。口縁上面に十字形の線刻を多数施文する。胴部は頸部よりもやや太めの寸胴形で、砲弾形の器形とみられる。

147は甕形土器で、図上で復元した。口縁部はL字に屈曲して外側に突出し、胴部は球形に膨らんで胴部は張る。底部は径がやや大きく、底部中央に焼成後の穿孔が開けられる。外面には細かいハケ目が残るが、内外面とも大部分が摩滅する。148は胴部上半部分を欠く。口縁部は屈曲して外側に長く突出し、底部は平底である。胴部外面は縦方向ハケ目、内部はナデで調整する。口縁部破片は内外面の摩滅が著しい。149は壺形土器の胴部。体部は球形で、胴部中位に断面三角形突帯を1条貼り付ける。底部は平底を呈する。外面は縦方向ハケ目、内面はナデで器面調整を行う。

150・151は小型の甕。150は全体に歪みが目立つ器形で、胴部は袋状に膨らむ。外面は縦方向の粗いハケ目、内面は板状の工具でナデ上げ、口縁部はナデで整形している。151も器形が若干歪み、底部は角が丸く落ち、体部は肩が張る。口縁部は頸部で湾曲して外側に開く。外面は縦方向ハケ目、内面はナデで器面調整を行う。150、151ともに手捏ね成形とみられ、祭祀的性格を持つものとみられる。152は口縁部が屈曲して開き、胴部はやや強めに張る。外面に縦方向ハケ目が残るが、内面は摩耗が進む。153は口縁部がL字に屈曲し、底部は平底で薄く作られる。内外面ともに摩滅が進む。

5 4区の調査

(1) 壴穴住居

SC-041 (Fig. 88 Pl. 23)

調査区北西側で検出した方形の竪穴住居。非常に規模が大きいことや、北側壁面と南側壁面が平行していないこと、住居西側床面でわずかに段差がみられることなどから、複数の住居が切り合った状態で検出されたものと考えられる。検出状態での住居規模は南北長5.8～6.4m、東西幅5.2～5.4mで、住居東側の幅は西側の幅よりも狭くなっている。遺構面からの深さは10～20cmで、床面はほ

ほぼ平坦で、住居南側が北側よりも5cmほど標高が低くなっている。

住居北側の壁沿いには幅50cmのベッド状の段差がある。段の上面は遺構面から約10cmの深さで、上面は水平で傾斜はない。段差の南側には幅15~20cmの溝が彫られている。通常のベッド状遺構よりも段差の幅が狭く、住居に設置されたベッド状遺構ではなく、住居の切り合いによって生じた段差とみられる。

住居西側の床面では、長さ2mにわたって幅30~70cm、床面からの高さ5~6cmの段差が見られる。段差は北側が南側よりも幅広い。これも住居の切り合いによって生じた段差と推定される。

遺構覆土は暗赤褐色土～黒褐色土で、遺構の切り合いなどにより複雑な堆積状況を呈している。土層の堆積状況からも、複数の住居が重複している可能性が指摘できる。

住居南側の壁面は、SC-042と切り合っており、覆土が近似していて切り合いが不明瞭な箇所が見られる。また住居の床面で多数の柱穴が確認されるが、住居埋没後に上層から掘り込まれた古代の柱穴も多く、住居北側で切り合っている古代の溝SD-052も住居掘削時には明確に確認されておらず、「SC-041から出土」とした遺物にはこれら後世の遺構に伴う遺物も混入していることを記しておく。

出土遺物 (Fig. 89・90) Fig. 89は土師器、Fig. 90は須恵器である。154・155は瓶。154は鉢形の

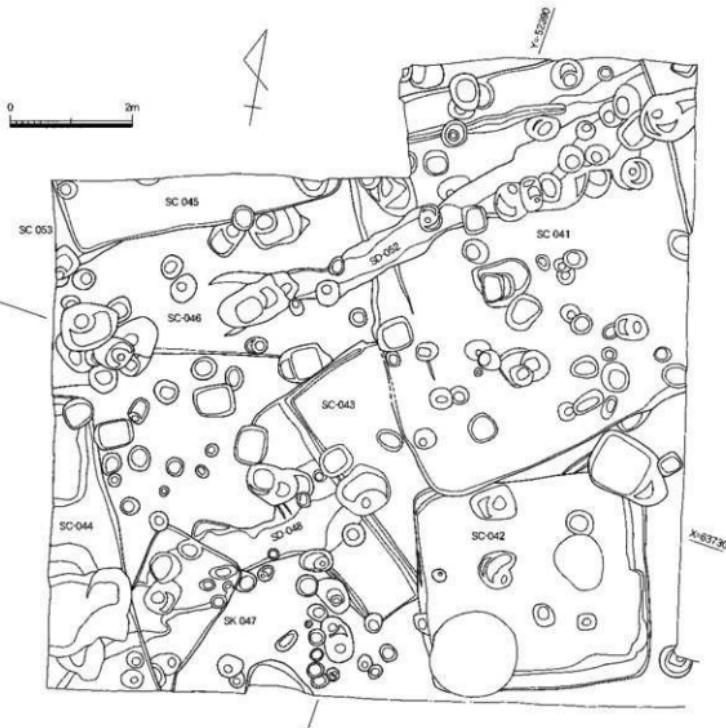


Fig. 87 第154次4区調査区全体図 (1/80)

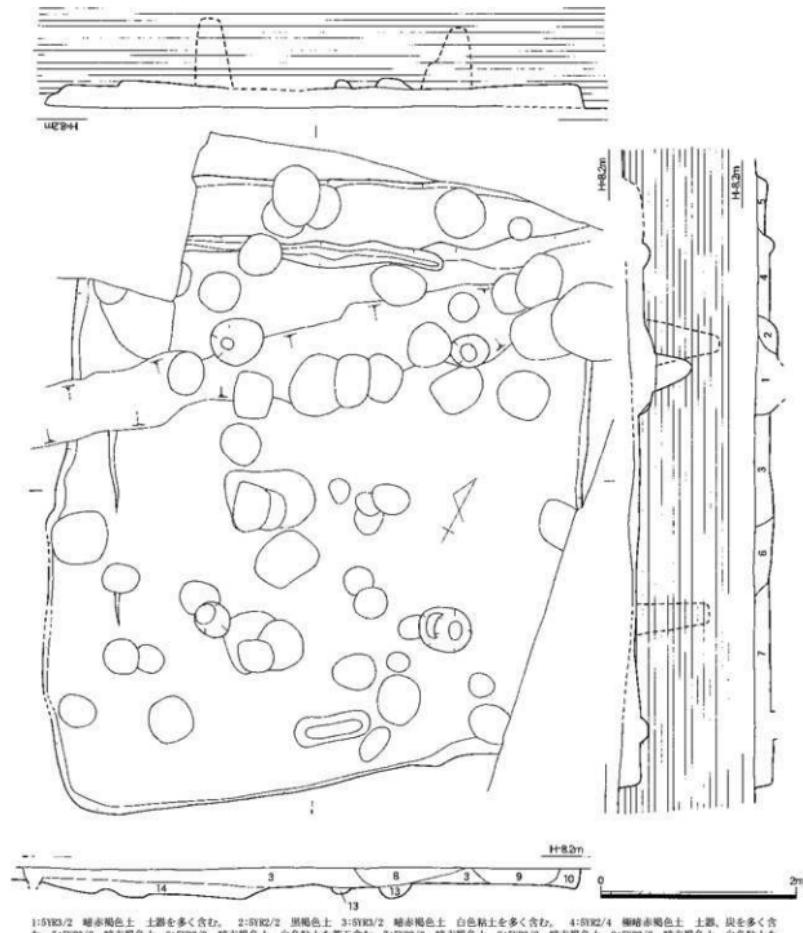


Fig. 88 SC-041 遺構実測図 (1/50)

体部に把手が付くもので、胴部下部を欠く。口縁部は緩く外側に外反して開き、体部は丸みをもつ。推定復元器高は 18 cm 前後になろう。外面は縱方向の粗いハケ目、内面はケズリの痕跡が残る。155 は高さのある体部に把手が付くもの。底部破片が直接接合しないが、復元器高は 27 cm 前後になる。口縁部は短く外反して開き、体部は直線的に下方に縮まる。外面は摩耗が進み、内面に縱方向のケズリ痕が残る。154 と 155 は器形が似ているが、胎土と焼成が全く異なる。

156 は小型の壺。体部は球形とみられる。外面は摩耗が進み、内面も剥落が著しい。157 は甕の上半部で、頭部から口縁部にかけて緩く外反し、胴部は頭部から大きく張り出す。内外面ともに摩耗が進み、調整は不明。158 は小型の甕か鉢の上半部。口縁はごく短く外反し、体部は胴が張らず、

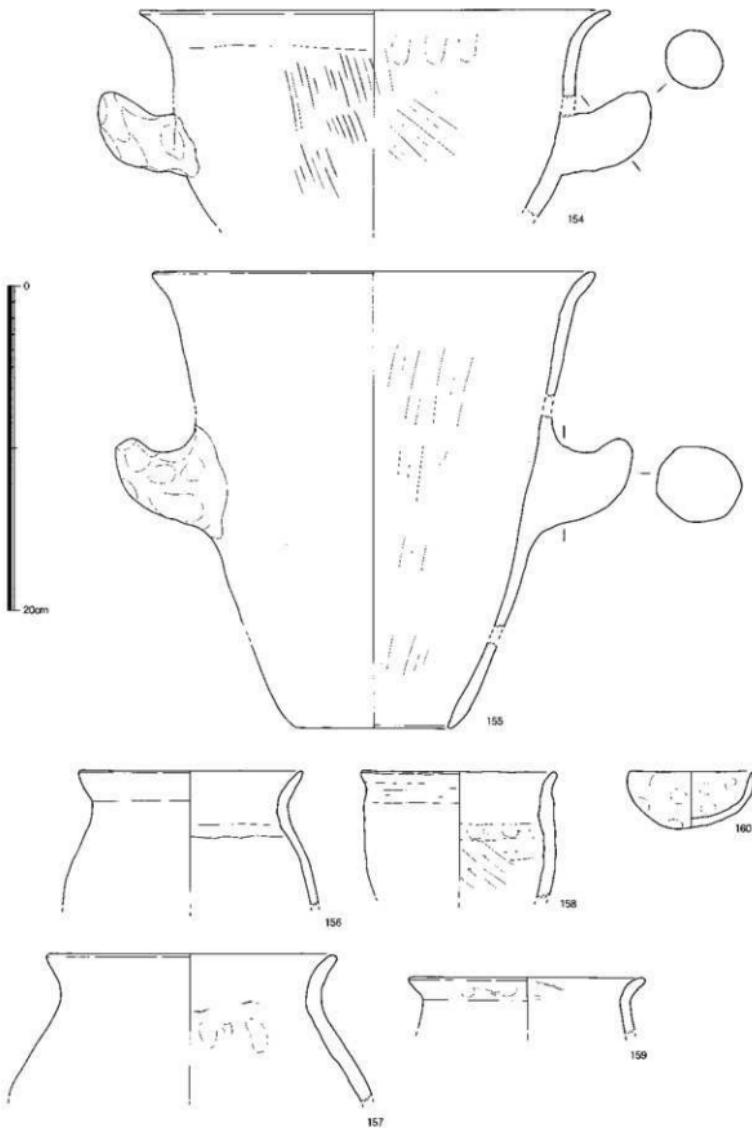


Fig. 89 SC-041 出土遺物実測図 1 (1/3)

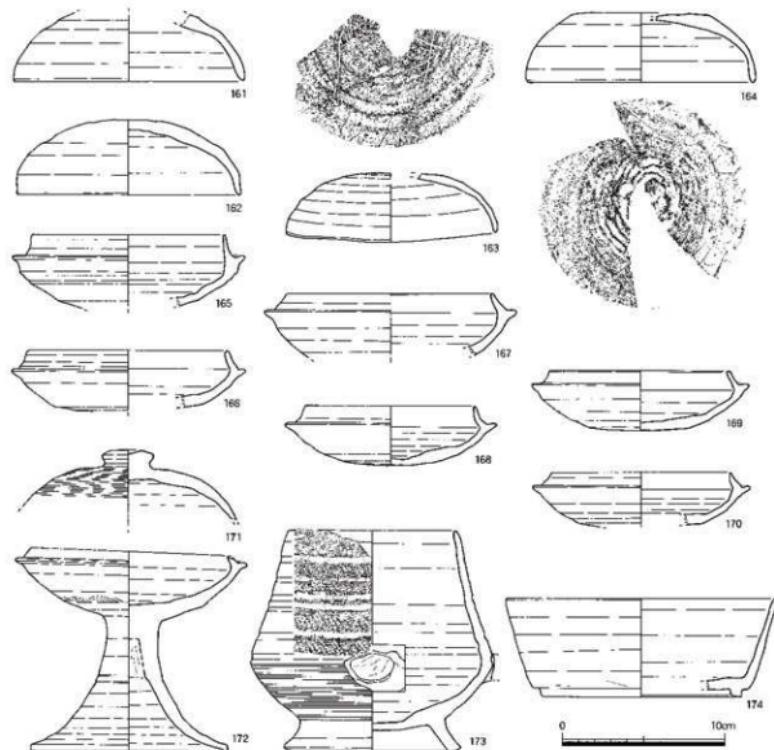


Fig. 90 SC-041 出土遺物実測図 2 (1/3)

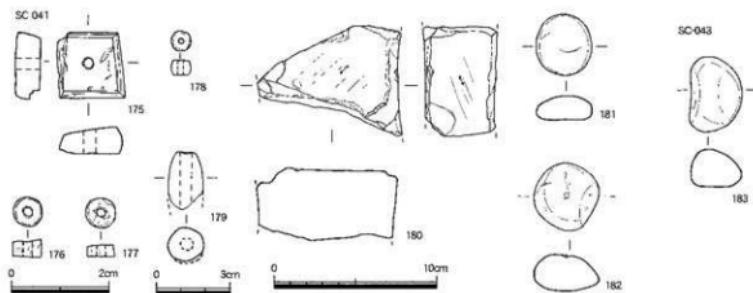


Fig. 91 4 区出土石製品・玉製品 (1/1・1/2・1/3)

円筒形に近い。表面に成形時小さな凹凸が残り、手捏ね感がある。外面は摩滅して調整は不明。内面は下部がケズリ、上部は横ナデで器面調整を行う。159は小型の甕の口縁部で、口縁部は短く太く外反する。内外面とも摩滅して、器面調整は不明。160は小型の鉢。丸底で、体部内外面に指圧痕が残り、手捏ねに近い。

161～164は須恵器坏蓋。162は体部がやや扁平に作られる。天井部は回転ヘラケズリ、体部外面は回転横ナデで、全体に摩滅が進む。163は器形が大きく歪んでいる。外面に大きなヘラ記号が描かれる。164は天井部が平坦で、体部は丸い。天井部は回転ヘラケズリ後、工具により平坦に調整する。165～170は坏身。165は受け部立ち上がりが長く直立し、166は受け部の立ち上がりは内傾する。167は体部が深めで、受け部は内傾する。168は体部は浅めで、受け部はわずかに内傾して高く立ち上がる。169は体部が浅く、受け部は直線的に内傾し、受け部立ち上がり端部は面取り状に整える。170は受け部立ち上がりが太く内傾し、時期的に後出の様相を見せる。外面全体に自然釉がかかる。外面底部は回転ヘラケズリで他の部分は回転横ナデ。

171は有蓋高坏の蓋。172とセットと見られる。摘みは中央部が凹み、天井部にはカキ目を施す。172は有蓋高坏で、蓋受け部の立ち上がりは太く、脚部は外側に大きく開く。坏部下部にハケ目状の器面調整痕が残り、脚部接合時の製作工程が垣間見える。173は台付坏。体部は下膨れで、上部は円錐台形で外面に5本の沈線と繩目叩き痕が残る。体部下部にはカキ目を施す。屈曲部に把手の接合痕が1ヶ所残る。台部は高台状で直線的にハの字に開く。174は須恵器坏で、高台が低く貼り付けられる。内外面とも回転横ナデで調整される。奈良時代以降の遺構からの混入とみられる。

175～178は玉製品。175は住居内のビットから出土したもので、滑石製で方形に切断され、各面とも研磨されて整えられる。176・177は滑石製白玉。178はガラス製白玉。黄色を呈する。179は土錘。小型で、半分を欠く。180は砥石。砂岩製で上面と側面に研磨面が残る。181は石弾。円

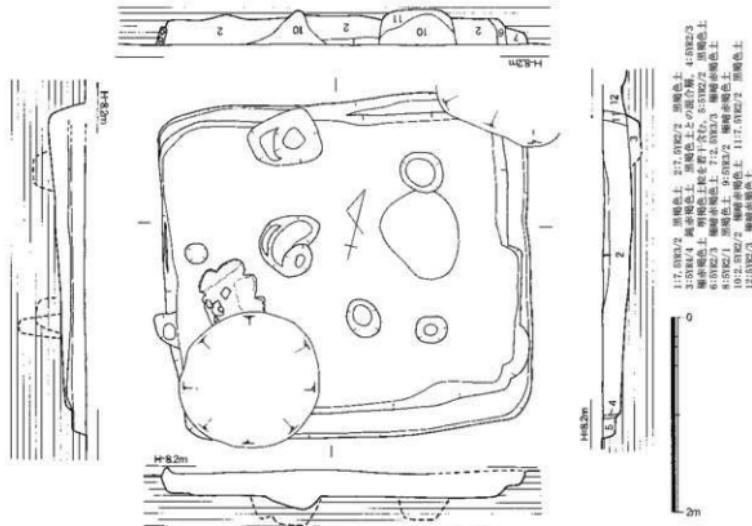


Fig. 92 SC-042 遺構実測図 (1/50)

形で扁平な形状である。182は石錐。中央部に紐を掛けた凹みが残る。

SC-042 (Fig. 92・93 PL. 24)

調査区南東側で検出した方形の堅穴住居で、SC-041に切られ、住居南西隅は擾乱で失われる。東西長3.7m、南北幅3.4mで、深さは20~25cmを測る。住居内の四周には幅15~20cmの段差が見られ、複数の堅穴住居が重複して建てられたものと推定される。

住居西側にカマドが1基検出されており、長さ50cm、幅80cmの規模で崩落したカマドの粘土が堆積している。カマドは白灰色の粘土を用いて作られ、カマド中央に高壙を倒置して支脚としている。高壙の下部には明褐色粘土をドーム状に積み上げて高壙を固定するための土台を作っており、支脚が仮設のものではないことが伺える。支脚の下部には焼土が円形に堆積する。建物の主柱穴は確定できないが、上屋は4本柱とみられる。出土遺物 (Fig. 94) 184は土師器壺の上半部。口縁部は外側に短く外湾する。外面は横方向の粗い短いハケ目、内面はケズリで調整する。

185はカマド中央部で倒置されていた土師器高壙。壙体部は外側に外反気味に開き、壙底部は丸みを持つ。脚部は外側に開く。この高壙は確実に住居に伴うものである。

186・187は須恵器壺蓋。186は器高が低く扁平で、口縁部が直立する。天井部外面に3本の平行線のヘラ記号を持つ。188・189は須恵器壺身。188は完形で出土し、受け部の凹みはほとんどない。

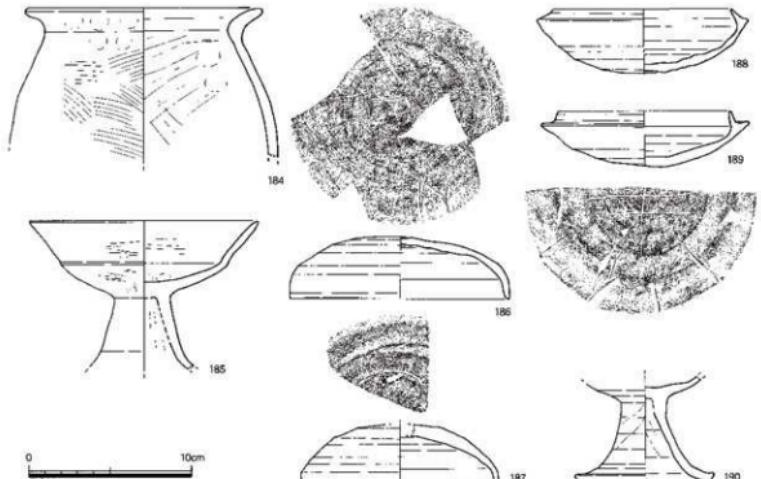


Fig. 94 SC-042 出土遺物実測図 (1/3)

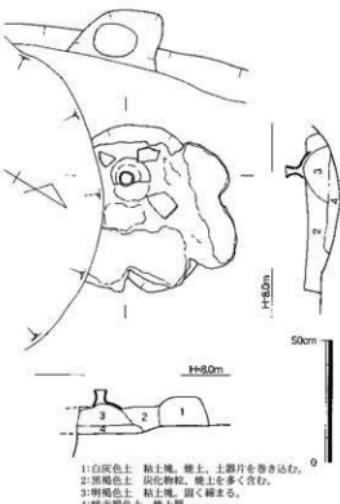


Fig. 93 SC-042 カマド実測図 (1/20)

- 1:白灰色土 粘土塊、燒土、土器片を含む。
- 2:明褐色土 灰化物粒、燒土が多く含む。
- 3:暗褐色土 粘土塊、固く締まる。
- 4:暗赤褐色土 燒土層。

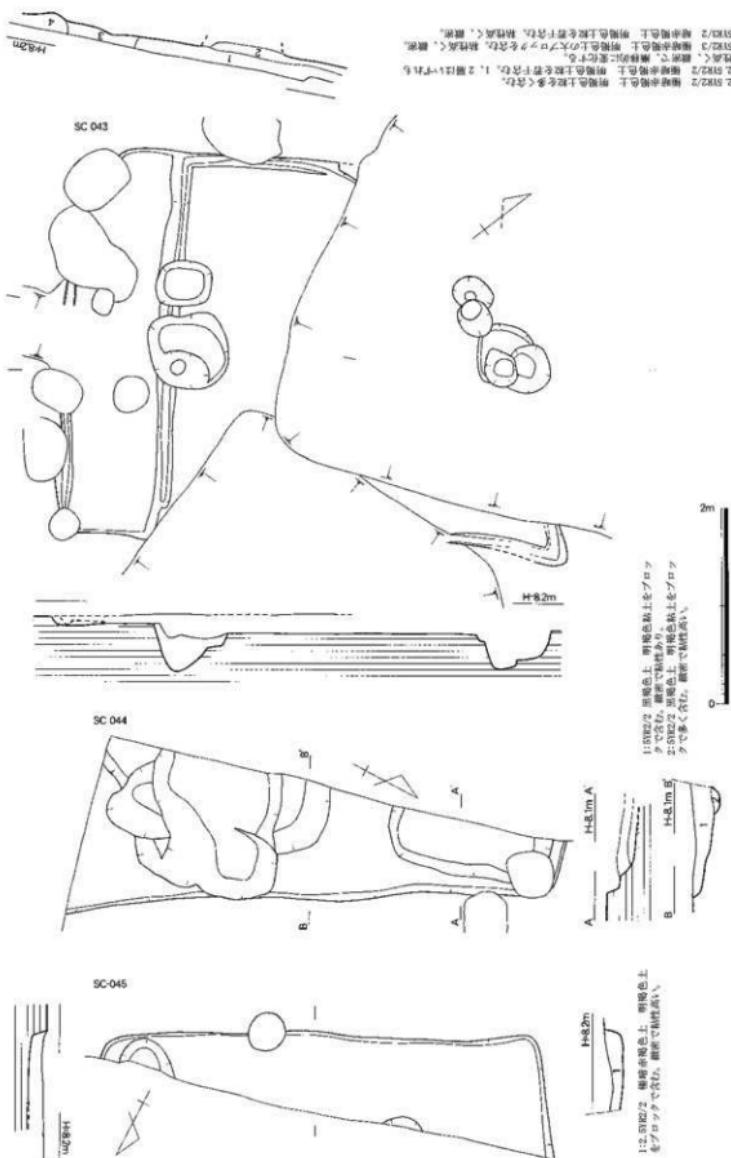


Fig. 95 SC-043~045 遺構実測図 (1/50)

重ね焼きの痕跡として器の至る箇所に他の個体の破片が付着し、外底部全体に自然釉が厚くかかっている。189はやや小型で、外面底部にヘラ記号が描かれる。190は須恵器高坏の脚部。脚部は外反しながら大きく開き、脚端部は面取りされる。他の須恵器よりも後出する時期のものであろう。

SC-043 (Fig. 95 PL. 25)

調査区中央で検出した堅穴住居。SC-041・SC-042 やその他の柱穴や溝にも切られ、住居西側部分と南東隅の部分が残るだけである。平面形は長方形で、全長 5.2 m 以上、幅 4.0 m の規模である。遺構面から床面までの深さは 20 cm で、住居西側に幅 80 cm のベッド状遺構が作られ、ベッド状遺構と床面との段差は 12 cm ほどである。周囲の壁沿いとベッド状遺構の際に幅 15 cm、深さ 3 ~ 5 cm の壁溝が掘られている。

住居の東側部分は南東側の壁溝部分しか遺存していないが、この壁溝は床面とベッド状遺構との境界とみられる。また主柱穴は住居西側のベッド状遺構の際に掘られている大型の柱穴と SC-041 内に位置する大型の柱穴の 2 基とみられ、主柱穴の切り合ひなどから、2 回以上の建て替えが考えられる。出土遺物 (Fig. 97・91) 遺構内からの出土遺物は少なく、摩滅したものが多い。また他の柱穴や溝との切り合ひが激しく、後世の遺構からの混入も多いとみられる。191 は須恵器小壺の口縁部。口縁端部は面取りされる。頸部は球形を呈するとみられる。183 は石弾。長さ 4.6 cm で、片方が凹む円形を呈する。自然石を利用したものである。

SC-044 (Fig. 95 PL. 25)

調査区南西隅で検出された方形の堅穴住居で、住居の西側と南側は調査区外に及び、住居の規模などは不明である。南北方向は 5.0 m 幅である。

床面には他の遺構による掘り込みが認められ、特に南側では住居以前の不整形の掘り込みが見られる。この掘り込みからの出土遺物はなく、どの時期に掘り込まれた遺構かは不明である。床面北側には方形の掘り込みが見られるが、覆土が住居覆土と同一で、床面との境界も曖昧であることから、住居に伴う掘り込みとも考えられる。

出土遺物 (Fig. 97) 192 は土師器甕の口縁部で、頸部から緩く湾曲して外反する。内外面に丹塗りの痕跡が残る。193 は須恵器坏蓋。やや小型で、天井部から口縁部にかけて丸い。外面天井部にヘラ記号がつく。

SC-045 (Fig. 95 PL. 25)

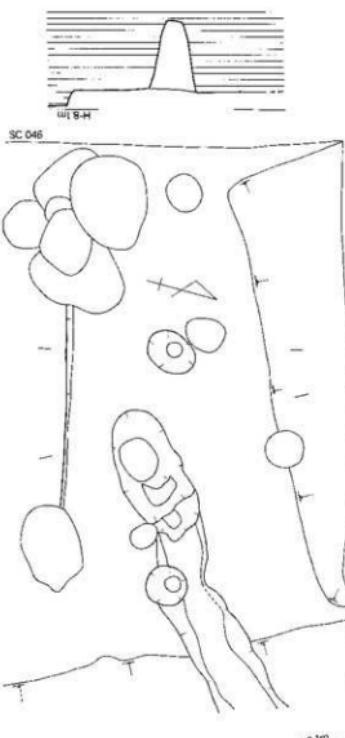
調査区北東側で検出された方形の堅穴住居で、住居北側の大部分は調査区外に及ぶが、住居の南東隅と南西隅が確認できることから、住居幅は 4.5 m であることが確認できる。遺構面から住居床面までの深さは 20 cm を測る。床面はほぼ平坦で、住居西端は東端に比べ 7 cm 低くなる。

出土遺物 (Fig. 97) 194 は弥生時代後期の袋状口縁壺の口縁部破片。全体に摩滅が進むが、赤色顔料の痕跡が頸部屈曲部にわずかに残る。このほかに住居内からは弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器破片が出土している。

SC-046 (Fig. 96)

調査区北東側で検出された方形の堅穴住居で、建物の南側壁面部だけが確認できるがその他の部分は SC-041、SC-043、SC-045 などの堅穴住居や溝 SD-052 に切られており、これらの住居や溝よりも先行して建てられた住居であることが確認できる。

住居の規模は確認できないが、幅 5.2 m 以上とみられる。床面までの深さは 15 cm で、床面に主柱穴となりうる大型の柱穴が 2 基確認されており、位置関係から 4 本主柱のうちの 2 本と推定できる。主柱穴は床面から 70 ~ 80 cm の深さまで掘られている。



SC-046
SC-053

1:SYK2/3 暗褐色赤褐色上
明褐色土と粘土を若干含む。土器片を
多く含む。SD-052壁上。
2:SYK2/4 暗褐色赤褐色上
明褐色土と粘土を多く含む。
3:SYK2/4 黄褐色土、粘性高く、緻密。地山土か。
4:SYK2/1 黑褐色土、明褐色土ブロックを多く含む。粘性高く、緻密。

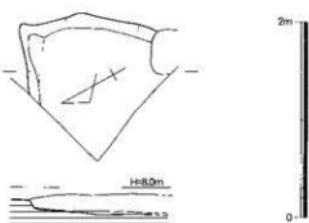


Fig. 96 SC-046・053 遺構実測図 (1/50)

出土遺物 (Fig. 97) 195 は須恵器壺蓋。天井が若干潰れているが、もともと扁平な器形だったことが考えられる。天井部は回転ヘラケズリで、体部は回転横ナデで調整される。196 は手捏ね土器の底部と見られる。丸底で、内外面に指圧痕が多く残る。

SC-053 (Fig. 96 PL. 26)

調査区北西端で検出された竪穴住居で、住居全体の南東隅だけが調査区内で確認できる。SC-045 と SC-046 に切られしており、この調査区の住居の中で最も先行する住居である。壁面は直線的ではなく、若干乱れており、住居隅角も直角ではない。

出土遺物 弥生土器、土師器の破片が出土した。土師器は古墳時代前期の甕とみられるが、摩耗が進む。ピット内からは須恵器を含む破片が出土し、ピットそのものが住居埋没後のものとも考えられる。細片が多く、図示できる遺物はない。

(2) 土坑

SK-047 (PL. 26)

調査区南西侧で検出された長方形の土坑で SC-044 に切られる。遺構面からの深さは 1~2 cm で、ごく浅い盤状を呈し、床面は平坦である。

出土遺物 (Fig. 97) ごく浅い土坑だが、須恵器破片が多く出土した。ただし、SD-048 との前後関係によつては、ほぼ全ての遺物が SD-048 に伴うものである可能性がある。197 は有蓋高壺の蓋で、摘みの痕跡が認められる。198 は須恵器壺蓋で、天井部は平たく作られ、回転ヘラケズリで仕上げられる。199・200 は須恵器壺身。199 は体部が深く、受け部立ち上がりは高く直立する。200 は体部が浅く、受け部は短く直立する。

(3) 溝状遺構

SD-048

調査区南西侧で検出された溝で、SK-047 と重複するが、覆土が近似しており前後関係は把握できなかつた。溝東側では SC-043 を切り、竪穴住居よりも時期的に後出すものである。断面形は浅いU字形を呈し、床面や壁面に凹凸が目立つ。床面の比高差は溝の両端でほとんどない。

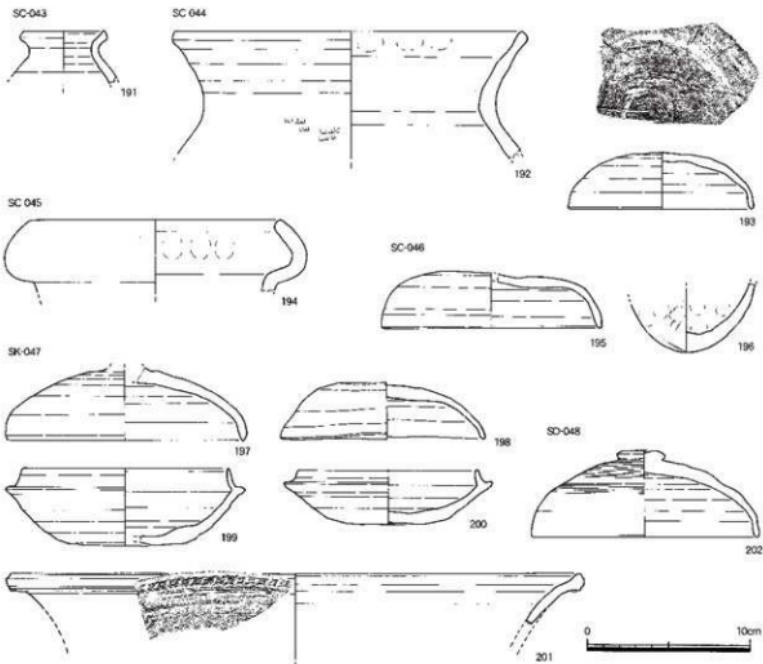


Fig. 97 4 区出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig. 97) 202 は有蓋高壺の蓋で、ほぼ完形で出土した。摘みは中央部に凹みが付く厚めのもので、天井部にカキ目が施される。このほか土師器高壺脚部の破片などがあるが、摩滅が進み、図示できるものは少ない。

SD-052 (Pl. 26)

調査区北西側で検出された溝状遺構で、SC-041とSC-046を切るとみられるが、堅穴住居の調査点では溝の有無を確認できず、SC-046の土層断面の観察により堅穴住居を切る溝状遺構を確認した。溝の断面形は逆三角形で、溝底部は丸みをもつ。覆土は極暗赤褐色土で、土器片を多く含む。

SD-052 と SD-048 は 1.8 m の間隔を持ってほぼ平行しており、何らかの関係があるとみられる。

出土遺物 (Fig. 98) 203 は土師器瓶で、155 とはほぼ同形同大である。口縁部は緩く開き、胴部はやや張りを持つ。204 は須恵器壺蓋で、ほぼ完形に接合復元できた。天井部は丸みを持ち、口縁は短く直立する。205 は土師器甕。頸部は細く縮り、口縁部は外湾して開き、口縁端部は薄く仕上げる。内外面とも摩耗が進んでおり、器面調整は不明だが、外面にわずかに丹塗りの痕跡が残る。

4) 小結

154 次調査では弥生時代の大型の溝状遺構を始め、弥生～古墳時代の堅穴住居や井戸などの集落を構成する建物や施設、中世の井戸や区画溝などが確認された。1 区の大型の溝状遺構は、153 次調

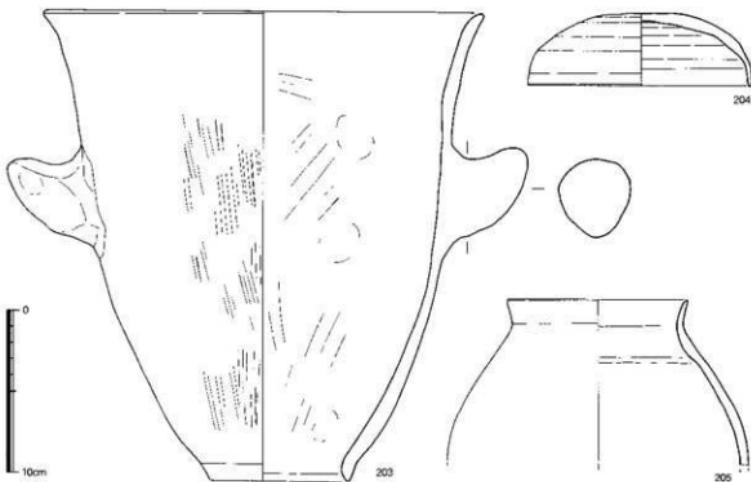


Fig. 98 SD-052 遺物実測図 (1/3)

査区の溝状遺構と一体となり、台地の頂部を東西に区画するものとみられる。溝の規模は那珂遺跡群でも類例が少なく、今回の調査区から北東に約400m離れた第18次調査で確認された幅2.1m、深さ3mの溝SD-01が規模、時期ともに近似したものである^(註1)。那珂遺跡群第20次調査でも幅2.7m、深さ1.6mの大型の溝が検出され、溝内から弥生時代中期後半～中期末の土器が大量に出土しており^(註2)、第23次調査でも幅2.5m、深さ1.2mの大型の溝SD-044から弥生時代中期末の遺物が一括投棄された状態で出土している^(註3)。20次と23次の溝は第114次調査SD-2030とともに連続する溝とみられ、台地を横断することが考えられている^(註4)。また那珂遺跡群の北側の比恵遺跡群でも140次調査で大型の溝状遺構が確認されている^(註5)。

これらの溝については、集落を囲む防御用の溝や、集落内を区画するための溝などの機能が想定される。溝の規模が非常に大きく、形態も整っていることから、高い土木技術を持った大人数の集団が施工主体であることは間違いない。

このような溝を必要とした弥生時代中期後半から弥生時代後期にかけての比恵・那珂遺跡群は、近隣の集落とは大きく異なる機能を有する集落だったとみられる。また、この溝に直接関連する時期の遺構は今回の調査では確認できなかったが、これも今後検討すべき課題である。

2区と4区を中心に確認された堅穴住居群は出土した遺物から古墳時代前期と古墳時代後期に比定されるものが多いが、そのほかに3区SE-032のような弥生時代中期末の井戸もみられることから、確認できた遺構の他にもさらに多くの住居が存在したものと思われる。

(註1):『那珂6』福岡市埋蔵文化財調査報告書第292集 1992

(註2):『那珂遺跡8』福岡市埋蔵文化財調査報告書第324集 1993

(註3):『那珂遺跡4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集 1992

(註4):『那珂56』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1082集 2010

(註5):平成27年12月現在、発掘調査中。



1) 1区全景（東から）



2) SD-001（南東から）



3) SD-001（北西から）



1) SD-001 土層断面（北西から）



2) SE-002 (西から)



3) SD-003 (北西から)



1) 2区全景(南西から)



2) 2区全景(北西から)

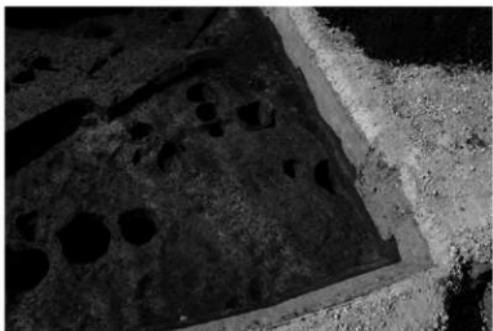


3) SC-024(西から)

PL.20



1) SC-026 (西から)



2) SC-027 (東から)



3) SC-028 (北から)



1) SC-028 土層断面（南から）



2) 3区全景（西から）

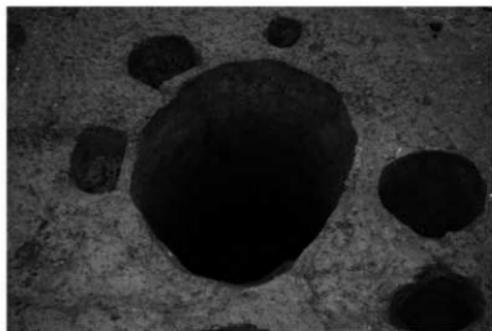


3) 3区作業風景（南から）

PL.22



1) SB-039 (北から)



2) SE-032 (西から)



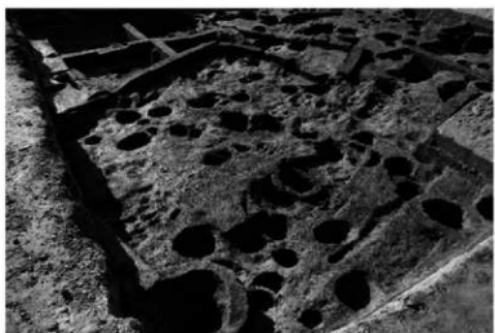
3) 4区調査区北壁土層断面 (南から)



1) 4区全景（東から）



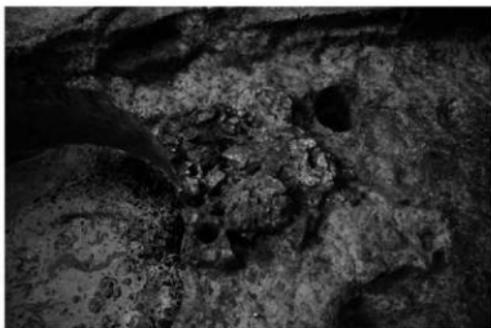
2) 4区全景（北西から）



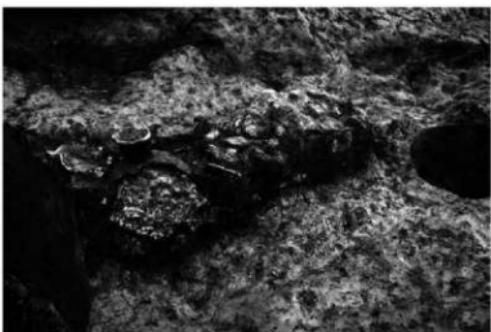
3) SC-041（北東から）



1) SC-042 (南から)



2) SC-042 カマド (東から)



3) SC-042 カマド断面 (北から)



1) SC-043 (南から)



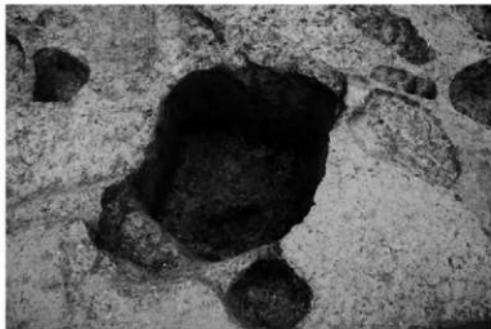
2) SC-044 (東から)



3) SC-045 (北西から)



1) SC-053 (南西から)



2) SK-047 (東から)



3) SD-052 遺物出土状況 (南東から)



1区 SD-001 出土遺物 1



12



17



19



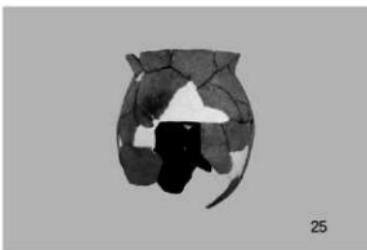
20



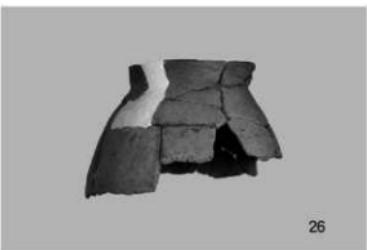
21



24



25



26



29



31



34



46



47



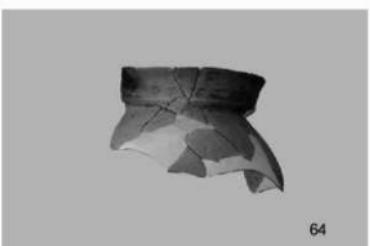
49



50



51



1区 SD-001 出土遺物 4・3区 SE-032 出土遺物

報告書抄録

那珂74

—那珂遺跡群第148・150～154次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1286集

2016年(平成28年)3月25日 発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 陽文社印刷株式会社

福岡市南区大楠2丁目4-10